

城下町の伝統と持続可能なまちづくり

—彦根城下町の過去、現在、そして未来—

令和3年9月

小 林 隆

目 次

| | |
|----------------------------|------|
| 本扉 | 1 頁 |
| 目次 | 3 頁 |
| 序章 彦根城下町の歴史を通観する | 7 頁 |
| 1 これからの日本を再構築するために | 8 頁 |
| 2 城下町に関する研究を振り返る | 10 頁 |
| 3 本稿のねらいと構成 | 12 頁 |
| 第1章 近世のはじまり | 19 頁 |
| 第1節 近世的政治権力の成立 ―豊臣秀吉の政治思想― | 20 頁 |
| 1 織豊期の歴史的意義 | 20 頁 |
| 2 天下掌握という意識の芽生え | 22 頁 |
| 3 摂関政治への回帰 | 24 頁 |
| 4 知行割りの論理 | 29 頁 |
| 5 天皇の命令・天の道理 | 35 頁 |
| 6 天下人とは何か | 39 頁 |
| 7 小括 | 41 頁 |
| 第2節 井伊家中の形成 | 43 頁 |
| 1 井伊家について | 43 頁 |
| 2 井伊家中の形成に関する従来の見解 | 44 頁 |
| 3 井伊直政の代の家臣団形成 | 45 頁 |
| 4 『侍中由緒帳』から読み解く井伊家家臣団の推移 | 47 頁 |
| 5 小括 | 53 頁 |

| | |
|--------------------------|-----|
| 第3節 彦根城下町の成立をめぐって | 55頁 |
| 1 佐和山城と彦根城についての誤解 | 55頁 |
| 2 佐和山城下町から彦根城下町への移住 | 57頁 |
| 3 佐和山城下の魚屋町について | 59頁 |
| 4 佐和山城下町の成立時期について | 61頁 |
| 5 小括 | 63頁 |
| 第2章 近世日本の成熟 | 65頁 |
| 第1節 彦根城と彦根城下町の形成過程 | 66頁 |
| 1 城下町に関する研究史 | 66頁 |
| 2 井伊直継の代の彦根城・彦根城下町 | 67頁 |
| 3 井伊直孝について | 74頁 |
| 4 井伊直孝の代の武家屋敷地の改造 | 75頁 |
| 5 井伊直孝の代の町人居住地の改造 | 78頁 |
| 6 彦根城下町の都市構造 | 80頁 |
| 7 小括 | 84頁 |
| 第2節 井伊家風の形成と発展 | 85頁 |
| 1 江戸時代における武士の変化 | 85頁 |
| 2 井伊家の役割 | 85頁 |
| 3 武門の家 ―江戸時代前期の井伊家― | 86頁 |
| 4 文武両道の家 ―江戸時代中期・後期の井伊家― | 88頁 |
| 5 井伊直弼の政治思想 | 89頁 |
| 6 小括 | 94頁 |

| | |
|-----------------------------|------|
| 第3節 彦根の下屋敷 ―文武両道の統治者であるために― | 95頁 |
| 1 文武両道の修練と下屋敷 | 95頁 |
| 2 城主の下屋敷 | 96頁 |
| ① 18世紀までの下屋敷（玄宮園） | 96頁 |
| ② 19世紀に造営された下屋敷（お浜御殿） | 101頁 |
| ③ 彦根城主の下屋敷の構成と機能 | 103頁 |
| 3 詰衆の下屋敷 | 103頁 |
| ① 下屋敷をあてがわれた身分 | 103頁 |
| ② 詰衆の下屋敷の位置 | 104頁 |
| ③ 詰衆の下屋敷の役割 | 104頁 |
| 4 下屋敷における立場をこえた交流 | 107頁 |
| 5 小括 | 108頁 |
| 第3章 近現代への展開 | 111頁 |
| 第1節 明治維新と彦根城下町 | 112頁 |
| 1 江戸から明治へ | 112頁 |
| 2 明治維新を迎えた彦根城 | 115頁 |
| 3 彦根城下町の衰退 | 117頁 |
| 4 小括 | 119頁 |
| 第2節 近現代の彦根城 | 120頁 |
| 1 彦根城の解体中止 | 120頁 |
| 2 陸軍省管轄下の彦根城 | 121頁 |
| 3 宮内省管轄下の彦根城 | 124頁 |
| 4 井伊家に下賜された彦根城 | 126頁 |
| 5 文化財としての保護 | 128頁 |
| 6 小括 | 130頁 |

| | |
|--------------------|------|
| 第3節 彦根市街地の復興 | 131頁 |
| 1 近代の波を乗り越えた城下町 | 131頁 |
| 2 彦根市街地の人口推移 | 131頁 |
| 3 教育施設の整備 | 133頁 |
| 4 産業振興 | 135頁 |
| 5 小括 | 137頁 |
| 終章 持続可能なまちづくり | 139頁 |
| 1 彦根城下町の移り変わり | 140頁 |
| 2 彦根市街地の変容 | 141頁 |
| 3 旧彦根城下における歴史まちづくり | 145頁 |
| 4 これからの旧彦根城下 | 147頁 |
| 参考文献一覧 | 151頁 |
| 図版一覧 | 156頁 |

序章 彦根城下町の歴史を通観する

1 これからの日本を再構築するために

日本の人口は、20世紀に急増し、20世紀末には1億2700万人に迫るレベルにまで至った¹。ところが、2008年をピークに、その後、人口減少に転じた。今後、少子高齢化の進行によって、人口減少が急速に進み、今世紀末の2100年には、日本の人口が4959万人になると推計されている²。

1億人をこえる人口レベルで設計された現在の日本の政治・行政、経済、社会などの諸制度は、今後、変更を余儀なくされる。例えば、過疎化の進行により、相続人が把握できない土地が増え、全国の私有地の約2割は所有者の把握が難しくなっており、その面積は、九州を上回る規模である。現行の土地制度では、所有者不明の土地は、そのまま放置されてしまう。国土管理上、ゆゆしき問題であり、人口減少時代に対応した土地の管理と継承のあり方について、早急な検討が必要である³。家屋についても、空き家が放置され、倒壊の危険が高まった空き家を、行政が空き家対策特別措置法にもとづいて解体するケースが見られるようになった。当然、解体費用は税金で賄うことになり、税金の無駄遣いと言わざるを得ない⁴。このような問題をいつまでも野放しにしておくわけにはいかない。22世紀までに、5000万人を切る人口レベルに見合う制度に再構築し、人口減少時代に対応する社会を作っていく必要がある。

人口減少時代にどのように対応していくのかという問題について、経済学者の諸富徹氏は、第2次世界大戦後の日本においては、都市への人口集中が大問題だったが、今後、人口減少が本格化するにつれて、都市における人口増加圧力が緩むことから、その時が都市生活の質的向上をはかるチャンスだと捉えた。そして、人口減少時代にふさわしい都市空間の再編を行うにあたっては、スプロール化し、拡大してきた都市を縮小させることが必要で、市民の自発的意思によりながら、経済活動と居住を複数の都市拠点に時間をかけて誘導し、都市の活力を維持し続けることが大切であると主張した⁵。諸富氏は、端的に言えば、中心市街地にさまざまな機能を集約し、そこに住民を集住させるコンパクトシティの構築を考えているのであるが、政府も、人が住まなくなり、衰退する地方から人々が首都

¹ 平成12年（2000）の国勢調査によると、その年の日本の総人口は1億2682万2843人。

² 増田寛也編『地方消滅』、中央公論新社、2014年、1～2頁。

³ 吉原祥子『人口減少時代の土地問題』、中央公論新社、2017年、iii～v頁。

⁴ 吉原祥子『人口減少時代の土地問題』、7～8頁。

⁵ 諸富徹『人口減少時代の都市』、中央公論新社、2018年、iii～v頁。

東京へ移住するのを抑えるため、さまざまな都市機能を集積した拠点を地方に設け、そこに人口を集める構想を打ち出した⁶。現在、コンパクトシティの構築が、日本国内で盛んに進められている。

諸富氏は、都市をコンパクト化するにあたっては、既存の都市ストック（資本・資産）を有効活用しながら、人口減少社会に適合した都市構造につくりかえることが必要であり⁷、その新しい都市を構築するためには、公共交通機関の近くに住民の居住地を集め、歩いて暮らせるまちをつくるのが大切だと述べている⁸。そして、豊かな自然が、住民の生活の質を高め、健康と精神的安定を保ち、さらには人々の生産性を高めることに寄与する効果をもつことから、自然資本の維持も大切であると主張している⁹。

実は、日本国内には、諸富氏が想起する中心市街地が、すでに各所に存在している。日本では、今から約4世紀前に全国各地にコンパクトシティが形成された。江戸時代の慶長期から寛永期にかけて、全国各地で一斉に誕生した城下町がそれである¹⁰。日本各地の城下町に武士と町人が集住し、軍事・政治・経済・文化など、さまざまな分野にわたる機能がそこに集積され、江戸時代の城下町は、地方の拠点都市としての役割を果たした。そして、ほとんどの城下町は、明治時代以降、時代の変化にともなって都市機能をそれぞれの状況に応じて変化させながらも、多種多様な都市ストックを保有し続けた。そして、まちの近くに鉄道の駅が誕生し、まちの中心に位置する城が緑豊かな公園や江戸時代の歴史を伝える史跡に変貌し、旧城下の多くが今でも日本各地の中心市街地として存続している。

これからの人口減少社会を見据えて日本各地にコンパクトシティを構築する際に、日本国内の中心市街地をすべてご破算にして、一から作り上げるのは得策ではない。コンパクトシティは、歩いて行ける範囲を生活圏とする。そうであるならば、地方自治体の範囲は広すぎる。日本各地の中心市街地となっている、駅に近く、緑豊かな公園や史跡がその中心にある江戸時代の城下町の範囲をコンパクトシティに整えるのが適切である。400年以上の歴史を有する旧城下を発展的に継続させ、今後の人口レベルに見合ったコンパクトシティに再構築すべきであろう。

⁶ 増田寛也編『地方消滅』、51～52頁。

⁷ 諸富徹『人口減少時代の都市』、98～99頁。

⁸ 諸富徹『人口減少時代の都市』、151頁。

⁹ 諸富徹『人口減少時代の都市』、146頁。

¹⁰ 藤田達生『藩とは何か』、中央公論新社、2019年、231頁。

2 城下町に関する研究を振り返る

旧城下をコンパクトシティに再構築するにあたっては、そのまちがどのような歴史をたどって今に至り、どのような特徴を有しているのかを把握しておく必要がある。

日本国内の城下町の歴史については、これまで、矢守一彦氏の歴史地理学的な研究¹¹や、西川幸治氏の比較都市史的な研究¹²、さらに、日本史の研究分野における吉田伸之氏を中心とする都市史研究¹³など、数多くの研究が蓄積されてきた。

城下町研究に取り組んだ研究者のうち、矢守一彦氏と西川幸治氏は、ともに滋賀県彦根市にゆかりのある研究者であり、彦根城下町に関する研究を行った¹⁴。

矢守一彦氏の研究は、第2章の第1節で紹介するように、城下町の発展段階を念頭において、城下町を5つのタイプに類型化した点に研究史上の意義がある。矢守氏の分類によれば、彦根城下町は、城下町が城郭の内と外の両方にまたがる内町外町型にあたる¹⁵。矢守氏は、彦根城下町の人口構成を詳細に論じるなど¹⁶、江戸時代の彦根城下町についての実証的な研究を重ねた。

西川幸治氏は、日本の都市史を体系的に論じた研究者で、とくに寺内町の研究が高く評価されている。江戸時代の城下町についても、重要な指摘をした。第2章の第1節で紹介するように、西川氏は、日本の近世にみられた武士・商人・農民という身分について、武士と農民を区別する「兵農分離」に加え、商人と農民を区別する「商農分離」政策が実施されたことによって、農民が農村に固定され、武士と商人が集住する城下町が誕生したことを指摘したうえで¹⁷、江戸時代の城下町がまわりから閉ざされた城郭を核とする計画的

¹¹ 矢守一彦『都市プランの研究 変容系列と空間構成』、大明堂、1970年。

¹² 西川幸治『日本都市史研究』、日本放送出版協会、1972年。

¹³ 吉田伸之『近世巨大都市の社会構造』、東京大学出版会、1991年。

¹⁴ 矢守一彦氏は、第二次世界大戦後、矢守家の故郷である滋賀県彦根市に引き揚げた。京都大学大学院に進学した頃からしばらくの間、『彦根市史』の編さんに携わり、彦根城下町の研究を行われた（木下良「矢守一彦君の死去を悼む」）。西川幸治氏は、彦根市で生まれ育ち、京都大学工学部の助手（のち講師）をつとめておられた時に、矢守氏とともに『彦根市史』の編纂委員となり、彦根城下町についての研究を深められた（『彦根市史』下冊、彦根市役所、1964年）。

¹⁵ 矢守一彦『都市プランの研究 変容系列と空間構成』。

¹⁶ 矢守一彦「城下町の人口構成—彦根藩の歴史地理的研究Ⅰ—」（『史林』37巻2号、1954年）。

¹⁷ 西川氏は、江戸時代の主要な身分を武士・商人・農民ととらえて、「兵農分離」「商農分離」という概念を提示した。しかし、この考えには江戸時代において商人とともに町人身分として把握された職人の存在が認識されておらず、また、江戸時代の村落で暮らす住民が、農業だけでなく、漁業や山仕事など、多様な仕事を行っていたということについての理解が見られない。西川氏が注目した武士、商人、

につくられた都市だった点に、教会や市場など、都市住民が集まる核を持つ自然発生的なヨーロッパの都市との違いを見出した¹⁸。

矢守氏の研究についても、西川氏の研究についても、日本の江戸時代の城下町についての理解を大きく前進させた、優れた研究であり、両者の研究が、現在においても城下町研究の根幹にある。しかし、日本全体の都市の発展を論じることには力点があり、特定の都市に焦点を絞り、その誕生から現在にいたる都市の展開過程を論じたものではなかったことから、日本国内の中心市街地の誕生から現在にいたるまでの歴史を踏まえたうえで、これからのコンパクトシティ化を論じようとする試みにおいては、物足りなさを感じる。

近年では、矢守氏や西川氏のような城下町の形成過程や江戸時代の城下町に関する研究だけでなく、たとえば、明治時代以降、陸軍の駐屯地とされた金沢を「軍都」と位置付け、明治時代以降の金沢城下町の変貌を論じた本康宏史氏の研究がある¹⁹。また、野中勝利氏は、日本各地の旧城下の中心に位置する城に焦点をあて、旧城下の変遷過程に関する研究を積み重ねている²⁰。しかし、本康氏の研究についても、野中氏の研究についても、明治時代以降の研究で、江戸時代についての論及が乏しいため、城下町の誕生から現在に至るまでの展開過程をたどることが難しい。

これまでの城下町研究は、近世史あるいは近代史という特定の時代の研究として行われ、近世から近現代にかけての城下町の歴史を通観する研究は皆無に近いと言わざるを得ない。日本国内の城下町がどのような歴史をたどって今に至り、どのような特徴を有しているのかを検討するためには、城下町が誕生した近世から現在にかけての歴史を通観し、城下町の変化を構造的に論じる必要がある。近世や近現代といった時代の枠組みにとらわれることなく、城下町の歴史をダイナミックに通観する試みが、城下町の伝統を有する中心市街地のこれからのコンパクトシティの再構築のあり方を考える際に必要となろう。

農民については、城下町に集住して統治をになった武士、城下町で暮らす町人、村落で暮らす百姓と認識し直し、城下町に集住した武士と町人が村落で暮らす百姓と身分的に区別され、さらに、城下町においても、武士と町人が居住地を分けられ、身分的に区別されていたと理解すべきである。

¹⁸ 西川幸治『日本都市史研究』。

¹⁹ 本康宏史『軍都の慰霊空間—国民統合と戦死者たち—』（吉川弘文館、2002年）。

²⁰ 野中勝利「近代の甲府城址における公園化の背景と経緯」（『ランドスケープ研究』76（5）、2013年）、同「近代における兵庫県による明石公園の拡張・整備と風致の位置づけ」（『公益社団法人日本都市計画学会 都市計画報告集』No. 15、2017年）、同「近代の和歌山城址における和歌山県の借用による公園化と和歌山市の買収による公園化」（『ランドスケープ研究（オンライン論文集）』Vol. 10、2017年）。

3 本稿のねらいと構成

本稿は、江戸時代前期に誕生した城下町の中から、近江国の彦根城下町を選び、そこを統治拠点とした近世的政治権力の特徴や変貌をにらみつつ、近世史研究の枠組みに閉じこめることなく、彦根城下町とその都市の核となる彦根城の近世から近現代にかけての歴史を通観する試みである。そして、その通史的検討をふまえて、過疎化が進行する旧彦根城下の人口をどのように確保す



写真1 彦根城天守

注) 本稿に掲載した写真はすべて筆者が撮影。

るのかという課題にねらいを定めて、旧彦根城下の将来を展望することを目論んでいる。

彦根城下町を研究対象とすることには、大きな意義がある。彦根城下町の核となる彦根城は、慶長8年（1603）2月12日に徳川家康が右大臣と征夷大將軍に任じられ、名実ともに天下人になったその月に、徳川家康を支えた重臣井伊家の新たな居城として築城を命じた城であり、日本国内を天下人である徳川宗家と大名・旗本が分割統治する統治体制をこれから築いていくことを日本国内に宣言した城である。江戸時代を通じて彦根城を預かった井伊家は、幕末に至るまで、徳川宗家が理想とした統治体制を具現化した彦根城や彦根城下町の形を大きく変えることはなく、徳川宗家の理想像をまわりに示し続けた。江戸時代の彦根城や彦根城下町を研究することによって、江戸時代の日本の統治に関する特質が見えてくる。そして、彦根城下町の江戸時代から現在にいたる歴史を検証し、今後の旧彦根城下のまちづくりを展望することは、日本のこれからのまちづくりの一つのモデルケースになる。

本稿では、日本国内の中心市街地の将来を見通すため、彦根城下町に焦点をあてて、さまざまな資料を用いて、江戸時代の彦根城下町と彦根城下町の伝統を受け継ぐ明治時代以降の旧彦根城下の歴史の分析を行う。

ところで、従来の歴史研究では、古文書が主たる研究の素材とされてきた。彦根城下町については、江戸時代を通じてこの都市の中核に位置する彦根城の城主であり続けた井伊家に関わる膨大な古文書が伝わり、彦根城博物館に所蔵されている。井伊家に伝来した古

文書のうち、江戸時代に作成された27,800点が国の重要文化財に指定されている²¹。東京大学史料編纂所によって幕末の主要な古文書の読解が進められ、その研究成果が『大日本維新史料 井伊家史料』として活字化され²²、一般公開されている。また、彦根市においても、彦根藩井伊家伝来古文書の読解や研究が進められ、『彦根城博物館叢書』²³や『新修彦根市史』²⁴などとして活字化され、井伊家の史料を歴史研究に活用する環境が整えられた。本稿では、井伊家に伝来し、厳密な解読作業を通じて活字化された数多くの史料を研究の手がかりとする。

しかし、本稿が手がかりとするのは、活字化された古文書だけではない。今に伝えられた古文書は、所有者に都合の良い歴史を伝えるために意図的に残されたものであることが多く、歴史の一断面しか示していない。より多くの歴史情報を得るには、古文書以外のさまざまな資料を、厳密な史料批判を加えながら活用すべきである。江戸時代に作製された古絵図は、当時の状況を知ることができる貴重な資料であり、明治時代以降に作製された地籍図や地形図も、土地の状況の変化を語ってくれる。さらに、新聞やパンフレットなどの刊行物、古写真、そして、地元の言い伝えさえも、使い方を工夫すれば学術研究の素材となる。本稿では、オーソドックスな歴史研究がよりどころとする古文書だけでなく、古絵図、古地図、新聞、パンフレット、写真、言い伝えなど、ありとあらゆる資料を駆使して、彦根の歴史を解明してゆく。

本稿の構成は、次の通りである。

第1章の「近世のはじまり」では、日本において、近世的政治権力とその統治拠点である城下町がどのように誕生したのかを論じる。

第1節の「近世的政治権力の成立―豊臣秀吉の政治思想―」では、日本において近世という時代の扉が開いた織豊期における近世的政治権力の成立過程をたどりながら、近世的政治権力の特徴を浮かび上がらせる。具体的には、豊臣秀吉の伝記である「天正記」を素材として、秀吉が、天下統一を進めていく中で、中国と日本の古代の統治体制を念頭に置

²¹ 文化庁国指定文化財等データベースより。

²² 東京大学史料編纂所ホームページより。

²³ 佐々木克『彦根城博物館叢書1 幕末維新の彦根藩』（サンライズ出版、2001年）をはじめとする計7冊の彦根城博物館叢書は、彦根藩井伊家文書の研究成果をまとめた書籍であり、井伊家や彦根藩の研究を行う際の基本となる。

²⁴ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』の第6巻（史料編 近世1）や第8巻（史料編 近代1）には、彦根藩井伊家文書の重要史料が収録されている。また、第2巻（通史編 近世）や第3巻（通史編 近代）、第10巻（景観編）も、井伊家や彦根藩に関する研究を行うにあたって参照すべき書籍である。

き、在地領主制を否定して、統治をになう武士たちを、日本古代の貴族たちが都城に集住したように、城を中心に集住させ、組織的に軍事と政治を担う政治のしくみを構築したことを明らかにする。そして、秀吉が、天皇に代わって天から天下の支配を委ねられた天下人として、武士、公家、寺院などに天皇の命令を下し、その命令に背いた者を天罰が下ったという理屈で攻め滅ぼすようになり、秀吉が構築した統治のしくみや政治思想が江戸時代に引き継がれたことを示唆する。本節は、拙稿の『『天正記』から読み解く豊臣秀吉の政治思想—天下人とは何か—』²⁵を本稿のねらいに沿って再構成したものである。

第2節の「井伊家中の形成」では、江戸時代を通じて彦根城主をつとめた井伊家当主に従う家臣によって構成される井伊家中の形成過程を明らかにする。在地領主制を否定して成立した近世日本の政治権力は、組織的統治を基本原理とし、城主の家の当主と家臣の家の当主が主従関係を結び、家臣たちが主君の居城に集住し、城主の統治行為を支える家中を形成した。徳川家康に従って先祖伝来の地である遠江国井伊谷（現静岡県浜松市北区引佐町井伊谷）を離れた井伊直政は、織豊期に在地領主から軍事と政治を担う統治者になった。そして、統治者としての任務を果たすため、その後、全国各地から有能な武士を召し抱えた。井伊家に従った武士たちは、井伊家当主のもとで井伊家中を形成し、井伊家の家業として軍事と政治・行政を担当し続けた。井伊家中の家風が定まり、家制度が定着した17世紀後半以降は、新規召し抱えが激減し、家臣の分家によって井伊家中が維持された。本節は、拙稿の「井伊家家臣団の形成」²⁶に必要な修正を加えて再録したものである。

第3節の「彦根城下町の成立をめぐる」は、彦根地方における城下町の誕生について論じたものである。統治を担う武士たちが城を中心に集まり、組織的に統治を行ったが、武士の暮らしを支える商人や職人たちも城のまわりに集まり、城を中心とする都市、すなわち、城下町が誕生した。彦根地方においては、すでに織豊期において佐和山城を中心とする城下町が形成され、そこで暮らす商人や職人たちが、農山漁村からの移住者であるにも関わらず、自分たちが町人であると意識し、井伊家中とともに彦根城下町に移住した。本節は、拙稿の「城下町形成史私論」²⁷をベースとしている。

第2章の「近世日本の成熟」では、城や城下町が統治拠点として整えられ、武士たちが文武両道を担う統治者へと鍛え上げられていく過程を扱う。

²⁵ 織豊期研究会編『織豊期研究』第22号、2020年に掲載。

²⁶ 淡海文化財論叢刊行会編『淡海文化財論叢』第11輯、2019年に掲載。

²⁷ 淡海文化財論叢刊行会編『淡海文化財論叢』第8輯、2016年に掲載。

第1節の「彦根城と彦根城下町の形成過程」では、井伊直継の代に誕生した彦根城と彦根城下町が、その次の井伊直孝の代に統治拠点にふさわしい城や城下町に整備されたことを明らかにする。井伊家が預かった彦根城は、西国の諸勢力を抑える軍事拠点の位置にあることから、急ピッチで建設された。その後、井伊直孝の代に築城が再開され、三重の堀を巡らし、統治拠点にふさわしい城に整えられた。城山の麓に何棟もの建物によって構成される城主の御殿が造営され、そこが政務の場となった。同時に、彦根城下町の改造も行われ、城主の住まいを中心に、重臣の住まい、侍と職能集団の住まい、徒歩・足軽と一般町人の住まいが、同心円状に配置され、それらのエリアが堀によって区別される彦根城下町が完成した。これらのエリアのうち、中堀より内側の城主と重臣が集住した統治拠点が、領民や他領の者たちに閉ざされた空間として厳重に管理された。本節は、拙稿の「彦根城下町の改造」²⁸を再構成したものである。

第2節の「井伊家風の形成と発展」では、井伊家当主が文武両道を兼ね備えた統治者に成長を遂げていく過程をたどる。井伊家は、井伊直孝の代までは武門の家として徳川宗家を支えたが、17世紀後半に、徳川宗家の政治方針が武断政治から文治政治に転じたのにもなって、文武両道を重んじる家が変わった。井伊家歴代当主の中で最も有名な井伊直弼は、青春時代に埋木舎で文武両道の修練を重ねて自己研鑽に励んだ人物として知られているが、兄の死によって予期していなかった井伊家の継承者となった。井伊直弼は、井伊家当主となって彦根城を預かり、その後、大老に就任すると、私心を捨て、徳川宗家を支える井伊家の家業を忠実に果たすことによって、治国安民をはかり、日本の独立を維持しようとした。本節は、本稿のために新たに書きおろしたものである。

第3節の「彦根の下屋敷—文武両道の統治者であるために—」では、彦根の下屋敷の役割を明らかにする。江戸時代の日本各地で統治を担った城主と重臣たちは、城の中心部分に設置された御殿や武家屋敷を住まいとしていたが、城下町の外縁部やその近隣地域に下屋敷を構えた。地方の下屋敷は、これまで研究が乏しく、その実態が明らかでなく、一般に遊興の場だと認識されてきた。彦根の下屋敷に関する資料を分析すると、そこは、城主や重臣たちが文武両道の修練を積み、統治者としての資質を高める場であるとともに、城主と重臣が家族ぐるみの交流を行って権力集団としての結束を保つ役割も果たしており、遊興の場にとどまらない、統治者としてのアイデンティティを保つのに必要な場所だったことがわかる。本節も、新たに書きおろしたものである。

²⁸ 淡海文化財論叢刊行会編『淡海文化財論叢』第7輯、2015年に掲載。

第3章の「近現代への展開」では、江戸時代の統治拠点だった城や城下町が、明治時代以降にどのような歴史をたどったのかを、旧彦根城下に焦点をあてて明らかにする。

第1節の「明治維新と彦根城下町」では、明治維新の時期における彦根の変貌を論じる。明治2年（1869）の版籍奉還によって、天皇を頂点とする中央集権的な統治体制が復活し、明治4年（1871）の廃藩置県によって、武士が城や陣屋を拠点に軍事と政治の両方を担う統治のしくみに終止符が打たれた。こうした日本全体の動きの中で、統治拠点だった彦根城が政治拠点と軍事拠点の役割を失い、彦根城を中核として形成・維持されてきた彦根城下町についても、士族の相次ぐ転出によって危機的な状況に陥った。本節も、新たに書きおろしたものである。

第2節の「近現代の彦根城」では、まず初めに、明治11年（1878）に明治天皇が彦根城の解体中止を命じてからの彦根城をめぐる動きを論じる。すでに武士の時代が終わったにも関わらず、彦根城は、旧彦根城主の井伊家の力を借りて、保存と活用のはざまを揺れ動きながら、湖国の風景を楽しむ公園、観光地として活用されるとともに、彦根が井伊家の城下町だったことを伝える史跡、ランドマークとして維持・管理された。本節は、拙稿の「彦根城の保存と活用ー近代の彦根城ー」²⁹をベースとしている。

第3節の「彦根市街地の復興」は、彦根城下町の明治時代以降の変貌を論じたものである。彦根城下町は、明治時代前期に、職を失った多くの武士たちの転出によって衰退の危機に直面した。しかし、旧彦根城主の井伊家をはじめ、地元の士族や近江商人たちが資金を提供し、学校や製糸工場などの社会資本を整備したことによって、旧彦根城下は、教育のまち、ものづくりのまちとなり、明治時代半ばに人口の減少が増加に転じて、湖東地方の中心市街地として復興した。本節は拙稿の「彦根城下町の復興」³⁰と「現彦根市域における近代の人口移動について」³¹を再構成したものである。

終章の「持続可能なまちづくり」では、さまざまな学術雑誌に掲載された拙稿³²などをも

²⁹ 淡海文化財論叢刊行会編『淡海文化財論叢』第12輯、2020年に掲載。

³⁰ 淡海文化財論叢刊行会編『淡海文化財論叢』第10輯、2018年に掲載。

³¹ 彦根史談会編『彦根郷土史研究』第50号、2016年に掲載。

³² 「語り部たちのまなざしー彦根市民の伝承活動を素材としてー」（『神戸大学史学年報』11号、1996年）、「自治体史の展望ー『平成の大合併』にあたってー」（『新しい歴史学のために』250・251合併号、2003年）、「『新修彦根市史（第十巻 景観編）の試みー『市民の市史』をめざしてー」（『地方史研究』第62巻第4号、2012年）、「A Study on Improvement of the Local Image: Honor

とに、高度経済成長期以降の彦根市内の社会状況を明らかにしたうえで、旧彦根城下のまちづくりに焦点をあて、そこで、現在、どのようなまちづくりが行われているのかを明らかにし、彦根城を中核とする市街地を持続させるために必要な今後のまちづくりを展望する。

第 1 章 近世のはじまり

第1節 近世的政治権力の成立 ―豊臣秀吉の政治思想―

1 織豊期の歴史的意義

織豊期は、日本史の大きな画期の一つであり、この時期から日本の近世が始まる。

藤田達生氏は、織豊期に、織田信長とその後継者である豊臣秀吉が、全国の領主から本主権を奪って領地を収公し、有能な人物に領土・領民・城郭を預ける革命を行ったと主張した³³。戦国時代までは、武士の間では、先祖代々継承してきた領地の支配を認められる代わりに軍役につくという封建的主従関係が結ばれていたが、織豊期に入ると、その関係が力を失い、武士の間で新たな主従関係が結ばれた。藤田氏が「鉢植大名」という象徴的な用語で説明しているように、織豊期に、日本各地の支配を任された武士たちの多くが縁もゆかりもない土地に移し替えられ、そこで新たな支配体制を構築した。中世の武士たちが命をかけて守り続けてきた本領に対する在地領主権が織豊期に否定されたのである。

戦国時代までの武士たちが、それぞれ在地に拠点を置き、個別に領地を支配していたのに対して、近世の武士たちは、在地から切り離されて城を中心に集住し、城主の家の当主と家臣の家の当主が主従関係を結び、公儀が定めた法と城主と重臣の合議によって定められた法にもとづいて、組織的に支配を行った。

ところで、日本国内の統一を果たした豊臣秀吉の政治については、関白の地位に昇りつめたことなどから、主君の織田信長や、次の政治権力者となった徳川家康に比べて、政治権力をふるう際に、天皇の権威に依存する傾向が強かったことを疑う者はいない。しかし、家臣への知行割りなど、その支配体制については、中世以来の封建的主従関係を念頭に置いたかのような理解をしている研究者が少なくないように思われる。藤田氏の主張、すなわち、織豊期において、全国の領主から本主権を奪って領地を収公し、有能な人物に領土・領民・城郭が預けられたという理解を踏まえると、封建的主従関係が織豊期にも引き継がれたとは考えられない。藤田氏が「収公」という用語を使ったのは、織豊期のうち、豊臣秀吉が構築した政治体制には、復古的な側面があり、秀吉が、天皇を頂点とする国郡制的支配体制の構築を志向していたと考えてのことであると推察する³⁴。豊臣秀吉は、武士の棟梁として、秀吉と封建的主従関係を結んだ武将たちに恩賞として領地をあてがったのでは

³³ 藤田達生『天下統一』（中央公論新社、2014年）、151頁など。

³⁴ 藤田達生『藩とは何か』（中央公論新社、2019年）、67頁。

なく、天皇の権威を利用し、天皇の政治の代行者として、秀吉の支配下に入った武士たちに領地をあてがった。さらに、秀吉は、中国の周代に誕生した天命思想に着目し、天から地上の支配を委ねられた天下人として、天皇にかわって支配を行うという理屈で、自己の政治的権威を正当化した。豊臣秀吉の政治体制や支配体制には、古代の日本と古代の中国への復古的側面があったことを、我々は認識すべきである。

本節では、豊臣秀吉の伝記である「天正記」³⁵を素材として、秀吉がどのような政治体制や支配体制を構築しようとしたのか、その体制をどのような政治思想によって正当化しようとしたのかを明らかにする。

「天正記」は、「外典第一」と称せられた博識広才の大村由己が書いた豊臣秀吉の伝記である³⁶。その名の通り、三木合戦から小田原城攻略まで、秀吉の天正年間の活躍が記されている。全12巻のうち、「播磨別所記」「惟任謀反記」「柴田合戦記」「紀州御発向記」「関白任官記」「四国御発向并北国御動座記」「聚楽行幸記」「小田原御陣」の8巻が現存している。

「天正記」は、客観的な立場から歴史的事実を記録した歴史書ではない。秀吉の活躍を宣伝し、秀吉の政治権力を正当化するため、秀吉の命令で書かれた著作物である³⁷。史実を曲げて創作した箇所が少なくないため³⁸、歴史研究で使用する際には、信頼できる他の一次史料と突き合わせて事実確認を行うなど、厳密な史料批判が必要である。ただし、リアルタイムで書かれた著作物であることから³⁹、そこには、その当時の秀吉の考えが色濃く反映されているはずである。「天正記」は、秀吉の政治思想の解明、すなわち、秀吉の政治権力をどのような理屈で正当化しようとしたのかを読み解こうとする試みには、最適な史料だと言える。

それでは、時代の流れにしたがい、他の一次史料を参照しながら、「天正記」の分析を進めていく。なお、本節では、考察の対象を、秀吉が天正11年（1583）に柴田勝家らを倒してから天正18年（1590）に北条氏を倒すまでの間とする。

³⁵ 桑田忠親校訂『戦国史料叢書一 太閤史料集』（人物往来社、1965年、以下、『太閤史料集』と略す）に収録された「天正記」を底本とする。

³⁶ 玉懸博之「『天正記』から『太閤記』へー近世的歴史観の発生ー」（三鬼清一郎編『戦国大名論集』18 〔豊臣政権の研究〕、吉川弘文館、1984年）、417頁。

³⁷ 『太閤史料集』、75頁など。

³⁸ 「天正記」では、例えば、秀吉は、京都で宮仕えをしていた母が尾張国に戻ってから程なく生んだ子どもだと記されている（『太閤史料集』、85頁）。

³⁹ 例えば、安土城築城から織田信長の葬儀までを扱った「惟任謀反記」は、信長の葬儀の直後、天正10年（1582）10月に記されている（『太閤史料集』、23頁）。

2 天下掌握という意識の芽生え

秀吉は、天正11年（1583）4月に柴田勝家を越前国北ノ庄城（現在の福井県福井市に所在）において、同年4月あるいは5月に織田信孝を尾張国安養院（現在の愛知県知多郡美浜町に所在）においてそれぞれ自害させ、同年7月に伊勢国長島城（現在の三重県桑名市長島町に所在）に籠る滝川一益を降伏させた。「天正記」の「柴田合戦記」は、この時、「東国においては徳川家康・北条氏政、北国においては長尾景

表1 天正11年から天正12年までの動き

| | |
|-------------|---------------|
| 天正11年(1583) | |
| 4月21日 | 賤ヶ岳の戦い |
| 24日 | 柴田勝家自害 |
| 9月 1日 | 大坂城築城に着手 |
| 天正12年(1584) | |
| 3月 6日 | 小牧・長久手の戦いが始まる |
| 11月15日 | 織田信雄と和睦 |
| 11月22日 | 従三位・権大納言となる |

勝、西国においては毛利輝元、皆、秀吉に輻輳」し、「天下掌握に帰すると謂ひつべし」と記し、秀吉が天下を掌握したと言っても過言ではないと評価している⁴⁰。

実際には、この時点で、秀吉が徳川家康・北条氏政・上杉景勝・毛利輝元を服属させ、これらの武将たちの勢力範囲に囲まれる天下を掌握したわけではない。しかし、柴田勝家や織田信孝が自害した直後に秀吉が小早川隆景に宛てた天正11年（1583）5月15日付け書状で、「東国は氏政、北国は景勝まで、筑前覚悟に任せ」たことから、「毛利右馬頭殿秀吉存分次第に御覚悟なされ候へば、日本の治り、頼朝以来これには争か増すべく候哉」と、毛利氏の服属を求めている⁴¹。このような要求を秀吉が実際に行っていたことからすると、「天正記」の記述が針小棒大な表現であるとはいえ、秀吉がこの時に天下を掌握したいという意識を持ち始めていたことは間違いない。

「天正記」では、この記述に続いて、大規模な知行割りが行われたことが記され、その後には大坂城の築城に関する記事が配置されている。天正11年（1583）9月、「五畿内の中央にして、東は大和、西は摂津、南は和泉、北は山城」を「外構へ」となす大坂城の築城が始まり、諸国の武将たちの屋敷が集まる城下町が大坂に形成され、「此の先、権を争ひ、威を妬む輩、意の如く退治せしめ、秀吉一人の天下となる事、快なるかな」という評価が記されている。秀吉による天下の掌握とその統治拠点である大坂城の築城とが関連付

⁴⁰ 『太閤史料集』、62頁。

⁴¹ 名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』1、吉川弘文館、2015年、225頁。

けられ、天下を治めるためには、統治拠点の城が必要であり、秀吉の統治行為を支える武将たちを秀吉のもとに集めることが不可欠だったことが印象付けられている。

ここで、注意すべき点がいくつかある。その一つは、「天正記」で「秀吉一人の天下」になったと記述されているが、その天下は、藤井讓治氏が述べているように、日本全国ではなく、畿内に限られていたということである⁴²。

もう一つの注意すべき点は、秀吉が武力によって畿内を支配下に置き、統治拠点である大坂城を築き、その後、「秀吉一人の天下」になったと「天正記」に記述させても、「天正記」では秀吉が天下の最高権力者に位置付けられてはいないことである。そのことがわかる記述を「天正記」から抜き出してみたい。

秀吉の武力による支配領域の拡大は、大坂城の築城にとりかかった天正11年（1583）以降も続くが、秀吉は、天正12年（1584）の小牧・長久手の戦いで苦戦すると、武力だけで権力を強めることが難しいと悟り、武力による支配領域の拡大を継承しつつ、朝廷の中で高い地位につこうとした。

秀吉は、天正12年（1584）11月、小牧・長久手の戦いが終わった直後に、将軍足利義昭と対等な立場の従三位・権大納言に任じられた。「天正記」の「関白任官記」では、権大納言に任じられた理由が、「外には武事を以て天下を治め、内には正税を以て禁中を賑はす。闕くる事あれば、則ち、これを補ふ」と記され⁴³、武力によって天下を治めているとともに、朝廷に経済的な援助を行ったからだと説明されている。ここで、武力によって京都とその近隣諸国を支配下に収めている状態が天下を治めていると表現されているにも関わらず、秀吉の政治的地位が、将軍足利義昭と同レベルの従三位・権大納言にとどまっていることに注目したい。

「天正記」の「関白任官記」において、従三位・権大納言は、次のような政治的立場として説明されている。

平朝臣秀吉卿、その職重相にして、諸官に棟梁として、帝道に塩梅たるのみ⁴⁴。

引用文中に見える「重相」は、中国の唐代の官職名であり、日本の大納言に相当する。大納言は、太政官の次官クラスの官職であり、本来、朝廷の諸官人を統率できるような立場ではないが、権大納言に任じられた秀吉の役割が、朝廷の諸官人を統率して、天皇の政

⁴² 藤井讓治『天下人秀吉の時代』、敬文舎、2020年、22頁。

⁴³ 『太閤史料集』、78頁。

⁴⁴ 『太閤史料集』、78頁。

治がうまく行われるようにすることだと説明されている。この説明を踏まえると、従三位・権大納言に任じられた秀吉が日本のトップとして天下を治めようとしているのではないことがわかる。秀吉は、あくまでも天皇の臣下であり、天皇の政治がうまく行われるよう、朝廷の諸官人を統率しつつ、武力で天下を治めようとしているのである。

3 摂関政治への回帰

朝廷における地位を上昇させることによって自己の政治権力を強めようとするようになった秀吉は、どのような政治体制を構想したのだろうか。「天正記」には、秀吉が理想とした政治体制を説明している箇所がある。「聚楽行幸記」の次の記事である。

人皇の濫觴、神武天皇丙辰より天正十六年戊子の今にいたりて、聖主百九代、星霜二千二百卅七年。朝廷の政は、正木のかづら、絶えず。良臣のつとめは、松の葉の散りうせず。中に就いて、延喜・天暦の至尊百世に冠たるが故に、今にをよびて、民そのみちをしたふといへども、この跡をつげる人なし。然るに、関白太政大臣秀吉公、そのとし微若の古より、勇猛人にこえ、智計世にすぐれおはしまして、東夷をたいらげ、西戎を伐つてより、文武兼ね備へ、上をあふぎ下をあはれぶ。是によりて、一天の風おさまり、四海の波おだやかなり。(中略)まことに君臣合体、時を得たり。異朝においては、成王の為に周公旦摂政し、本朝にては、五十六代清和の為に良房忠仁公執柄し給ふ。符を合するがごとし。延喜・天暦の政にも又おほく譲らず⁴⁵。

この記事では、醍醐天皇や村上天皇が親政を行った延喜・天暦の治が、最も優れた政治であると評価されている。しかし、秀吉は、天皇家の出身ではなく、天皇にはなれないため、皇帝の後見役としての評価が高かった中国の周公旦、皇族以外の臣下で初めて摂政に任じられた日本の藤原良房を持ち上げて、秀吉の政治は、周代の周公旦や平安時代の藤原良房の政治と同格であり、延喜・天暦の治に劣るものではないと「天正記」の「聚楽行幸記」で説明させている。秀吉は、皇帝あるいは天皇の後見役の立場からの政治、日本の政治体制で言えば、藤原氏の摂関政治をまねようとしたのである。

天正12年(1584)11月に従三位・権大納言に任じられた秀吉は、その後、天正13年(1585)3月に、正二位・内大臣に任じられた。この時までは、主君だった織

⁴⁵ 『太閤史料集』、102～103頁。

田信長をまねて、平氏の氏の名を名乗っていた。そして、同年7月、かつて藤原氏の氏長者をつとめていた近衛前久の猶子となって藤原氏の氏の名を名乗り、内大臣を兼務したまま従一位・関白となった。「天正記」の「関白任官記」では、中臣鎌足が、天智天皇から、最上位の大職冠を授けられ、内大臣に任命されて、藤原氏の氏の名を賜った出来事が紹介され、藤原氏の氏の名

を賜った者が朝廷の最高官職につくことが印象付けられている⁴⁶。秀吉が関白に任じられるためには、藤原氏の一族になることが不可欠だと秀吉は考えたのである。

関白の役割について、「関白任官記」では、「万機の政を令する」ことだと説明されている⁴⁷。関白の地位について秀吉は、天皇の政治の代行者として、多岐にわたる重要な政務を命じることができるようになった。

ところで、秀吉が朝廷において政治権力をふるうためには、自分の政治的地位だけを上昇させるだけでは不十分だった。秀吉の政治を支える官僚機構が整っていなければ、秀吉の政治権力は機能しない。秀吉は、天正14年（1586）2月、かつて天皇の住まいや朝廷の役所が置かれた大内裏跡において、新たな邸宅である聚楽第の造営を開始するとともに、自分の政治的地位をさらに高め、政権を支える官僚機構の構築を進めた。

聚楽第の造営を開始してから約半年後の天正14年（1586）9月、秀吉は、藤原氏の氏の名を捨てて、源氏・平氏・藤原氏・橘氏に並ぶ豊臣氏という新たな氏族を創設した。そして、同年12月に、関白を兼務したまま、内大臣から太政大臣に昇格した。

豊臣氏の創設について、「天正記」では、藤原氏の氏の名を賜って関白に就任することにはもっともな意味があったが、既存の氏の名を継ぐのは、動物が何も考えずに地面についている足跡をたどって進むようなもので、好ましいことではなく、天下を治める立場にいたったことから、末代に伝わるような新しい氏の名を立てることにしたと説明させた⁴⁸。私は、秀吉が豊臣氏を創設したことには、「天正記」で説明されているような、自分の業績を

表2 天正13年から天正14年までの動き

| | |
|-------------|---------------|
| 天正13年(1585) | |
| 3月10日 | 正二位・内大臣となる |
| 7月11日 | 従一位・関白・内大臣となる |
| 天正14年(1586) | |
| 2月 | 聚楽第造営に着手 |
| 9月 9日 | 豊臣姓を賜る |
| 12月19日 | 太政大臣となる |

⁴⁶ 『太閤史料集』、79～80頁。

⁴⁷ 『太閤史料集』、79頁。

⁴⁸ 『太閤史料集』、85～86頁。

後世に伝えることにとどまらない、用意周到な政治的意図があったと考えている。秀吉は、有力な家臣に豊臣氏の氏の名を与え、豊臣一族にすることによって、秀吉との一体感を高めるとともに、さらに進んで、豊臣氏の氏長者の立場を利用して、豊臣一族となった家臣たちに高い官位を授けてもらい、朝廷の重要な地位につかせて朝廷での政治を自分の思い通りに進めることができる政治集団を形成しようとしたのである。その論拠を以下に示す。

朝廷の政治は、合議制の原則にもとづいて運営される。摂関政治が盛んだった平安時代には、左右近衛府の陣に公卿が集まり、重要な政務を話し合う陣定が開かれていた。織豊期においても、朝廷では合議制の原則が維持されており、秀吉一人では意見を押し通すことが難しい朝廷の合議に秀吉の意見に賛同する味方を一人でも多く参加させておくことは、秀吉の政治権力をスムーズに行使するうえで、非常に有効だったはずである。

「天正記」には、秀吉の政治権力を支える政治集団の構成を示す記述がある。それは、天正16年（1588）4月に後陽成天皇が聚楽第に行幸した時に作成された2種類の誓紙である⁴⁹。一つ目の誓紙には、織田信雄、徳川家康、羽柴秀長、羽柴秀次、宇喜多秀家、前田利家の6名が署名している。「天正記」に記載された署名は、次の通りである。

| | |
|---------|------|
| 右近衛権少将 | 豊臣利家 |
| 参議左近衛中将 | 豊臣秀家 |
| 権中納言 | 豊臣秀次 |
| 権大納言 | 豊臣秀長 |
| 大納言 | 源家康 |
| 内大臣 | 平信雄 |

信雄が任じられていた内大臣は正・従二位相当官、家康が任じられていた大納言と秀長が任じられていた権大納言は正三位相当官、秀次が任じられていた権中納言は従三位相当官である。ここまでの、通常、公卿と呼ばれる階層にあたる。また、四位クラスであっても、参議に任じられていれば公卿と見なされ、太政大臣などともに朝廷の重要な政務に関わることができる。秀家は、参議に任じられているので、信雄、家康、秀長、秀次とともに、公卿の地位にあった。

公卿の役割について、「天正記」に端的な説明がある。秀吉の推薦によって織田信雄が権大納言に任じられたことについて、それは、「大臣と天下の政を参はり議らしむる」ため

⁴⁹ 『太閤史料集』、113～116頁。

あろうかと記されている⁵⁰。この時、正三位相当官である権大納言に任じられた信雄は、秀吉とともに、天下の政治を議論することを期待されている。公卿に位置付けられた参議までの武将たちは、秀吉とともに朝廷の政治に関与できる立場にあった。

残りの前田利家は、正五位下相当官の右近衛権少将に任じられている。四位、五位の官人は諸大夫クラスである、公卿より一段低い階層に位置する。通常であれば、右近衛権少将の利家は、公卿と肩を並べることはできない。しかし、利家は、秀吉の古くからの知り合いで、利家の四女の豪が秀吉の養女となっていたことに加え、天正13年（1585）には、利家の娘の摩阿が秀吉の側室となり、利家は、秀吉と深い縁戚関係を結んでいた。利家は、天正14年（1586）に羽柴の苗字を与えられ、天正16年（1588）には豊臣氏の氏の名を賜った。天正16年（1588）に誓紙が作成された時、利家は、秀吉との親密な関係が出来上がっていたので、信雄らの公卿衆とともに豊臣政権の一員と見なされ、一つ目の誓紙に署名したものと思われる。

さて、もう一つの誓紙は、文言、日付、宛所が一つ目の誓紙と同じで、23名の武将が署名している。この誓紙の末尾に記された署名は次の通りである。なお、本稿では、編集の都合上、3列に分けて記載するが、「天正記」では、左側の列の署名の次にまん中の列の署名が同じ高さで記載され、右側の列の署名が同じ高さでまん中の列の署名の次に記載されている。

| | | |
|-----------|----------|-----------|
| 土佐侍従 秦 元親 | 岐阜侍従豊臣照政 | 松嶋侍従豊臣氏郷 |
| 立野侍従豊臣勝俊 | 源五侍従豊臣長益 | 北庄侍従豊臣秀政 |
| 京極侍従豊臣高次 | 松任侍従豊臣長重 | 東郷侍従豊臣秀一 |
| 井侍従 藤原直政 | 越中侍従豊臣利勝 | 左衛門侍従豊臣義康 |
| 金山侍従豊臣忠政 | 敦賀侍従豊臣頼隆 | 三河少将豊臣秀康 |
| 伊賀侍従豊臣定次 | 河内侍従豊臣秀頼 | 丹後少将豊臣秀勝 |
| 豊後侍従豊臣義統 | 三吉侍従豊臣信秀 | 津侍従 平 信兼 |
| 曾禰侍従豊臣貞通 | 丹後侍従豊臣忠興 | |

結城秀康の「三河少将」、羽柴秀勝の「丹後少将」、それ以外の「〇〇侍従」は、すべて律令に定められていない独特な官職名である。従来の研究では、これらの官位を「武家官位」と呼んでいる。少将は、本来は左右近衛府の次官クラスの官職で正五位下相当官、侍従は、本来は中務省の官職で従五位下相当官である。いずれも五位クラスであることから、

⁵⁰ 『太閤史料集』、79頁。

諸大夫の階層ということになる。そして、少将にしても、侍従にしても、本来は天皇の警護を担当する役職である。「天正記」では、関白に任じられた秀吉が参内する時に随行した人たちが「諸大夫」と呼ばれ⁵¹、秀吉の身を守る役割を期待された人たちとして位置付けられている。

二つ目の誓紙に署名した23名の武将たちについて、さらに注目すべきは、秦氏の系譜に連なる長宗我部元親、藤原氏の系譜に連なる井伊直政、平氏の系譜に連なる織田信包（「信兼」）以外のすべてが豊臣氏の氏の名を賜っていることである。秀吉は、天正14年（1586）に豊臣氏という新しい氏族を創出して、その氏長者となり、豊臣氏の氏の名を好みの武将に名乗らせる権限を獲得した。さらに、氏爵の推挙、すなわち、豊臣氏のメンバーに従五位下の位階を授けてもらうことを朝廷に進言できる権限も獲得した。従五位下は、貴族の最低ラインの位階である。従五位下の位階を授与された人物は、貴族という高貴な社会集団にランクアップする。豊臣氏の氏長者だった秀吉は、本来ならば貴族にはなれないような出自の武将たちに、まずは豊臣氏の氏の名を名のらせて豊臣氏の一員とし、その上で、豊臣氏の氏長者の特権を行使して、朝廷の官位を授けてもらい、貴族化し、彼らに秀吉の身を守る役割を自覚させて、自己の政治権力の強化をはかった。

一つ目の誓紙に署名した6名の武将のうち、平氏に連なる織田信雄、源氏に連なる徳川家康を除いた、羽柴秀長、羽柴秀次、宇喜多秀家、前田利家は、本来ならば貴族にはなれない人たちだった。彼らを朝廷の政治に関わる公卿にするためには、豊臣氏の氏の名を与え、源平藤橘に肩を並べる豊臣氏の一員に加えることが必要だったことは言うまでもない。秀長、秀次、秀家、利家は、いずれも豊臣という氏の名で誓紙に署名している。

豊臣政権は、平安時代の藤原氏による摂関政治をまねて、武士たちを貴族化し、朝廷のしくみを巧みに利用して構築された復古的な政治体制だった。秀吉は、天正17年（1589）9月、諸大名に対して夫人とともに在京することを命じ、諸大名はこれに応じた⁵²。古代の貴族が都城に集住したように、秀吉に従って貴族化された武将たちが、かつてそこに天皇がいた大内裏跡に聚楽第を構えた秀吉の近くに集住する体制が構築されたのである。これも秀吉の復古的志向を示す事例である。

⁵¹ 『太閤史料集』、80頁。

⁵² 藤田達生『藩とは何か』、54頁。

4 知行割りの論理

秀吉の政治体制が、古代の政治体制をまねた復古的なものであったことは、秀吉の関白就任にともなって大きく変化した知行割りの論理からも見て取れる。

秀吉は、関白に任じられた年に、大規模な軍事行動を起こした。天正13年（1585）の3月から4月にかけて、秀吉は、紀伊国に出陣し、雑賀衆や根来衆を鎮圧した。同年6月には、四国の長宗我部元親の勢力拡大を抑えるため、羽柴秀長・秀次に率いられた軍勢を四国に向かわせた。「天正記」の「四国御発向并北国御動座記」によれば、7月に長宗我部元親が降伏を申し出ると、秀吉は、元親に対して、「阿・讃・予の三か国を請け取り、土佐一国を扶助せしめ、軍役自身相勤め、子息大坂に在ること異議に及ばざるにおいては、赦免すべき」という条件を示した⁵³。元親は、秀吉の指示に従うことを誓い、三男の津野親忠を人質として差し出して、土佐一国を預けられた。天正13年（1585）8月には、越中の佐々成政を攻めるため、秀吉は、軍勢を率いて北陸地方に出陣したが、大きな戦いが起きることなく、成政が降伏した。

天正13年（1585）閏8月、北陸地方から帰還した秀吉は、支配下に置いた領域の知行割りを行った。「天正記」の「四国御発向并北国御動座記」によれば、四国攻めで総大将をつとめた羽柴秀長は、大和郡山城主となり、大和と紀伊に領知をあてがわれ⁵⁴、長宗我部元親と大和から伊賀に移された筒井定次を与力に付けられた。四国攻めで副将をつとめた羽柴秀次は、近江に領知をあてがわれて近江八幡山に城を築き、秀吉の信頼が厚い中村一氏らを年寄としてつけられた。秀吉の有力家臣や服属した武将たちも、国や郡を単位に領知をあてがわれた⁵⁵。

武士にとって、領知をあてがわれることは、とても重要なことだった。主従関係を結んだ領主が、先祖代々伝えてきた領地などの支配を認められるかわりに軍役につく関係を封建的主従関係と呼ぶ。日本の中世の武士たちが封建的主従関係で結ばれていたことについて、異議を唱える者はいないであろう。

しかし、「天正記」の「四国御発向并北国御動座記」の記述を見る限り、秀吉が、この時、

⁵³ 『太閤史料集』、92頁。

⁵⁴ 「天正記」では、天正13年（1585）の知行割りで、羽柴秀長を「和州・紀州両国の物主」にしたと書かれているが、実際には、秀長には和泉国もあてがわれた（藤田達生「天下統一論」〔織豊期研究会編『織豊期研究の現在』、岩田書院、2017年〕、212頁）。

⁵⁵ 『太閤史料集』、97～99頁。

配下の武将たちと本領に対する支配を安堵するような封建的主従関係を結んだとは考えられない。秀吉の有力家臣や服属した武将たちのほとんどが、縁もゆかりもない土地に移し替えられ、そこで新たな支配体制を構築することになった。中世の武士たちが命をかけて守り続けてきた本領に対する支配権は、織豊期に否定されたのである。

なかには、長宗我部元親のように、秀吉から本領を安堵されたかのように見える武将も存在する。しかし、「四国御発向并北国御動座記」では、武士の棟梁である秀吉に対する奉公として軍役につくかわりに本領を安堵されたという書かれ方がなされていない。天正13年（1585）の知行割りは、同書では、「国を割り、知行を定むるものなり」と記されている。そして、「讃岐の守護は仙石権兵衛尉。十河孫六存・安富、忠ある故に、領地を扶助せしめて、仙石に相与するものなり」という記述や、「前田又左衛門尉は、佐々叛乱の刻、数度合戦に及び、軍忠を抽んずるの条、能登一国、加賀半国異儀なし」といった記述⁵⁶を踏まえると、秀吉は、忠勤の度合いに応じて、国を割って知行割りを行ったことになる。

ここで問題となるのが、忠勤が誰に対する行為なのかということである。日本の中世に一般的に見られた封建的主従関係からすれば、忠勤は知行割りを行った秀吉に対する奉公ということになる。しかし、「天正記」の他の記述を読み込むと、秀吉が関白に任じられた天正13年（1585）の知行割りの基準とされた忠勤は、天皇に対する忠勤であり、秀吉に対する奉公ではないことがわかる。

話題を少し遡らせるが、「天正記」の「柴田合戦記」に、天正11年（1583）、柴田勝家らが倒され、滝川一益が降伏した後に知行割りが行われたことが記されている。この知行割りは、柴田勝家らとの戦いをはじめ、「此の数年、労をなし功を積む諸侍」が多いので、「其の忠の浅深に随って、国郡を充行ふもの」とであると説明されている。

「柴田合戦記」では、天正11年（1583）の知行割りを誰が行ったのかが明記されていないが、天正10年（1582）6月の清洲会議で織田信長の旧領が信長の家臣たちに分割されたことについて、奈良興福寺多聞院の僧英俊が、「天下の様、柴田（勝家）、羽柴（秀吉）、丹羽五郎左衛門（長秀）、池田紀伊守（恒興）、堀久太郎（秀政）、以上五人して分け取りの様にその沙汰あり、信長の子供は何も詮に立たずと云々」と記していることからすると⁵⁷、天正11年（1583）4月に滅ぼされた柴田勝家を除く、羽柴秀吉・丹羽長秀・池田恒興・堀秀政などであったと思われる。

⁵⁶ 『太閤史料集』、97～99頁。

⁵⁷ 藤井譲治『戦国乱世から太平の世へ』、岩波書店、2015年、57頁。

少なくとも、この知行割りに秀吉が関わっていたことが、他の史料から確認できる。秀吉が小早川隆景に宛てた天正11年（1583）5月15日付け書状において、秀吉は、「江州坂本にこれ在り、此の中、忠節仕り候者には国郡を遣わし、安堵の思を作」るつもりであり、「来月中旬には、国分知行分も相済」むだろうと述べている⁵⁸。この記述から、秀吉が、実際に、「忠節」を尽くした者に対して、国や郡を単位に、知行割りを行おうと考えていたことが確認できる。そして、「柴田合戦記」に領知をあてがわれた武将としてその名前が記されている浅野長吉や杉原家次に秀吉が実際に領知宛行状や知行目録を発給していることから⁵⁹、天正11年（1583）の知行割りを行った人物の一人が秀吉であることは確かである。

それでは、この時の知行割りは、誰に対する忠勤の度合いに応じて行われたのであろうか。この時、秀吉は、織田信雄を「殿様」と呼ぶ、織田家臣団の一員であり⁶⁰、この知行割りの一つのきっかけとなった柴田勝家らの軍事行動を「信雄に対し謀反を企て」たものと認識していた⁶¹。柴田勝家らの軍事行動が織田信雄に対する謀叛だと認識されていたのであれば、信雄に対する忠勤の度合いに応じて知行割りが行われたと考えるのが普通である。しかし、この時点における信雄の権力基盤は脆弱であり、信雄がすべての武将の忠勤の対象となるような存在だったとは考えにくい。関係資料を読む限り、知行割りの作業に関わった有力武将それぞれに対する忠勤の度合いに応じて領知があてがわれたようである。秀吉に関して言えば、天正11年（1583）8月朔日付けで領知宛行状や知行目録を発給した武将のうち、たとえば加藤嘉明について、同年6月5日付けで秀吉から嘉明に発給された判物に次のような注目すべき表現が見られる。

今度三七殿依謀叛、濃州大柿令居陣処、柴田修理亮至柳瀬而罷出候条、為可及一戦一騎懸馳向候之处、心懸深付而早懸着、秀吉於眼前合一番鎗、其動無比類候、為其褒美三千石宛行訖、弥向後奉公之依忠勤、可遣領知者也、仍如件、

⁵⁸ 名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』1、225頁。

⁵⁹ 浅野長吉に発給された領知宛行状と知行目録は、名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』1の239～240頁に、杉原家次に発給された知行目録は、名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』1の246～248頁に収録されている。いずれも日付は、天正11年（1583）8月1日である。

⁶⁰ 藤田達生『天下統一』、168頁。

⁶¹ 天正11年（1583）4月12日付け小早川左衛門佐宛秀吉書状写ならびに同日付け毛利右馬頭宛秀吉書状。前者は名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』1の204～205頁、後者は同書の205頁に収録。

天正十一

六月五日

秀吉（花押）

加藤孫六殿⁶²

織田信孝の「謀叛」などで始まった一連の戦いにおいて、嘉明は、秀吉の目の前で一番鎧の働きをしたことから、「その褒美として三千石宛行」われることになった。そこには、これからも「奉公」に励み、「忠勤」の働きをしてほしいという秀吉の期待が込められていた。このことを踏まえると、天正11年（1583）8月朔日付けで秀吉が領知をあてがったすべての武将について断言できるとまでは言わないが、少なくとも加藤嘉明については忠勤の対象は秀吉であり、秀吉に対する奉公の恩賞として領知があてがわれたと言える。

これに対して、「天正記」の「四国御発向并北国御動座記」に記された天正13年（1585）の知行割りにおける忠勤の対象は、秀吉ではなく、天皇である。

「天正記」のうち、「四国御発向并北国御動座記」より前の「関白任官記」において、天皇に対する忠勤を印象付ける記述が、それ以前の巻に比べて際立っている。この巻の冒頭で、「主上の徳を仰ぎ、宮殿を修造し、臣下の衰微を扶」けるために「庄園を充て行」った「信長将軍」は、「最とも忠臣」であり、その信長を倒した「悪逆第一の朝敵」である明智光秀を討った秀吉も「比類なきの忠勤」を行ったと評価されている⁶³。

そして、天正11年（1583）の柴田勝家らの軍事行動やそれを鎮圧した秀吉の位置付けが、「関白任官記」で大きく書き換えられている。秀吉は、勝家らの動きを、その当時は、織田信雄に対する謀叛だと認識していた。また、勝家らを倒した秀吉は、「天正記」の「柴田合戦記」では、「前代未聞の大將なり」と評価されていた⁶⁴。ところが、「関白任官記」では、勝家らの軍事行動が天皇の地位を脅かそうとした行為に読みかえられ、武力によって天皇を守った秀吉が天皇の忠臣と評価されたのである。「天正記」の該当記事を引用する。

柴田修理亮勝家叛乱して、織田三七信孝を引き入れ、天下を奪はんと欲す。秀吉朝臣、国堺に馳せ向かって、これを討つ。両家の輩、武勇韓彭が名を得ると雖も、悪逆盜跖躡が徒に越えたり。彼等若し世を保つにおいては、王位を傾くべきこと、眼前なり。これを平定する秀吉は、豈忠功の臣と賞せざらんや⁶⁵。

⁶² 名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』1、228頁。

⁶³ 『太閤史料集』、76頁。

⁶⁴ 『太閤史料集』、62頁。

⁶⁵ 『太閤史料集』、77～78頁。

天正11年（1583）、柴田勝家が反乱を起こし、織田信孝を味方に引き入れて、天下を奪おうとした。勝家や信孝がもし秀吉によって討伐されず、勢力を保ったら、「王位」、すなわち、天皇の地位を脅かす事態に至ったであろう。天皇の地位を脅かすような勢力を平定した秀吉を「忠功の臣」と称賛しないわけにはいかない。「関白任官記」に見える「忠」が、天皇に対する行為として叙述されている。少なくとも、忠勤が秀吉に対する行為でないことは、秀吉自身が同巻で「忠功の臣」と評価されていることから明らかである。

とすれば、「関白任官記」より後の巻である「四国御発向并北国御動座記」に記録された天正13年（1585）の知行割りの記述に見られる「忠」も、天皇に対する忠勤ということになる。天正13年（1585）の知行割りが行われたのは、この年の閏8月である。秀吉は、その直前、7月に関白に任じられ、天皇の政治の代行者として、多岐にわたる重要な政務を命じることができるようになっていた。天正13年（1585）の知行割りは、関白の地位にあった秀吉が、天皇に代わり、天皇に対する忠勤の度合いに応じて、武将たちに領知をあてがったものとして叙述されたのである。

「天正記」をさらに読み進めると、秀吉との間で本領安堵を主軸とする封建的主従関係を結ぶはずのない人たちに領知があてがわれた事例が見受けられる。それは、「天正記」の「聚楽行幸記」に記された、公家や門跡衆に領知をあてがった記事である。

秀吉は、天正14年（1586）12月に、関白を兼務したまま、内大臣から太政大臣に昇格し、朝廷における政治権力をさらに高めた。そして、天正16年（1588）正月に足利義昭が將軍職を辞してから3か月後の天正16年（1588）4月、後陽成天皇や公家たちを聚楽第に迎えた。

後陽成天皇の聚楽第行幸にあたって、秀吉は、京都の銀地子や米地子を天皇や上皇に献上したほか、公家や門跡衆にも朱印状を発給して、近江国高島郡内の8000石を彼らに配分した⁶⁶。この8000石は、後陽成天皇の聚楽第行幸に居合わせた武将たちに署名させた誓紙の中で「公家門跡衆所々知行等」と書かれているように⁶⁷、公家や門跡衆に対する知行である。また、後陽成天皇とともに聚楽第を訪れた公家たちへの贈り物が列記された記事の中に、「領知の御折がみ」という表現も見られる⁶⁸。公家に対しても領知宛行状が発給されたのである。その領知宛行状の一つ、鷹司信房にあてられた領知宛行状を紹介する。

⁶⁶ 『太閤史料集』、112頁。

⁶⁷ 『太閤史料集』、113頁。

⁶⁸ 『太閤史料集』、117頁。

就今度聚楽 行幸、江州高島郡海津西庄浜分内百五石之事、令宛行畢、弥被励御奉公、
其家道可被相嗜状如件、

天正十六

(豊臣秀吉)

卯月十五日

(花押)

鷹司殿⁶⁹

ここで注目すべきは、「いよいよ御奉公に励まれ、その家道相嗜まるべき」という表現である。この「御奉公」は、秀吉に対する奉公ではない。天皇に対する奉公である。鷹司信房は、「家道」をたしなんで天皇に対する奉公に励むことを秀吉から命じられたのである。この時の秀吉の立場は、朝廷の最高官職である関白・太政大臣である。秀吉は、公家や門跡衆を統括し、天皇に代わって彼らに命令を下せる立場にあり、武将たちに領知をあてがうのと同じように、公家や門跡衆にも領知をあてがい、天皇への奉公を命じた。

「天正記」の記述からすると、秀吉は、天正13年(1585)以降においては、武士のリーダーであることを根拠に、封建的主従関係を結んだ武士たちに軍役を命じ、その代わりに領知をあてがったわけではなかったことが明らかである。天皇に代わって重要な政務を命じることができる関白の地位についた秀吉は、天皇の政治的地位を脅かすような勢力を平定する戦いで軍功をあげた武将たちに、天皇に対する忠勤の度合いに応じて、国などを単位に領知をあてがうとともに、天皇の臣下である公家たちにも領知をあてがい、天皇に対する奉公に励むことを命じるという政治体制を構築したのである。

ちなみに、「四国御発向并北国御動座記」では、天正13年(1585)の知行割りに関する記事に続いて、次のような記事が記載されている。

この先、数十か国、検地を遂ぐるに、昔の所務帳一倍を過ぐ。当年もまた田地を踏み分け、土民百姓、私を接へず。また飢寒に及ばざるが如く、これを勘弁し、五期七道の図帳を以て、一枚鏡と作して、これを照覧す⁷⁰。

この記事については、太閤検地が古代検田の系譜を継承した国家的検地であることを印象づけようとしたもので、全国的検地施行構想の表白と解すべきであるという秋澤繁氏の見解が参考になる⁷¹。秋澤氏がこの記事から古代天皇制国家を想起した通り、天皇の代わり

⁶⁹ 名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』3、吉川弘文館、2017年、221頁。

⁷⁰ 『太閤史料集』、99頁。

⁷¹ 秋澤繁「太閤検地」(朝尾直弘ほか編『岩波講座日本通史』第11巻(近世1)、岩波書店、1993年)、113～114頁。

に武将や公家たちに領知をあてがった秀吉が、日本全国の土地を天皇によって統轄される公地であると考えていた可能性が高い。天皇によって統轄される公地を、秀吉は、天皇の代わりに、武士や公家たちに配分したのである。

5 天皇の命令・天の道理

武力による支配領域の拡大を進めながら、朝廷における地位を高めていった秀吉の権力がその後どうなったのか。「天正記」の「小田原御陣」にその形が示されている。「小田原御陣」は、「聚楽行幸記」より後の巻であるが、聚楽第造営記事から始まる。

夫れ相国秀吉將軍は、南蛮・北狄を亡ぼし、東夷・西戎を平らげ、四海悉く掌握の中に属し、政道の直き事は絃の如く、刑罰の明き事は鏡に似たり。然して、京都において御館を築かれ、其の名を聚楽と号さる。日域の諸大名、彼の地において、宮垣屋室をふさぎ、鴛鴦の華麗薨を并べ、各々在洛歴然たり。其の靚粧、咸陽宮喜見城を屑しとせず⁷²。

秀吉は、聚楽第が造営されている最中に、関白を兼務したまま太政大臣となった。そのため、名前の冒頭に、太政大臣に相当する中国の漢代の官職名である「相国」という称号がつけられている。ところが、秀吉の名前の後ろに、さらに「將軍」という称号もつけられている。「天正記」では、將軍は信長に用いられてきた称号である⁷³。秀吉は、実際には將軍に任命されていないが、足利義昭が天正16年（1588）に將軍職を辞したこともあって、「小田原御陣」のこの箇所では、將軍の称号を使って、武力によって四海を掌握していることを強調させたのではなかろうか。秀吉が相国と將軍、すなわち、朝廷の最高官職と最高軍事指揮官の二つの立場を兼ねるに至り、朝廷政治をつかさどる公家（文官）と天下の治安維持にあたる武家（武官）の両方に命令を下せる存在となっていたことをアピールしたものと推察する。

そして、秀吉は、「小田原御陣」において、京都に秦の始皇帝の咸陽宮や帝釈天の喜見城に負けない聚楽第を造営し、そのまわりに日本国内の諸大名を住まわせたと記述させた。聚楽第は、日本国内の政治を統括する政治権力者の「宮」（政治拠点）であり、日本国内の軍事を統括する最高指揮官の「城」（軍事拠点）であり、そのまわりには秀吉の統治行為を

⁷² 『太閤史料集』、140～141頁。

⁷³ 『太閤史料集』、11頁など。

支える諸大名が集住する。聚楽第は、大坂城に代わる秀吉の新たな統治拠点となった。

「小田原御陣」では、秀吉が暮らす聚楽第を秦の始皇帝の咸陽宮に重ね合わせている。秀吉は、心の中では、自分の政治的立場を天皇の地位にまで高めたいと考えていたのではないと思われる。しかし、形の上では、相国と将軍の二つの立場を兼ねる天皇の臣下であり、天皇の政治の代行者として命令を下し、自分の命令に従わない者を天皇の命令に背いた逆賊として討伐するというラインを堅持した。この点に関して、「天正記」の「小田原御陣」において、秀吉が北条氏を倒すことになった経緯について、興味深い説明が行われている。

爰に、北条左京太夫平氏直、普天の下に住みながら、勅命を恐れず、終に参内をとげず、雅意にまかするの条、将軍より、早々参洛致し、宣ふべきの旨、再往の御下知なさらるによって、北条美濃守氏規を以て代官となし、出仕を遂げ畢んぬ。

然るところ、幾程もなくして讒訴を構へ、公儀を背き奉り、最悪の至り、なんぞ天罰を蒙らざらんや。嗚呼、自業自徳、因果のことわりなり。即ち、彼の徒党御誅戮のため、天正十八年二月の始め、五畿内・東海道・東山道・山陽道・山陰道の諸卒を相催し、其の勢幾千万と云ふ事も知らず。駿州浮島原、富士の下野に陣を取る⁷⁴。

この記事では、天皇の命令があつたにもかかわらず、天皇のもとに参上しなかった北条氏直に対して、秀吉がすみやかに上洛して天皇に申し開きをするよう何度も命じたが、結局、北条氏が背いたので、天罰が下るほどの罪を犯した北条氏を倒すため、秀吉が軍勢を率いて出陣したと説明されている。

ここで、「天罰」という用語が使用されていることに注目したい。太田牛一が著した「太閤さま軍記のうち」においても、秀吉によって滅ぼされた北条氏とその家臣について、「これらはみな、朝恩をかふむって、その徳を思わず、正理をそむくのゆへに、天の冥加つきはてて、むげにあひ果て、天道のおそろしき事」⁷⁵と記されており、彼らが天に見放されて、命を落とす恐ろしい結末に至ったと説明されている。天皇の命令に従わない北条氏は、天の道理に背き、天から見放された者とされ、秀吉によって滅ぼされたのである。

当時の日本国内の人たちにとって、天は、自分たちの行為を常に見ている恐ろしい存在だった。神田千里氏の研究によれば、戦国時代の日本には天道の観念が広まっており、天道に背くと罰を受けたり、戦いに敗れると信じる者が少なくなかった。この天道の観念は、

⁷⁴ 『太閤史料集』、141頁。

⁷⁵ 『太閤史料集』、184～185頁。

中国から流入した儒教道德により日本国内に浸透したものである⁷⁶。その起源は、中国の周代に誕生した天命思想である⁷⁷。秀吉の権力が古代中国の天命思想を淵源とする天道思想によって正当化され、秀吉は、天の道理をまっとうするために北条氏を亡ぼしたことにしたのである。天皇や天下人秀吉の上には、天が存在した。

そして、天は人間の世界に道德的秩序を与える働きをなした⁷⁸。天命思想では、徳治主義が重要なポイントとなる⁷⁹。天が地上の支配を委ねる人物を決める時に基準となるのが、徳の有無である。武力が優れていても、徳がなければ、天はその人物に支配を委ねない。天から支配を委ねられた人物は、自分に備わった徳を十二分に発揮して、人民を教え諭しながら、天下を治めなければならなかった。

近世前期の為政者のうち、少なくとも秀吉が、自分の政治権力を正当化する政治思想として、徳治主義に着目していたことは間違いない。秀吉が天下を治めるのにふさわしい人物であることを印象付けるため、「天正記」の「播磨別所記」で、自分にはもともと10個の徳が備わっていたと説明させた⁸⁰。その十徳は、次の通りである。

君に忠心あり　臣に賞罰あり　軍に武勇あり　民に慈悲あり　行に政道あり
意に正直あり　内に智福あり　外に威光あり　聴に金言あり　見に奇特あり

しかし、秀吉には、有徳者として認めてもらうことを阻害する、いくつかの問題があった。「天正記」の「惟任謀反記」において、明智光秀の家臣である斎藤利三が、日常的に、武芸をたしなんでいただけでなく、儒教の教えを大切にしており、さらに、花鳥風月を愛でて、詩歌を学んでいたことが紹介されている⁸¹。当時の武士は、武芸、儒学、詩歌の3点を兼ね備えていることが重要だった。この3つの素養のうち、秀吉には儒学と詩歌の素養が欠けていた。「天正記」の「関白任官記」で、秀吉が、幼い頃からの学びが足りないことを悔やんでおり、儒学者を招いて儒学を学び、日本の古記録や系図を学んだと説明されている⁸²。関白に任じられる頃には、藤原定家直筆の古今和歌集を手に入れたと「関白任官

⁷⁶ 神田千里『宗教で読む戦国時代』、講談社、2010年、51～70頁。

⁷⁷ 溝口雄三『中国の思想』（放送大学教育振興会、1991年）、10頁。

⁷⁸ 玉懸博之「『天正記』から『太閤記』へ」、419頁。

⁷⁹ 壇上博『天下と天朝の中国史』、岩波書店、2016年、20頁。

⁸⁰ 『太閤史料集』、22頁。

⁸¹ 『太閤史料集』、39頁。

⁸² 『太閤史料集』、85頁。

記」に記述させている⁸³。秀吉が学びによって統治者に必要な資質を補ったことを「関白任官記」で強調しているのである。天皇の政治の代行者である関白に就任した秀吉が、武力だけでなく、儒学や日本の古典的知識も身につけて文武を兼ね備え、天から天下の支配を委ねられるのにふさわしい徳が備わった統治者になったことが印象付けられている。

秀吉に徳が備わっていることを印象付けることは、全国の武将たちを秀吉に従わせるのに必要なことだった。天正16年（1588）に後陽成天皇が聚楽第に行幸した時、その場に居合わせた武将たちに誓紙への署名を求めたが、その目的について、「天正記」の「聚楽行幸記」では、天皇の行幸に参加する機会を武将たちに与えた秀吉の「薫徳」を武将たちの子孫が忘れて、道に外れた行為に及ぶようなことがあってはいけないためだと説明されており、道に外れないようにするための行為の一つとして、秀吉の命令に絶対に背かないことが挙げられている⁸⁴。誓紙では、卓越した徳が備わっている秀吉の命令への絶対的服従が求められており、服従の根拠として秀吉が有徳者であることが強調されている。

秀吉が有徳者として認められるためには、有徳者にふさわしい振る舞いを絶えず心がけ、アピールしなければいけなかった。天正10年（1582）に秀吉が明智光秀を倒したことについて、「天正記」の「関白任官記」では、天皇の徳を慕い、天皇に尽くしていた忠臣の織田信長を殺害した明智光秀は、天下一の悪人であり、その悪人を武力で倒した秀吉の行為は、比類の忠勤であると記されている⁸⁵。天皇の政治的地位を脅かす逆賊を討伐することは忠臣としてのつとめであり、十徳の1つ、「軍に武勇あり」にあたる。

「四国御発向并北国御動座記」に記された天正13年（1585）の知行割りについては、前述の通り、知行割りの基準となる戦いでの働きぶりが、天皇に対する忠勤とされ、その度合いによって配分される領知が決められた。その知行割りは、秀吉に備わっていたとされる十徳の1つ、天皇の臣下に適確な賞罰を行ったことのアピールである。

天正16年（1588）に後陽成天皇を聚楽第に迎えた頃の秀吉について、「聚楽行幸記」では、秀吉は、若い頃から勇猛で、知恵や計略にすぐれていたが、東の敵を平定し、西の敵を倒した頃から、文武を兼ね備え、自分より身分が上の天皇を敬い、自分より身分が下の人びとを憐れむので、天空の風が収まり、まわりの海の波が穏やかであると説明されて

⁸³ 『太閤史料集』、84頁。

⁸⁴ 『太閤史料集』、113～114頁。

⁸⁵ 『太閤史料集』、76頁。

いる⁸⁶。「勇猛」は、秀吉の十徳に即して言えば「軍に武勇あり」、「智計」は「内に智福あり」、「天皇を敬い」は「君に忠心あり」、「身分が下の人びとを憐れむ」は「民に慈悲あり」に相当する。

関白となった秀吉は、有徳者とみなされる行為を「天正記」の「関白任官記」以降の各巻に記述させることによって、天皇に代わって天から天下の支配を委ねられている立場に自分がいることを正当化しようとしたのである。

6 天下人とは何か

「天正記」から秀吉の政治思想を読み解いてみると、時期によってその内容に違いが見られ、秀吉がいろいろな方策を講じながら権力の正当化をはかっていったことがわかる。

秀吉は、天正11年（1583）に武力によって柴田勝家らを倒し、その年の9月に統治拠点である大坂城とその城下の建設に着手した頃から、天下を掌握する天下人になろうと思うようになった。天正12年（1584）の小牧・長久手の戦いで苦戦すると、武力だけで権力を強めることが難しいと悟り、武力による支配領域の拡大を維持しつつ、朝廷の中で高い地位につき、政治権力を強めようと考えようようになった。天正13年（1585）7月に関白に就任すると、天皇に代わって重要な政務を命じることができるようになった。この頃には、配下の武将たちへの知行割りを、天皇への忠勤の度合いを基準に行ったと説明させるようになった。天正14年（1586）には、京都において新たな統治拠点である聚楽第の造営を始め、同時に、諸大名の朝廷官人化を進めて豊臣政権の安定をはかった。天正16年（1588）に後陽成天皇を聚楽第に迎えた時、関白・太政大臣である秀吉は、天皇の臣下である公家たちに領知をあてがうことができるようになっていた。天正17年（1589）9月には、古代の貴族が在京したように、朝廷官人化した諸大名に対して夫人とともに在京することを命じた。日本全国規模の天下統一の最終段階である天正18年（1590）、朝廷の最高官職と最高軍事指揮官の2つの立場を兼ねていた秀吉は、天皇に代わって北条氏に政治的命令を下し、その命令に反した北条氏に天罰を下すべく、武力を発動した。

秀吉が従三位・権大納言に任じられる頃までは、武力によって京都とその近隣諸国を支配下に収めている状態が天下を治めていると表現されていた。その時、秀吉は、軍事指揮

⁸⁶ 『太閤史料集』、102頁。

権と領知宛行権を行使して武将たちを従える大将だった。

ところが、秀吉の関白就任で、事態は大きく変わった。武力による支配領域の拡大を継続しつつ、京都に聚楽第という新たな統治拠点を設け、自分の政治権力を支える武将たちに朝廷の官職や武家官位を与えて武士の朝廷官人化をはかり、京都に常駐させて、関白である秀吉の命令で彼らを動かせるようにした。

秀吉は、天正13年（1585）7月の関白就任を機に、武士だけでなく、公家にも、宗教勢力にも、次のような領知宛行状を発給するようになった。まず、公家の久我敦通にあてた領知宛行状を紹介する。

当所上下庄千式百参拾石事、如先々令領知、可被専朝役之状如件、

天正十三

十一月廿一日

秀吉（花押）

久我殿⁸⁷

続いて、同じ日に発給された寺院にあてた領知宛行状を紹介する。

城州深草内参拾壺石之事、充行之訖、領知可専寺役事、専一候也、

天正十三

十一月廿一日

御朱印

五条本覚寺⁸⁸

秀吉は、公家に対しても、寺院に対しても、領知を安堵したうえで、公家に対しては「朝役」に専念するよう、寺院に対しては「寺役」に専念するよう命じている。関白となった秀吉は、諸大名の頂点ではなく、武士・公家・宗教勢力の頂点に立ち、これらの勢力に領知をあてがい、それぞれの職務を全うするよう命じることができるようになったのである。

これまでの研究では、天下人秀吉について、漠然と日本国内の頂点に立ったと認識されることが多かった。しかし、実際にはそうでなかったことが、これまでの説明で明らかである。秀吉は、天皇の代わりに政治権力や軍事権力を行使したのである。秀吉の本心はともかく、形の上では、天皇を凌駕することはできなかった。天下人の上には、日本国内の多くの人たちが恐れる天が存在した。秀吉は、天皇にかわって天から天下の支配をゆだねられたのである。そして、その立場をまわりから認めてもらうために、武力だけでなく、中国から伝わった儒学や日本で独伊の成熟を遂げた古典的教養を身につけるなどして、徳

⁸⁷ 名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』2、吉川弘文館、2016年、276頁。

⁸⁸ 名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』2、276頁。

を備えていることを強調した。関白となってからの秀吉は、文武両道を兼ね備えた統治者だった。

7 小括

本節は、「天正記」の記述から、天正10年代における秀吉の政治思想について検討したものである。秀吉の政権は、天正18年（1590）に北条氏を倒した後も続き、武力行使の矛先が朝鮮半島に向けられた。秀吉の政治思想を論じるのであれば、天正18年（1590）以降についても分析の対象とすべきであるが、「天正記」を分析の対象とする本節では、「天正記」に記されていない時期の検討を断念せざるを得ない。

しかし、本節で検討した秀吉の政治思想に関するさまざまな論点は、天正18年（1590）以降の日本の政治史研究でも重要な論点となる。

秀吉の死後、慶長4年（1599）閏3月13日に、徳川家康が伏見向島の屋敷から伏見城西丸に移ったことを伝え聞いた多聞院の僧俊英が、家康が「天下殿に成られ」と自身の日記に記した⁸⁹。ただし、徳川家康が名実ともに天下人になったのは、慶長8年（1603）であろう。その年の2月12日に、徳川家康は、征夷大將軍に任命されるとともに、右大臣の官職も得た。従来の研究では、徳川家康が將軍に任命されたことのみに注目してきたが、家康は、大臣と將軍の2つの地位につき、日本国内の政治と軍事の両方を掌握した。すなわち、天から地上の支配を委ねられた天皇にかわって、日本国内の政治と軍事を統括する天下人として権力を振るえるようになったのである。その後も、徳川宗家の当主たちは、「禁裏様（天皇）」を「主上」

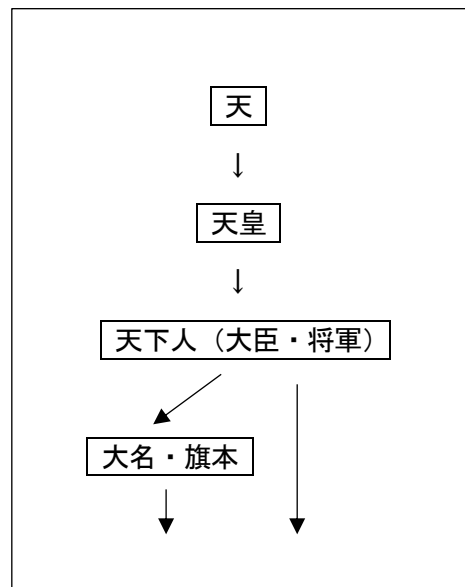


図1 江戸時代の預治思想

注) 藤田達生『信長革命』183頁掲載の図を一部改編。

⁸⁹ 藤井讓治『シリーズ日本近世史① 戦国乱世から太平の世へ』、岩波書店、2015年、112～113頁。

とよぶ「天下様」の立場を受け継いだ⁹⁰。江戸時代においても、天の存在が多くの人々に強く意識され、天皇の臣下である天下人は、天から地上の支配を委ねられた天皇に代わって天下の実権を預かり、さらに、大名や旗本たちに、その力量に応じて天下の一部を預けた⁹¹。この預治思想は、江戸時代の統治体制の根幹をなす考えであり、天皇にかわって天から地上の支配をあずかった天下人による統治になくはないものだった。

江戸時代には、京都ではなく、江戸城が全国の統治拠点となり、江戸城を居城とする天下人に従った武将たちが、江戸に屋敷を構えるとともに、全国各地の城を預けられ、天下人を中核として構成された公儀の方針に従って統治を行った。地方の統治拠点においては、豊臣秀吉が大坂城や聚楽第を造営した時と同じように、統治拠点である城に武士たちが集住し、役方（政治）と番方（軍事）の両方を担った⁹²。江戸時代には織豊期の頃よりも儒学が重視され、17世紀半ば以降は、武士たちが、武芸だけでなく、儒学や日本古来の古典的教養を積極的に学び、文武両道を兼ね備えた統治者としての立場を維持した。

豊臣秀吉の政治思想の多くが、江戸時代の武士たちにも通底していたのである。

⁹⁰ 渡辺浩『日本政治思想史－17～19世紀』、東京大学出版会、2010年、58～61頁。

⁹¹ 藤田達生『信長革命 「安土幕府」の衝撃』、角川学芸出版、2010年、182～183頁。

⁹² 藤井譲治『日本の近世』第3巻（支配のしくみ）、中央公論社、1991年、136頁。

第2節 井伊家中の形成

1 井伊家について

豊臣秀吉の没後に天下人となった徳川家康は、慶長8年（1603）に、源氏長者・淳和奨学両院別当に加え、朝廷の合議で大きな発言権を持つ右大臣と、日本国内の武力を統率できる征夷大將軍にそれぞれ任じられ、豊臣秀吉と同様に、日本国内の政治と軍事の両方を統轄する立場にたった。その後、天下人である徳川宗家当主を中心に構成される公儀が定めた政治方針にしたがって日本国内の支配が行われたが、その支配体制は決して中央集権的な体制ではなかった。天下人の直轄領には代官などの役人が派遣され、その領域の支配が行われたが、それ以外の領域については、国内の要所に設けられた城や陣屋を天下人から預かった大名や旗本とその家臣たちが、城や陣屋を統治拠点とし、公儀が定めた政治方針を踏まえつつ、大名や旗本とその重臣たちが合議で定めた政治方針にしたがって、領地や領民の支配を行うという、分権体制がしかれた。

本節は、徳川宗家を支える立場にあった井伊家に焦点をあて、地方の統治を任された井伊家に従う家臣、すなわち、井伊家中がどのように形成されたのかを検証する。

井伊氏は、遠江国井伊谷（現静岡県浜松市北区引佐町井伊谷）を本拠地とする在地領主だった。戦国時代には、戦国大名の今川氏に従っていたが、今川氏との関係は必ずしも良好とは言えず、井伊氏の当主が今川氏の勢力によって何度も殺害されるという悲運に見舞われた。

天正3年（1575）、井伊直政が徳川家康に召し抱えられた。徳川家康は、井伊直政が藤原氏の系譜に連なる井伊氏の継承者であり、その出自が地方においては絶大な権威として作用することを見抜き、直政を反対勢力との交渉役に抜擢するなど、重く用いた。

井伊直政は、天正18年（1590）に徳川家康が関東地方に移封されたのにも関わらず、本領の井伊谷を離れて上野

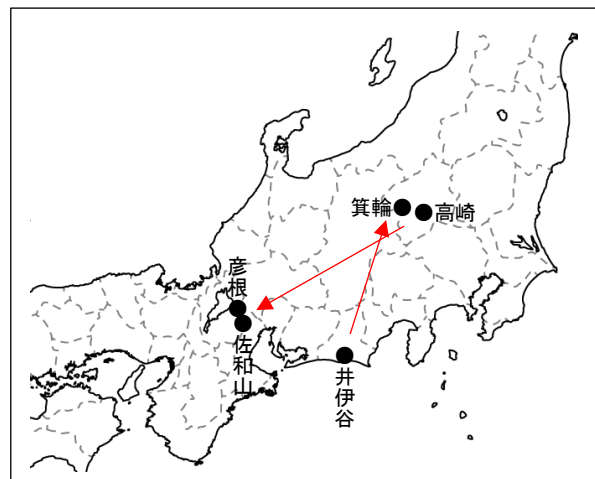


図2 井伊家拠点の変遷

国の箕輪城（現在の群馬県高崎市箕郷町に所在）を預けられた。井伊直政は、12万石の領知をあてがわれ、軍事と政治の両方担う統治者になり、箕輪城下町を形成した。その後、居城を同国の高崎城（現在の群馬県高崎市高松町に所在）に移した。徳川家康が慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで勝利すると、井伊直政は、近江国の佐和山城（現在の滋賀県彦根市古沢町などに所在）を預けられ、18万石の領知をあてがわれた⁹³。そして、その後、井伊家の居城が彦根山（現在の滋賀県彦根市金亀町）に移され、知行高が30万石に増え、井伊家は、江戸時代を通じて彦根城主であり続けた。



写真2 井伊直政公銅像

注）彦根駅前広場に所在。

井伊家は、領知の拡大にともなって、その知行高に見合った軍役を担うことになった。当然、井伊谷以来の家臣だけでその任務を遂行することは不可能だった。井伊家の拠点が、遠江国、上野国、近江国と移っていくなかで、新たな家臣が次々に召し抱えられ、井伊家中の構成が大きく変化していった。

2 井伊家中の形成に関する従来の見解

井伊家中の形成過程については、『彦根市史』や『新修彦根市史』に総括的な見解が示されている。

『彦根市史』では、慶長5年（1600）頃、井伊直政が佐和山城主になる直前の家臣は、徳川家康から井伊直政の配下に付けられた武田氏の旧臣や関東地方の浪人が主力だったが、貞享年間（1684～88）には、近江国出身者がもっとも多くなり、井伊家の本拠地、旧封地で召し抱えられた者がそれに次ぐと説明されている。近江国出身者が多いのは、井伊家の知行高が30万石に急増する過程において、佐々木・浅井・石田諸氏の旧臣を多く召し抱えた結果であるという指摘や、近江国出身者は高禄になるにつれて減少し、1000石以上の家老・中老クラスは、遠江・三河・上野・甲斐・駿河5ヵ国出身者で占

⁹³ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻（通史編 近世）、彦根市、2008年、6～16頁。

められているという注目すべき指摘がある⁹⁴。

『新修彦根市史』では、『彦根市史』の見解を紹介したうえで、江戸時代の井伊家中の構成を考える際には、井伊直孝の家臣が井伊家中に組み込まれたこと、元和年間（1615～24）以降に多くの家臣が召し抱えられたことなどに注意を払う必要があると指摘し、井伊家の家臣に関する基礎史料である「侍中由緒帳」の分析を通じて、井伊家の家臣が8つのグループに分類された。

- ①井伊谷からの井伊家直臣または井伊家一族
- ②今川氏滅亡後に井伊家に召し抱えられた今川旧臣
- ③甲斐国・信濃国経営前後に家康の直臣から配属された家臣
- ④甲斐国・信濃国経営後に家康から井伊家に配属された武田旧臣
- ⑤井伊直政の箕輪・高崎時代に召し出された後北条旧臣などの家臣
- ⑥井伊直政の佐和山入封から井伊直継時代に召し抱えられた家臣
- ⑦慶長年間に井伊直孝に召し抱えられた家臣
- ⑧大坂の陣後に召し抱えられた家臣

そして、それぞれの家臣の出身地について、①②は遠江国・駿河国、③は三河国・駿河国、④は甲斐国・信濃国、⑤は上野国、⑥⑧は遠江国、⑦は上野国が多く、⑥から⑧にかけての段階で井伊家に召し抱えられた家臣の中には、他大名や家中の縁故によって召し抱えられた者が多いと指摘している⁹⁵。

3 井伊直政の代の家臣団形成

それでは、『彦根市史』や『新修彦根市史』の見解を念頭に置きながら、井伊家中の形成過程について論じることとする。まずは、井伊直政の代の家臣団形成に焦点をあてる。

井伊直政については、これまでいろいろな伝記が刊行されてきたが⁹⁶、野田浩子氏が、平成29年（2017）に『井伊直政 家康筆頭家臣への軌跡』を刊行した⁹⁷。この書籍は、

⁹⁴ 中村直勝監修『彦根市史』上冊、彦根市役所、1960年、418～419頁。

⁹⁵ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、117～119頁。

⁹⁶ 中村元麻呂・中村不能斎『井伊直政・直孝』（彦根史談会、1951年）、池内昭一『天下取りの知恵袋 井伊直政』（叢文社、1995年）、高野澄『井伊直政 逆境から這い上がった男』（PHP研究所、1999年）、羽生道英『井伊直政 家康第一の功臣』（光文社、2004年）など。

⁹⁷ 野田浩子『井伊直政 家康筆頭家臣への軌跡』、戎光祥出版株式会社、2017年。

近年の日本中世史・近世史の研究成果を踏まえながら、井伊家に関するさまざまな史料を丹念に分析した労作である。この野田氏の研究によりながら、井伊直政の家臣団がどのように形成されたのかを確認する。

井伊直政は、天正3年（1575）、15歳の時に徳川家康の近習となった。生まれて間もなく、本拠地の遠江国井伊谷をいったん離れ、各地で身を隠していたこともあって、徳川家康に仕えた時、大規模な軍団を従えていたわけではなかった。井伊直政の母が再婚した松下清景が義父として直政を支えていたほか、井伊家一門の中野直之や、直政のいここにあたる小野朝之らが直政に従っていたという。井伊直政が徳川家康に仕えてまもなく、渡辺昌元などが、徳川家康の命令で直政に付けられた。

井伊直政の家臣団の構成が大きく変わる契機となったのが、天正10年（1582）の動乱（天正壬午の乱）である。この動乱は、一般には、織田・徳川勢によって武田家が滅ぼされた出来事として知られている。徳川家康は、甲斐国に攻め込み、井伊直政らを介して、地元の武士たちを徳川家に帰属させる交渉を進め、多くの武田旧臣を家康の家臣とした。

甲斐国での戦いが終了すると、徳川家康は、武田旧臣の帰属交渉や北条家との和平交渉で活躍した井伊直政を大将とする新たな旗本先手隊を組織した。この井伊隊の組織にあたり、徳川家康は、かつて自身の小姓をつとめ、この頃、明智光秀に仕えていた木俣守勝を呼び戻して井伊直政に付けたほか、家康の直臣である西郷正員と棕原正直も直政に付けた。また、古くから井伊氏に従っていた近藤・菅沼・鈴木の井伊谷三人衆に加え、すでに徳川家康に従っていた遠江国・駿河国の今川旧臣や、天正10年（1582）の動乱で滅ぼした武田旧臣である山県三郎兵衛衆・土屋惣蔵衆・原隼人衆・一条右衛門大夫衆を井伊直政の同心とした。

そして、徳川家康は、山県三郎兵衛の兄で、弓術に優れていた飯富兵部が赤備えだったことから、井伊家の備えをそれに倣うよう命じたという。ここに井伊の



写真3 井伊家中の赤備え

注）彦根鉄砲隊の演武。平成20年（2008）

4月5日、彦根城博物館前にて。

赤備えが誕生し、井伊直政は、数々の戦いにおいて勇猛に戦い、徳川家康の期待に応えていく。

野田氏によれば、この時点では、井伊隊に配属された同心たちは、徳川家康から本領を安堵された家康の家臣であり、井伊直政との間には主従関係が結ばれていなかった⁹⁸。これは、『彦根市史』や『新修彦根市史』では指摘されていなかった重要なポイントである。井伊直政は、この時、徳川家康の近習であって、家康の旗本先手隊を任されただけだったのである。

天正18年（1590）に井伊直政が上野国の箕輪城主になると、直政とその配下の武士たちとの関係が大きく変わった。野田氏によれば、井伊直政が箕輪城主となり、12万石の領知をあてがわれると、徳川家康の命令で直政の配下に属し、直政を政治的・軍事的に支えていた武士たちが直政の家臣となり、直政の12万石の領知の中から領知をあてがわれるようになった。そして、井伊直政と同様に、直政の家臣たちも、本領から離れ、箕輪城下町に集住した。

ただし、徳川家康の命令で井伊直政の配下に付けられていた武士の中には、早川弥惣左衛門が本領の甲斐国中尾郷（現山梨県笛吹市）を離れて上野国の箕輪城下に移ったものの、その子は中尾郷にとどまり、浪人として暮らしたという事例がある。野田氏は、井伊直政に従って箕輪に同行しなかった者や、直政から離れた者が少なからずいたであろうと推測している⁹⁹。その一方で、井伊直政が箕輪城主になった後、かつての箕輪城主長野家に仕えていた箕輪衆や、北条氏の旧臣など、さまざまな経歴の武士が新たに召し抱えられ、井伊家中の規模が拡大した。

4 『侍中由緒帳』から読み解く井伊家家臣団の推移

続いて、井伊家中の移り変わりを、井伊家中の基礎史料である『侍中由緒帳』の分析を通して、確認してみたい。

この史料は、井伊家中のうち、侍身分と歩行身分に位置づけられた家について、途中で廃絶した家も含めて、各家の歴代の業績を書き上げた書類である。元禄4年（1691）に井伊直興の命令で作成が開始され、明治初年まで書き継がれた。全部で80冊あり、現

⁹⁸ 野田浩子『井伊直政 家康筆頭家臣への軌跡』、67頁。

⁹⁹ 野田浩子『井伊直政 家康筆頭家臣への軌跡』、128頁。

在、彦根城博物館で保管されている。活字化の作業が進められており、『彦根藩史料叢書 侍中由緒帳』の刊行が続けられている。本節では、15巻目までの情報で分析を行うことにする。

江戸時代の井伊家中は、大きく三つの身分に分かれる。

一つ目は、乗馬を許され、領知をあてがわれた侍である。この侍身分は、さらに三つの階層に分かれる。一番目の階層は、1000石以上の領知をあてがわれた詰衆である。詰衆は、戦時には、侍大將として侍組を率い、旗奉行・鍵奉行・足輕組物頭をつとめた。平時には、家老・

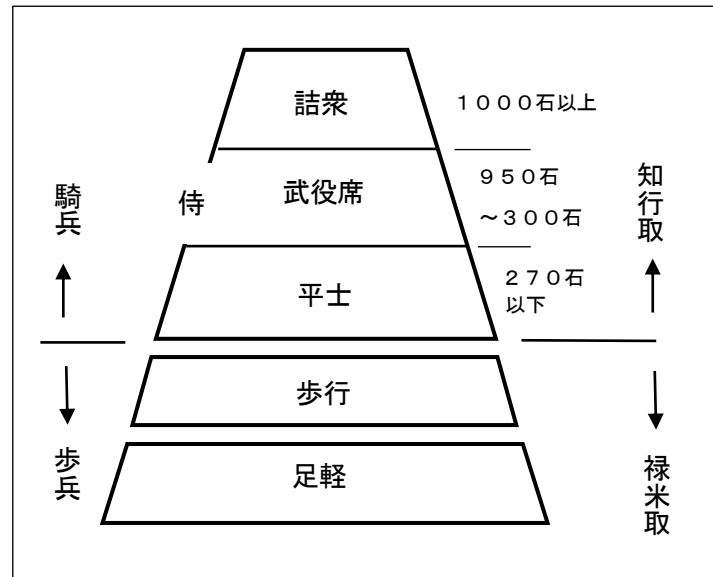


図3 井伊家の家臣構成

中老・用人をつとめた。二番目の階層は、950石から300石までの領知をあてがわれた武役席である。戦時には、弓や鉄砲の足輕組の物頭や母衣役などをつとめた。平時には、用人・側役・町奉行・筋奉行・小納戸役・城使役などをつとめた。三番目の階層は、平士である。270石以下の領知をあてがわれた中級家臣である¹⁰⁰。

二つ目の身分は、乗馬を許されず、井伊家の知行から俸禄米を与えられた歩行である¹⁰¹。

三つ目の身分は、足輕である。歩行と同様に、乗馬を許されず、井伊家の知行から俸禄米を与えられた。江戸時代前期には、原則として、一代ごとに雇い直された¹⁰²。

ここでは、この三つの身分のうち、侍身分と歩行身分に焦点をあて、彼らが、井伊家にいつ召し抱えられたのか、彼らの本拠地がどこだったのかを分析する。

『侍中由緒帳』の15巻目までには、途中で廃絶した家も含めて、江戸時代に彦根城下町で暮らしていたおよそ470家の侍と歩行の由緒が掲載されている。井伊家の家臣のうち、江戸や佐野など、彦根以外の場所に常駐続けた家臣の記録は含まれていない。また、

¹⁰⁰ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、113頁。

¹⁰¹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、115頁。

¹⁰² 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、125～133頁。

元禄4年（1691）以降の情報であることから、元和元年（1615）に井伊直継に従って上野国安中に移住した家臣たちの記録も含まれていない。『侍中由緒帳』の15巻目までに収録された家を、井伊家に召し抱えられた時期や出身地ごとにまとめたのが、表3である。この表では、5つの時期を設定した。それぞれの時期ごとに、特徴を説明する。

第1期は、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦い以前とした。この時期に召し抱えられたのは、84家である。すべて井伊直政に召し抱えられた家臣の家である。本来ならば、井伊家の本拠地である遠江国出身の家が一番多かったはずであるが、井伊直継が上野国の安中城主になった時に、井伊谷時代の家臣の多くを上野国に連れて行ってしまったため、遠江国出身の家は15家にとどまり、それほど多くない。もっとも多いのは甲斐国出身で、23家ある。前述の通り、井伊直政は、天正10年（1582）に滅亡した武田家の家臣を徳川家康の命令で配下に置いた。それがこの数字に反映されている。天正10年（1582）には、徳川家康の直臣も井伊直政の配下に付けられた。その関係で、遠江国出身の15家に加え、駿河国・三河国出身も多く、駿河国出身の家は7家、三河国出身の家は6家ある。上野国出身の家家が駿河国出身の家数と同じ7家と多いのは、徳川家康が関東地方に移封されたのにもなって、井伊直政が上野国の箕輪城主となり、その後、同国の高

表3 井伊家家臣の召し抱えられた時期と本拠地

| | |
|----------------|--|
| 第1期（～1599） | 甲斐23、遠江15、上野7、駿河7、三河6、相模4、信濃3、伊勢2、近江2、武蔵2、伊賀1、和泉1、越後1、下野1、美濃1、山城1、分家2、不明5（合計84家） |
| 第2期（1600～1614） | 上野13、三河8、甲斐5、近江4、遠江4、伊賀3、信濃2、下野2、安芸1、和泉1、越前1、尾張1、上総1、河内1、相模1、下総1、駿河1、筑前1、常陸1、美濃1、武蔵1、山城1、分家5、不明16（合計76家） |
| 第3期（1615～1687） | 近江25、下野8、上野7、常陸7、美濃5、甲斐4、信濃4、三河4、伊勢3、伊予3、越後3、越前3、江戸3、長門3、尾張2、河内2、京都2、相模2、遠江2、大和2、阿波1、安房1、伊賀1、和泉1、因幡1、岩代1、加賀1、讃岐1、志摩1、摂津1、丹波1、筑前1、出羽1、肥後1、備前1、日向1、豊後1、山城1、分家78、養子1、不明39（合計230家） |
| 第4期（1688～1800） | 近江4、京都2、甲斐1、下野1、出羽1、美濃1、美作1、武蔵1、分家40、養子1、不明11（合計64家） |
| 第5期（1801～） | 越後1、江戸1、甲斐1、分家13、養子1、不明2（合計19家） |

崎に居城を移すなかで、地元の武士を召し抱えたことによる。

第1期に召し抱えられた家臣の特徴として指摘しておきたいのが、江戸時代に井伊家の家老・中老をつとめた家の大多数が、この時期に召し抱えられたということである。

表4は、江戸時代後期であるが、文政13年（1830）に家老・中老をつとめていた家を書き上げたものである。家老・中老は、井伊家とともに政治に責任を持つ家で、井伊家の表御殿に定期的に出仕したり、当番家老の居屋敷に定期的集まって、重要な政務を合議した詰衆である。本拠地は、『彦根市史』で指摘されているように、三河国、遠江国、上野国、武蔵国、甲斐国と、東海・関東地方に固まっており、彦根城がある近江国出身の家はない。徳川家康が井伊直政に付けた重臣層が、江戸時代を通じて、井伊家とともに政治に責任を持つ支配者層であり続けたのである。

表4 文政13年における家老・中老の家

| | | |
|----|-----------|--|
| 家老 | 木俣清左衛門家 | 三河出身。もと徳川家康の家臣。1582年（天正10年）に井伊直政に付けられた。 |
| 家老 | 小野田小一郎家 | 遠江出身。もと徳川家康の家臣。1584年（天正12年）に井伊直政に付けられた。 |
| 家老 | 宇津木治部右衛門家 | 上野出身。もと武田家・北条家の家臣。1590年（天正18年）に井伊直政に仕えた。 |
| 家老 | 横内修理家 | 武蔵出身。もと北条家の家臣。主家滅亡後に高崎城主井伊直政に仕えた。 |
| 家老 | 西郷藤左衛門家 | 遠江出身。もと徳川家康の家臣。1582年（天正10年）に井伊直政に付けられた。 |
| 家老 | 長野十郎左衛門家 | 上野出身。箕輪城主長野業正の子。徳川家康の命令で井伊直政に付けられた。 |
| 家老 | 三浦与右衛門家 | 遠江出身。もと武田家・北条家の家臣。1590年（天正18年）に井伊直政に仕えた。 |
| 中老 | 戸塚左太夫家 | 遠江出身。もと徳川家康の家臣。箕輪城主井伊直政に付けられた。 |
| 中老 | 脇五右衛門家 | 甲斐出身。もと武田家の家臣。1583年（天正11年）に井伊直政に付けられた。 |

第2期は、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いから慶長19年（1614）の大坂冬の陣までとした。この時期に井伊家に召し抱えられた家臣は、三つに分類できる。関ヶ原の戦いの直後に近江国の佐和山城主となった井伊直政に召し抱えられた家臣、佐和山城主から彦根城主にかわった井伊直継に召し抱えられた家臣、彦根城主になる前の井伊直孝に召し抱えられた家臣である。この時期に召し抱えられた家臣の家数は76家であるが、その出身地は、表3に示されているように、東は常陸国、西は筑前国と、第1期よりもその範囲が広がっている。上野国出身が13家と最も多いのは、この時期に、井伊直孝が上野国の白井城（現在の群馬県渋川市白井に所在）の城主だったことによる。『新修彦根市史』で指摘されているように、井伊直孝は、居城の近くにいた武士を積極的に召し抱えた。下野国出身の2家、下総国出身の1家も、井伊直孝が白井城主時代に召し抱えた家臣の家である。

第3期は、元和元年（1615）から貞享4年（1687）までとした。この時期は、井伊直孝、井伊直澄、井伊直興が彦根城主をつとめた。井伊直孝の代に井伊家の知行高が15万石から30万石に倍増したこともあり、第3期にたくさん家臣が召し抱えられた。この時期に井伊家に召し抱えられた家臣の家数は230家である。その出身地は、北は出羽国、西は肥後国と、その範囲が第2期よりもさらに拡大した。それらの出身地のなかで、最も家数が多いのは、『彦根市史』で指摘されているように、近江国であり、25家と突出している。井伊家は、この時期に居城である彦根城の近隣地域から積極的に家臣を召し抱えた。その中には、かつて愛知郡の肥田城主だった高野瀬氏の子孫である高野瀬喜介家、彦根城が築かれた彦根山の近くに位置する犬上郡松原村の地侍だった松原庄左衛門家など、戦国時代に地元で勢力のあった武士の家が含まれている。また、御典医として召し抱えられた愛知郡中宿村出身の西尾隆治家、鉄砲細工師として召し抱えられた坂田郡国友村出身の橋本太右衛門家、井伊家の御用船の運航に携わる水主として召し抱えられた犬上郡松原村出身の高田利右衛門家など、特殊な技能を有していたことから井伊家に召し抱えられた家臣の家もある。

第3期の特徴としてもっとも注目すべきは、分家が多いことである。この点は、『彦根市史』でも、『新修彦根市史』でも論及されていない。第3期の分家は、全部で78家にも及び、第3期に召し抱えられた家臣の家の約3割にあたる。

表5は、第3期を、井伊直孝の代、井伊直澄の代、井伊直興の代の3期に分け、それぞれの時期にたてられた分家の家数とその割合をまとめたものである。分家の割合を見ると、

表 5 第 3 期に召し抱えられた家臣のうち分家の家数とその割合

| | |
|-------------------|----------------------------------|
| 井伊直孝の代（1615～1659） | 総数 153 家、うち分家 32 家（分家の割合は 20.9%） |
| 井伊直澄の代（1659～1676） | 総数 38 家、うち分家 20 家（分家の割合は 52.6%） |
| 井伊直興の代（1676～1687） | 総数 36 家、うち分家 25 家（分家の割合は 69.4%） |

注）召し抱えられた時期が特定できない 3 家を除く。

直孝の代が 20.9%、直澄の代が 52.6%、直興の代が 69.4%であり、時期を追うごとに分家の割合が高くなっている。第 3 期に井伊家に召し抱えられたそれぞれの家臣の家の由緒を確認してみると、大坂の陣の直後は、日本各地の浪人を井伊家が召し抱える動きが中心だった。ところが、彦根城下町の拡大が収まり、城下町の形がほぼ定まった寛永 21 年（1644）頃から分家をたてる動きが目立ち始め、直興の代には、分家で井伊家の家臣団の家数を維持する動きが主流となった。井伊家の知行高の増加にともなって、日本各地から多くの有能な浪人を召し抱えるという動きは、寛永年間（1624～45）までの現象であり、その後は、井伊家の家臣の子弟を分家させて井伊家の家臣団を維持するようになったのである。

第 4 期は 17 世紀末の元禄元年（1688）以降、第 5 期は 19 世紀初頭の享和元年（1801）以降とした。第 4 期に井伊家に仕えることになった家は 64 家、第 5 期に井伊家に仕えることになった家は 19 家であり、時期が移るにつれて、井伊家に召し抱えられる家臣が減少したことが確認できる。分家の割合は、それぞれの時期とも、全体の 60%台であり、第 3 期の井伊直興の代の割合が維持されている。

第 4 期・第 5 期の特徴として押さえておきたいことは、これらの時期においては、縁故による召し抱えが目立つということである。例えば、妹が井伊直惟の側室となった縁により、享保 16 年（1731）に井伊家に召し抱えられた高橋四郎兵衛家、娘が井伊直中の側室となったことから、文化 5 年（1808）に三人扶持を賜り、安政 2 年（1855）に 150 石の領知をあてがわれた君田十助家が、井伊家と縁故関係ができたことから、井伊家の家臣となった代表例である。ただし、縁故による召し抱えは、『新修彦根市史』で指摘されているように、すでに第 2 期から見られた現象である。第 4 期・第 5 期に井伊家との縁故を理由に召し抱えられたケースが目立つのは、これらの時期には、武力や政治力などの能力を評価された新規の召し抱えが少ないことから、相対的に縁故による召し抱えが目立つことになったためである。

井伊家は、寛永年間（1624～45）までは、居城の近くを中心に、全国各地の武士を、能力によって、あるいは、縁故によって召し抱え、家臣団を拡大していったが、17世紀半ば頃から、縁故による召し抱えに加え、分家によって家臣団の規模を維持する方法に主軸を移したのである。

5 小括

井伊家は、天正18年（1590）に主家の徳川家が東海地方から関東地方に移封されたことにともなうて、本拠地である遠江国を離れて上野国に拠点を移し、さらに、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの直後に、近江国に拠点を移した。井伊家は、それぞれの拠点において、居城の近くの武士を召し抱えたが、居城から離れた土地を本拠地とする武士を召し抱えることも少なくなかった。井伊家が遠江国井伊谷を本拠地としていた時に召し抱えた家臣も、井伊家の本拠地が上野国に移った時に召し抱えられた家臣も、主家である井伊家の転封にともなうて、それぞれ本拠地を離れることになった。井伊家の本拠地が近江国に定まった時に召し抱えられた近江国出身の家臣も、その本拠地に住み続けることを許されず、彦根城下町での居住を命じられた。

江戸時代の武士は、大名も、大名の家臣も、さらに天下人さえも、その家の中世以来の本拠地で中世と同じ支配体制を維持することはできなかった。織豊期以降、武士たちは、日本国内を大規模に移動しながら、中世までとは異なる新たな土地で、新たな支配体制を構築した。その新たな支配体制とは、城を中心に集住した武士たちがまとまって、組織的に支配を行うという体制である。近世の日本においては、中世のように、武士が本領を安堵され、個別に土地や人民を支配することはできなかった。

武士が見知らぬ土地で新たな支配体制を構築する際に必要となるのが、江戸時代以前からその土地で暮らし続けてきた村落住民との間で信頼関係を結び、その関係を維持することである。井伊家は、彦根城主となつてから、高野瀬喜介家や松原庄左衛門家など、地元で勢力のあった武士を召し抱えたが、それは、地元住民とのパイプ役を期待してのことであつた。他の大名家においても、地元の武士を召し抱え、地元住民とのパイプ役を果たさせたであろうことは想像に難くない。

しかし、大名家の支配が安定すると、他領から新たに家臣を召し抱えることは、リスクの方が大きくなる。異なる家風に馴染んだ武士の召し抱えによって、家中の秩序が乱れる

恐れがあるからである。井伊家において、17世紀半ば以降、新規召し抱えが減り、縁故による召し抱えや分家によって家臣団の規模が維持されたのは、17世紀半ば頃までに井伊家の支配体制が固まり、17世紀後半に文武両道を旨とする井伊家中の家風が出来上がったことによるものであろう。

第3節 彦根城下町の成立をめぐって

1 佐和山城と彦根城についての誤解

近世日本の政治権力と不可分の関係にある城下町は、織豊期から江戸時代初期にかけて、日本各地に誕生した¹⁰³。城下町は、統治にかかわる武士が領地から切り離されて、城を中心に集住することによって形成された都市であり、そこには武士の生活を支える多数の商人や職人も集住した。彼らは、農村部で暮らす百姓と区別され、町人として把握された。

井伊家も、天正18年（1590）に上野国の箕輪城（現在の群馬県高崎市箕郷町に所在）を預けられた時に、箕輪城下町を誕生させた。その後、井伊家の居城が上野国の高崎城（現在の群馬県高崎市高松町に所在）、近江国の佐和山城（現在の滋賀県彦根市古沢町などに所在）、彦根城（現在の滋賀県彦根市金亀町に所在）に移っていくが、それぞれの城のまわりに武士と町人が暮らす城下町が形成された。

彦根は、慶長年間（1596～1615）に誕生した城下町の一つであり、その時期に誕生した多くの城下町と同じように、琵琶湖岸の沖積平野に造成された。彦根城下町は、江戸時代を通じて彦根城主であり続けた井伊家の城下町として広く知られている¹⁰⁴。しかし、江戸時代を通じて彦根城主であり続けた井伊家の城下町というイメージが強いためか、その成立をめぐって、これまで大きな誤解が存在していた。

彦根城の東には、石田三成の居城として有名な佐和山城がある。この二つの城については、これまで対立的にとらえられる



図4 佐和山と彦根山の位置関係

注) 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第10巻、彦根市、2011年、60頁より。

¹⁰³ 藤田達生『藩とは何か』、中央公論新社、2019年、iv頁。

¹⁰⁴ Kobayashi Takashi 「A Study on Improvement of the Local Image: Honor Recovery of Ii Naosuke」(『IWRIS2020』、2020年)。

ことが多かった。例えば、『新修彦根市史』第3巻（通史編 近代）の「巻報」に、彦根市出身の高名なジャーナリストである田原総一郎氏が寄稿した文章が掲載されているが、そこに次のような記述がある。

彦根の、私が生まれた家の二階の窓から、右には佐和山城が、そして左には彦根城が見えた。

私にとっては、これが原初風景である。

佐和山には石田三成の居城があった。三成は豊臣秀吉の五奉行として筋を通し、関が原で徳川家康側と戦った。しかし敗れて、三成は殺され、佐和山城は跡方もなく消滅させられて、三成は徳川三〇〇年間抹消されつづけた。

一方、彦根城の象徴的城主は井伊直弼である。直弼が公儀の大老としてアメリカの開港の求めに応じたのは、やむを得ない措置であり、一つ間違えば植民地にされかねない状況であった。英断といってよい¹⁰⁵。

田原氏にとって、佐和山城は石田三成の城、彦根城は井伊直弼に代表される井伊家の城である。これは、田原氏に限らず、多くの彦根市民に共通した認識である。

しかし、この認識には問題がある。関ヶ原の戦いの直後、佐和山城は、井伊直政に預けられ、直政の子である直継が受け継いだ。井伊直継の代に、井伊家の居城が琵琶湖岸の彦根山に移されて、佐和山城が廃城となった。佐和山城の最後の城主は、石田三成ではなく、井伊直継である。また、佐和山城は、田原氏が述べるように、石田三成が、関ヶ原の戦いで敗れ、処刑されたことによって、跡形もなく消滅させられたわけではない。井伊直継の代まで存続し、彦根城の築城にあたって、佐和山城の部材の一部が彦根山に運ばれ、彦根城の築城に活用された。古くから佐和山城の石垣が彦根城に移築されたと言い伝えられてきたが、彦根市教育委員会の文化財課が平成24年（2012）と翌年に実施した彦根城の石垣の保存修理にともなう発掘調査によって、佐和山城の石垣や瓦の破片が彦根城の鐘の丸や太鼓丸などの石垣の中から発見され、佐和山城の部材が彦根城の築城に使われたことが実証された。このように、佐和山城と彦根城との間には、連続性が存在するのである。

彦根城下町についても、佐和山城下町との連続性を有している。江戸時代の地誌などによれば、彦根城下町の本町（現彦根市本町一丁目・二丁目）、藁屋町（現彦根市城町二丁目）、円常寺町（同前）、石ヶ崎町（現彦根市城町二丁目など）、下魚屋町（現彦根市城町一丁目

¹⁰⁵ 田原総一郎「“私と彦根”」（『新修彦根市史第三巻付録 巻報8』、彦根市教育委員会市史編さん室、2009年）。

など)、佐和町（現彦根市立花町など）は、井伊家の居城の移転にともなって、佐和山城下町の町家が移転してできた町人町である¹⁰⁶。

これらの町人町のうち、下魚屋町については、齋藤純氏が資料紹介した「下魚屋町御改帳跡」（専修大学生田図書館所蔵）をもとに¹⁰⁷、水本邦彦氏が下魚屋町の住民の来歴を詳細に分析し、佐和山城下町から彦根城下町へ移住した町人がいたことを実証した¹⁰⁸。本節では、水本邦彦氏の研究成果によりながら、齋藤純氏が紹介した「下魚屋町御改帳跡」の記載内容に、彦根城博物館などに残る古絵図に記録された情報を重ね合わせて、佐和山城下町から彦根城下町への移行過程をたどる。



写真4 旧下魚屋町のまちなみ

2 佐和山城下町から彦根城下町への移住

「下魚屋町御改帳跡」は、江戸時代前期の慶安2年（1649）6月25日の日付で提出された帳面の控えである。下魚屋町の居住者について、家ごとに、当主の来歴、当主の親や祖父の居住地や職業、当主の妻の出身地、当主と子どもの年齢と居住地、使用人の有無などが記されている。この資料に記録されている家は、全部で99軒である。

下魚屋町は、彦根城の中堀と外堀に挟まれた第3郭（外曲輪）に位置する内町の一つで、その名の通り、魚屋を営む家が多い町人町だった。彦根城の築城と彦根城下町の造成が始まった慶長9年（1604）に誕生した。当初は、魚屋町と呼ばれ、本町・四十九町（現彦根市城町一丁目など）・佐和町とともに、彦根城下の町人町を統括する親町だった。その

¹⁰⁶ 小林隆「彦根城下町の改造」（淡海文化財論叢刊行会編『淡海文化財論叢』第7輯、2015年）、160頁。

¹⁰⁷ 齋藤純「近世前期、彦根城下町住民の来歴について（上）―慶安二年「下魚屋町御改帳跡」の紹介―」（専修大学学会編『専修人文論集』55、1994年）、同「近世前期、彦根城下町住民の来歴について（下）―慶安二年「下魚屋町御改帳跡」の紹介―」（専修大学学会編『専修人文論集』57、1995年）。

¹⁰⁸ 水本邦彦『徳川社会論の視座』（敬文社、2013年）、91～120頁。

後、佐和町とともに、親町の地位を、彦根城の外堀より外側の城外に位置する河原町（現彦根市銀座町など）と彦根町（現彦根市佐和町など）に譲った¹⁰⁹。

水本邦彦氏は、「下魚屋町御改帳跡」に記載されている99軒のうち、来歴が記載されていない武家奉公人を当主とする7軒、夫於来歴を簡単に記しただけの、夫を亡くした女性が当主の10軒を除いた82軒を、次のように3つに分類した。

- ・ A型町人＝親の代から町人である住人 49軒
- ・ B型町人＝自分の代に村形から彦根城下町に到来し、町人化した住人 30軒
- ・ C型町人＝親が彦根家中の奉公人だった住人 3軒

そして、A型町人のうち、28軒が佐和山城下町の一角である古沢から移住者であることを明らかにした¹¹⁰。

古沢から下魚屋町への移住者が「下魚屋町御改帳跡」にどのように記されているか、その一例を示すと、次の通りである。

同家家持

太兵衛 年三十壱

一、生れ当地下魚屋町之者、我等幼少ニ而親相果申候、其跡ヲ次母と壱所ニ肴売仕罷有候、親代より五十年以来者聞伝存候、祖父代々義者不存、親代より町人ニて御座候

一、我等親甚次郎、生古沢之もの、四十五年以前ニ御町替ニ付下魚屋町へ罷越、替屋敷申請家ヲ立、肴売仕罷有候得共、三十年以前ニ下魚屋町ニ而相果申候、我等者甚次郎同町ニ肴売仕罷有候

下魚屋町に自宅を持つ31歳の太兵衛は、下魚屋町生まれであり、30年前に父親が亡くなった時、生まれたばかりではあったが家を継ぎ、その後、母と一緒に魚を売って暮らしてきた。太兵衛の父親の甚次郎は、古沢生まれで、45年前に、「御町替」によって彦根の下魚屋町に引っ越し、「替屋敷」を申請して家を建て、魚を売って暮らしていた。ここで問題となるのが、太兵衛の父親である甚次郎が、45年前に「御町替」によって古沢から彦根の下魚屋町に引っ越してきたということである。慶安2年（1649）の45年前は、慶長9年（1604）である。この年は、井伊家が居城を佐和山から彦根山に移し、彦根山の麓の沖積平野で彦根城下町の造成が始まった年である。「町替」の前に「御」という尊

¹⁰⁹ 小林隆「彦根城下町の改造」、160頁。

¹¹⁰ 水本邦彦『徳川社会論の視座』、97頁。

敬の意を表す文字がつけられているということは、「町替」は、町人である太兵衛よりも身分が上の人の行為である。ここでは、彦根城主である井伊家が町を替えること、すなわち、井伊家が城下の町人町を彦根山の麓に移したことを意味する。城下町で暮らす町人は、彦根城主の許しを得て彦根城下に自宅を構えることになっていたようで、太兵衛の父親の甚次郎は、「替屋敷」、すなわち、自宅を佐和山城下から彦根城下に移し替えることを井伊家に申請し、井伊家の許可を得て、彦根の下魚屋町に新しい自宅を建てたのである。

太兵衛の事例を踏まえると、下魚屋町は、慶長9年（1604）に彦根城下町の造成が始まった時に誕生した。そして、その時に、井伊家の許しを得て、佐和山城下の古沢から彦根の下魚屋町に移住した住民が存在したのである。

3 佐和山城下の魚屋町について

慶長9年（1604）に彦根の下魚屋町に移住してきた人たちの一部がかつて暮らしていた古沢は、井伊直継が最後の城主となった佐和山城下の地名である。彦根市内には、「古沢町」という大字があり、その位置は、佐和山西麓一帯である¹¹¹。実は、「下魚屋町御改帳跡」には、他の史料の情報と突き合わせると、古沢から下魚屋町に移住してきた人たちが暮らしていた場所が、現在の彦根駅付近であったと推定できる記述がある。それは、次の記述である。

同町家持

三郎右衛門（門） 年七拾五

一、生当国甲賀郡畑村之者、六十六年以前ニ親子共ニ当地古沢へ罷越家立、拾三年親与老所ニ罷有、其後四拾五年以前ニ御町替ニ付下魚や町替屋敷申請、家酒屋仕罷有候、七拾年以前者聞伝存候、祖父義ハ覺不申候、親代より町人ニ御座候

一、我等親衛門、生甲賀郡畑村之者、六拾貳年以前ニ古沢魚屋町ニ而相果申候、我等いとこ長左衛門畑村ニ百姓仕罷有候

75歳の三郎右衛門は、45年前の「御町替」にともなって佐和山城下の古沢から彦根の下魚屋町への「替屋敷」を申請して下魚屋町に家を建て、酒屋を営んだ人物である。三郎右衛門が生まれたのは古沢ではなく、近江国甲賀郡畑村（現甲賀市信楽町畑）である。

¹¹¹ 平成29（2017）11月25日に「駅東町」が誕生したことによって、彦根駅の東側が古沢町の範囲から外れた。

三郎右衛門は、「下魚屋町御改帳跡」が作成された慶安2年（1649）の時点で、数え年の75歳なので、甲賀郡畑村で生まれたのは天正3年（1575）である。生まれてから13年間、親と一緒に暮らしたが、その途中、慶安2年（1649）の66年前の天正11年（1583）に親と一緒に古沢に移住した。父親の衛門が慶安2年（1649）の62年前、天正15年（1587）に古沢魚屋町で亡くなったと記されているので、三郎右衛門が父親の衛門と一緒に古沢で暮らしたのは、わずか4年ほどである。

ここで注目したいのが、父親の衛門が亡くなった場所、すなわち、三郎右衛門の家族が暮らしていた場所が「古沢魚屋町」と記されていることである。複数の絵図・地図を突き合わせると、その場所が現在の彦根駅付近であることがわかる。

彦根城博物館が所蔵する「沢山古城之絵図」は、佐和山城や佐和山城下町にかかわる情報を記録した絵図である。この絵図については、すでに中井均氏が分析しており、佐和山の西側山麓に、石ヶ崎町、新町、魚屋町、馬喰町などの町が存在したことを明らかにした¹¹²。この絵図を見ると、佐和山の西側、切通道の南側を流れる猿ヶ瀬川の南に「新町筋跡」と書かれた細長い土地がある。「新町筋跡」のさらに南側に水路があり、その水路の北辺に沿う細長い土地に「魚屋町跡」、水路の南辺に沿う細長い土地に「馬喰町跡」という説明書きがある。

『彦根 明治の古地図』（3）に収録されている古沢村小字図を見ると、古沢村の南端に「馬喰町」という小字がある。このあたりが、佐和山城下の馬喰町であろう。そうすると、その北に位置する「南古町」「北古町」のあたりに、魚屋町や新町筋があったはずである。「北古町」と「南古町」は、現在の



図5 古沢村小字図（部分）

注）彦根市史編集委員会編『彦根 明治の古地図』

3、彦根市、2003年、82頁より。

¹¹² 中井均「佐和山城の歴史と構造」（城郭談話会編『近江佐和山城・彦根城』、サンライズ出版株式会社、2007年）など。

彦根駅の位置にあたる。彦根駅の住所は、「古沢町」である。

これらの情報から判断すると、三郎右衛門の家族が暮らしていた「古沢魚屋町」は、現在の彦根駅の位置にあったと考えられる。「魚屋町」という名称からすると、そこには魚を売る人たちが集まって暮らしていたと思われる。「下魚屋町御改帳跡」に佐和山城下の古沢から彦根の下魚屋町に移住してきたと記されている家は、すべてではないが、魚の販売を家業としている家が多い。彦根の下魚屋町に移住する前、佐和山城下の古沢で暮らしていた時にも、魚の販売を家業とし、「古沢魚屋町」に暮らしていたのではないかと推測される。

4 佐和山城下町の成立時期について

「下魚屋町御改帳跡」に記載された三郎右衛門について、もう一つ注目したい情報がある。それは、三郎右衛門が66年前に親と一緒に甲賀郡畑村から佐和山城下の古沢に移住してきたことである。

慶安2年（1649）の66年前にあたる天正11年（1583）3月に、北近江に進軍してきた柴田勝家に備えて、秀吉が佐和山城に入った。そして、同年4月に柴田勝家が越前国北ノ庄城（現在の福井県福井市に所在）で自害すると、翌月に柴田勝家の子である権六が佐和山付近で殺された。翌年の3月には、織田信雄と連携した徳川家康の軍勢に対抗するため、秀吉が佐和山付近に軍勢を集めた¹¹³。この時の佐和山城主は堀秀政だったが、佐和山城は、堀秀政の居城であるとともに、秀吉の軍事拠点としての役割を果たしていたようである。三郎右衛門の家族が甲賀郡畑村から古沢に移住してきたのは、佐和山城が秀吉の軍事拠点として活況を呈した時期である。

「下魚屋町御改帳跡」には、三郎右衛門の家族と同じ頃から佐和山城下の古沢で暮らしていた別の家族が記載されている。この帳面が作成された慶安2年（1649）に町人代官をつとめていた山中喜介の家族である。

同町家持

山中喜介 年六拾五

一、生れ当地古沢之もの、拾四年之間親与壺所ニ罷有候、親相果候跡次、其後四拾五年以前ニ御町替ニ付下魚屋町へ罷越、替屋敷申請家立、御代官仕罷有候、祖父義ハ覺不申、六拾年以前者聞伝へ存候、親代より町人ニ而御座候

¹¹³ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第12巻（便覧・年表）、彦根市、2013年、172頁。

一、我等親孫九郎、生御領分薩摩村者、五拾年以前ニ古沢ニ而相果申候、親在所ニ而
の田地我等いとし市兵衛預御百姓仕爾今罷有候

山中喜介は、佐和山城下の古沢生まれである。14年間、親と一緒に暮らし、50年前に父親の孫九郎が亡くなった時に跡を継いだ。45年前に「御町替」で彦根の下魚屋町に移住し、「替屋敷」を申請して下魚屋町に家を建て、代官の仕事を引き受けた。

山中喜介の父親である孫九郎は、琵琶湖岸に位置し、日本海沿岸地域との交易を盛んに行った近江商人の拠点の一つだった愛知郡薩摩村（現彦根市薩摩町）出身である。喜介が古沢で生まれているので、喜介が生まれる前に薩摩村から古沢に移住したことになる。喜介の年齢は数え年の65歳なので、孫九郎が古沢に移住した時期の下限は、慶安2年（1649）の64年前、天正13年（1585）である。この年には、堀秀政にかわって堀尾吉晴が佐和山城主となった。

山中喜介の父親の孫九郎と同じ愛知郡薩摩村出身の九郎三郎も、同じ頃に佐和山城下の古沢に移住したようである。

同町家持

九郎三郎 年八十四

一、生御領分薩摩村之もの、親子共ニ古沢へ罷越家立、式拾四年親与壱所ニ罷有、其
後四拾五年以前に御町替ニ付下魚屋町ニ而替屋舗申請家立、肴売仕罷有候、祖父儀
者不存、八拾年以来ハ聞伝覚申候、親代より町人ニ而御座候、終ニ奉公不仕候

一、我等親三郎介、生薩摩村之もの、六拾年以前ニ古沢ニ而相果申候、我等おい次郎
兵衛同町ニ酒屋仕爾今罷有候

九郎三郎は、愛知郡薩摩村で生まれ、父親の三郎介とともに佐和山城下の古沢へ移住した。生まれてから24年間、親と一緒に暮らし、60年前に父親の三郎介が古沢で亡くなった。45年前に「御町替」で彦根の下魚屋町へ移住し、「替屋舗」を申請して下魚屋町に家を建て、魚を売る商売を続けてきた。

九郎三郎の家族がいつ古沢に移住したのかはわからないが、九郎三郎の年齢が数え年で84歳であることから、上限は慶安2年（1649）の83年前、永禄9年（1566）である。九郎三郎が愛知郡薩摩村で生まれてからしばらくして、佐和山城が織田信長の支配下に入った。元亀2年（1571）に磯野員昌が信長に敗れて佐和山城を去り、信長の家臣である丹羽長秀が佐和山城に入った¹¹⁴。九郎三郎の家族が古沢に移住した時期の下限

¹¹⁴ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第12巻、171頁。

は、父親の三郎介が慶安2年（1649）の60年前、天正17年（1589）に古沢で亡くなっているのです、それ以前である。この年に佐和山城主をつとめていたのは堀尾吉晴だった。九郎三郎の家族が愛知郡薩摩村から古沢へ移住したのは、丹羽長秀・堀秀政・堀尾吉晴のいずれかが佐和山城主をつとめていた時期だった。

以上の事例を踏まえると、佐和山の西麓、古沢への移住者が現れ始めたのは、上限は丹羽長秀の代、確実なところでは、三郎右衛門の家族が甲賀郡畑村から古沢に移住してきた時、すなわち、堀秀政が佐和山城主をつとめていた時期からである。佐和山城が近世城郭としての姿を整え始めたのにもともなって、佐和山の麓に、近江の諸村から移住者が集まり、魚屋町のような同業者が暮らす町を有する城下町が形成されたものと推測される。

5 小括

本節では、専修大学生田図書館に所蔵されている「下魚屋町御改帳跡」などをもとに、佐和山城下町から彦根城下町への移住者について分析した。水本邦彦氏が集計しているように、「下魚屋町御改帳跡」に記載されている99軒のうち、少なくとも28軒が佐和山城下の古沢からの移住者だった。その28軒の当主たちは、親の代から佐和山城下の古沢で暮らしていた人たちだった。どの移住者も、「下魚屋町御改帳跡」では、「親代より町人にて御座候」と記され、古沢で暮らすようになった時から町人としての意識を持っていた。江戸時代の彦根城下でも町人として暮らしていた彼らにとって、佐和山城下町での暮らしが町人としての出発点だったのである。

この点を踏まえると、彦根における城下町の誕生は、江戸時代に彦根城下町が誕生してからではなく、織豊期に佐和山城下町が形成された時からだったと考えるべきである。佐和山城下町の誕生にともなって発生した町人意識が、佐和山城下町の町人が井伊家やその家臣とともに彦根城下町に移住してきたことによって、江戸時代の彦根城下町に引き継がれたのである。佐和山城下町と彦根城下町を対立的にとらえるのではなく、一連のものとしてとらえる視点が、彦根における城下町形成史を考えるうえで必須である。

第2章 近世日本の成熟

第1節 彦根城と彦根城下町の形成過程

1 城下町に関する研究史

城下町は、都市史研究の重要な研究テーマとされ、多くの研究が積み重ねられてきた。

日本の城下町について先駆的な見解を示したのが小野均氏である。小野氏は、昭和3年（1928）、東京帝国大学の卒業論文として『近世城下町の研究』をまとめ、その中で、城下町は、城郭を中心に計画的に形成された都市であると述べ、身分による住み分けが行われた点に特徴があると考えた¹¹⁵。第二次世界大戦後に城下町研究を大きく前進させたのが、歴史地理学者の矢守一彦氏である。矢守氏は、中世末から近世にかけて誕生した城下町を、誕生のプロセスにしたがって五つのタイプに分類し¹¹⁶、さらに、大手につながる街路の形態から、竪町型と横町型の分類を設けた¹¹⁷。

矢守氏が城下町の類型化を試みたのに対し、建築史の伊藤鄭爾氏は、江戸時代の城下町には視覚的に明確に類型化できるパターンは存在せず、日本国内のほとんどの城下町は、中心に城郭を置き、そのまわりに武家町を配し、まちのなかを通る幹線道路沿いに町家を並べるというプランニングに集約できると主張した¹¹⁸。

都市史の分野で、城下町について注目すべき見解を発表したのが、西川幸治氏である。西川氏は、昭和30年代に『彦根市史』の編さんに関わり、彦根城下町の研究を積み重ね、その研究成果などをもとに、近世城郭は、中世の城郭がもっていた戦闘本位の性格を薄め、天下統一あるいは領国支配の拠点としての性格を強め、城下の人々に対して圧倒的な力強さと威厳をもって屹立する權威の象徴になったと述べた。そして、城下町については、「兵農分離」・「商農分離」政策によって、農民を農村に固定し、武士と商人が城下町に集住し、城下町内部においては、武士と商人の居住空間が区別されたと述べ、城下町の中核である城郭は、「閉ざされた核」であり、ヨーロッパの都市の中心にある教会や市場のような都市生活の機能的核にはなかったという注目すべき見解を提示した¹¹⁹。

¹¹⁵ 小野晃嗣『近世城下町の研究』（増補版）、法政大学出版会、1993年。

¹¹⁶ 矢守一彦『都市プランの研究—変容系列と空間構成』、大明堂、1970年。

¹¹⁷ 矢守一彦『城下町のかたち』、筑摩書房、1988年。

¹¹⁸ 伊藤鄭爾「日本都市史」、建築学大系編集委員会編『建築学大系』2（都市論・住宅問題）、彰国社、1960年。

¹¹⁹ 西川幸治『日本都市史研究』、日本放送出版協会、1972年。

城下町については、中心に城郭を置き、そのまわりに武家町を配し、まちのなかを通る幹線道路沿いに町家を並べた都市であるという伊藤氏の定義に、城下町の中核である城郭が、ヨーロッパの境界や市場のような都市生活の機能的核にならず、「閉ざされた核」として嚴重に管理され、城下町においては武士と町人の居住地が明確に区別されたという西川氏の主張を加味すれば、その基本的構造をおおよそ理解したことになる。その都市構造は、天下人である徳川宗家を支える立場にあり、徳川宗家が理想とした政治体制を誰にもまして実現しなければならなかった井伊家の城下町、彦根城下町に典型的に示されている。本節では、江戸時代の地誌をはじめとする文献資料をもとに、彦根城や彦根城下町がどのように形成されていったのかを明らかにする。

2 井伊直継の代の彦根城・彦根城下町

最初に、井伊直継の代の彦根城と彦根城下町の様子を明らかにしておく。

近江国に移ってきた井伊家が最初に居城として預かった佐和山城は、近江国の坂田郡と犬上郡の境界に位置する境目の城であり、中世には、六角氏と京極氏・浅井氏の間で攻防戦が繰り広げられた重要な軍事拠点だった。また、佐和山城の東には京都と東国をつなぐ中世東海道が通っていて、佐和山城は、陸上交通の要衝でもあった。ところが、佐和山城の城下町が、佐和山によって、その東と西に分断されているという大きな問題を抱えていたことなどから、井伊家は、城下町の範囲を一体的に広く取ることができ、何よりも、人や物資を大量にすばやく輸送することができる琵琶湖の湖上交通にアクセスしやすい琵琶湖岸の独立丘陵に居城を移すことを考えた。慶長8年（1603）2月12日、徳川家康が征夷大將軍と右大臣に任命されたが、その月に井伊家の家老の木俣守勝が伏見城で徳川家康に謁見し、家康から井伊家の居城を彦根山に移すことを許されて¹²⁰、慶長9年（1604）に彦根城の築城と彦根城下町の建設が始まった。彦根城は、天下人である徳川宗家が直轄領を治めるとともに、徳川宗家が全国各地の城を大名や旗本にその力量に応じて預け、領地・領民を統治させるという分権的な政治体制が始まったことを告げる、先駆けの城であり、その城を預かった井伊家は、幕末に至るまで、徳川宗家を支える重要な役割を担い続けた。

¹²⁰ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、33～34頁。

近年、彦根城博物館の調査・研究活動や¹²¹、『新修彦根市史』の編さん¹²²などによって、井伊直継の代の彦根城の姿が明らかになってきた。

慶長9年（1604）に始まった彦根城の築城は、当時、大坂城の豊臣家が健在であり、西国の諸大名の中には、豊臣家に味方する可能性のある者が存在したため、西国の押さえである彦根城をできるだけ早く完成させ、豊臣包囲網を早急に構築する必要があったことから、急ピッチで進められた。彦根城の築城は、天下普請で行われ、近隣の大名や旗本が彦根城の建設工事に動員された¹²³。

井伊直継の居館は、初めは彦根城の鐘の丸に置かれ、彦根山の頂上で建設されていた天守が慶長11年（1606）頃に完成すると、天守の隣に造営された本丸御殿が井伊直継の居館となった。

本丸の両脇を固める西の丸と太鼓丸の端に、それぞれ大堀切を設け、大堀切に渡された橋を落とせば、高石垣を築いた西の丸・本丸・太鼓丸が独立の軍事要塞となる、防御性の高い軍事施設が構築された。

この時期に彦根城主をつとめていた井伊直継が幼かったことから、家老たちが直継に代わって政治の実権を握っていた。家老の木俣清左衛門家の屋敷が彦根城の山崎曲輪に設けられ、彦根山南麓、のちに米蔵が設置される場所に、家老の鈴木主馬家の屋敷が設けられた。

江戸時代の地誌では、井伊直継の代の彦根城が井伊直孝の代より後の彦根城より規模が小さかったと説明されている。

彦根山御城御成就ハ、直勝公・直孝公両公之御代也。尤此時分ハ拾八万石之時ニして、御城下今よりハちいさく、御城も今よりハ小城なり。然ルニ、直孝公大坂二陣御忠戦之大切ニ依テ三拾万石となり給ひ、後又々御城御普請有、大城となシ給へり。最初ハ内海も今よりハせまく、中土手・中堀とふもなかりしに、大坂陣以後、御加増御拝領有て、大城御成就有し事、是、諸人之知る処也。

これは、彦根の江戸時代の地誌の一つ、「彦根近郷聞書集」の一節である。この記述によれば、知行高が18万石だった井伊直継（「直勝公」）の代の彦根城は、「中土手・中堀」な

¹²¹ 彦根城博物館編『彦根城の修築とその歴史』、彦根市教育委員会、1995年。

¹²² 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第10巻（景観編）、彦根市、2011年。

¹²³ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、42～43頁。



図6 御城内御絵図

注) 彦根城博物館所蔵。文化11年(1814)に作製されたこの絵図は、彦根城の内堀より内側を描いたものであり、このエリアが御本丸と呼ばれることもある。慶長期にはなかった表御殿や米蔵などが山麓に描かれている。

どが整っていない規模の小さい城だった。ところが、井伊直孝の代に知行高が30万石に増加したことなどもあって、彦根城が増築され、規模の大きな城になったという。引用文の最後に「是、諸人之知る処也」と記されていることから、井伊直孝の代に彦根城の規模が拡大したことは、「彦根近郷聞書集」が作成された当時、多くの人たちに認知されていた常識だった。

ここで注目したいのが、井伊直継の代に、彦根城の「中土手・中堀」が完成していなかったと「彦根近郷聞書集」に書かれていることである。この「中土手・中堀」は、文字通りに読み取れば彦根城の中堀の内側に築かれる土塁と中堀のことである。彦根城は、最終的には、内堀・中堀・外堀の三重の堀が巡らされた城となるが、中堀ラインができていないのであれば、外堀ラインも未完成であったと考えるべきであろう。

江戸時代の彦根の地誌である「近江彦根古代地名記」によれば、河原町の長光寺（現在の彦根市錦町に所在）の裏手にあった「犀ヶ淵」という湧水地が、井伊直孝の代に「中土手・中堀」が完成した時、「御城の囲堀」に変えられたという。長光寺の裏手に設けられた「御城の囲堀」は、その位置関係から、彦根城の外堀のことである。

「彦根近郷聞書集」や「近江彦根古代地名記」の記述に従えば、井伊直継の代には、彦根城の中堀に加えて、外堀も完成していなかったということになる。



図7 彦根御城下惣絵図（部分）

注）天保7年（1836）作製の絵図（彦根城博物館所蔵）に必要な情報を付記した。

彦根藩井伊家文書の「御覚書」でも、井伊直継の代の彦根城は、「ひとへ構斗」であると記されていることから¹²⁴、井伊直継の代の彦根城は、中堀や外堀が完成していない、内堀だけの一重構えの城だったと言える。また、「当御城下近辺絵図附札写」という記録にも、次のような記事が見られる。

一、慶長九年御城御普請御城下御開きの時、御地割有りて武家町家屋敷地拝領有り。其時古城の居宅を引き、屋作せし人も有り。一重構への御城にて所々カキアゲにて有之。依て直孝公御加増御頂戴三十万石と相成り、以後又々御普請被仰出され、御矢倉御門櫓日黒鉄門高石垣御城御殿此時出来、引続き中土手中堀出来す。御城下も同時に広がる。

この記事でも、井伊直継の代の彦根城が「一重構への御城」であり、ところどころで土を「カキアゲ」ただけの状態だったと説明されている。そして、その後、井伊直孝の代に「御矢倉・御門櫓・日黒鉄門・高石垣・御城御殿」が完成し、「中土手・中堀」も完成したという。「当御城下近辺絵図附札写」の記述からも、井伊直継の代の彦根城が内堀だけの一重構えの城だったことがうかがえる。

彦根城下町の様子についても、江戸時代の地誌によれば、井伊直継の代と井伊直孝の代とでは、その規模や様子が大きく異なっていたことがわかる。次に、井伊直継の代の彦根城下町の様子を確認する。

彦根城下町の造成は、彦根城の築城と同時に始められた。彦根山の近くにあった長曾根村・彦根村・里根村などの住人を他の場所に移住させて、侍屋敷や足軽組屋敷の建設が進められた。彦根城の天守を築いた彦根山の麓には、重臣屋敷が配置された。前述の通り、彦根城の内堀より内側に設けられた重臣屋敷もあった。

重臣屋敷群の外側には、一般の侍屋敷が配置された。

埋堀の所は大き成る淵にて、是、三郎兵衛領境の入口也と云ふ。直勝公、此の淵埋めさせられ、武士屋敷に被仰付し故に、此所を埋堀と号す。

これは、「近江彦根古代地名記」の一節である。この記事によれば、井伊直継の代に、現在の彦根市本町一丁目の北東部にあった淵を埋めて侍屋敷を建設し、埋堀町（現彦根市本町一丁目）という武家町が設けられたことがわかる。

彦根城下町の外縁部には、足軽組屋敷が配置された。

¹²⁴ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、59頁。

一、橋本町裏手より下、南北を立として西東を横とし御足輕町順礼街道より上へ通り
たる町二筋有り。立町十七筋此処四十六組大坂御陣前より有りしなり

これは、「当御城下近辺絵図附札写」の一節である。この記事によれば、橋本町と順礼街道に挟まれた善利組の足輕組屋敷（現在の彦根市芹橋一丁目・二丁目に所在）は、「大坂御陣前」、すなわち、井伊直継の代には建設されていたようである。

一方、町人居住地についても、武家屋敷とともにその造成が進められた。町人居住地の造成は、彦根城の大手口の近く、現在の京橋口交差点付近の本町（現彦根市本町一丁目・二丁目）から開始された。この彦根城下の本町は、佐和山城下にあった本町を移したものである可能性が高い。

一、御当地町家御役家五十六町之起りハ、慶長九年彦根御開キ之節、田畑をつふされ
最初に本町より割初りたる故、本町と付と言つたふ、又一説にハ古城石田家之町家
に本町といふあり。其本町より引ケ名町家故ニ本町と付きしともいふ

これは、「御領分並びに御城下町旧家有増由緒聞書」の一節である。「一説にハ」という但し書き付きではあるが、石田三成の居城であった佐和山城の城下にあった本町を彦根城下に移したことから、本町の名前が継承されたという。彦根城博物館が所蔵する「沢山古城之絵図」には、佐和山城の東側、大手口近くの内堀と外堀に挟まれたエリアが本町筋であると記されている¹²⁵。彦根城下町の造成にあたって、佐和山城の大手口の近くにあった本町を彦根城の大手口の近くに移した可能性が考えられる。

江戸時代の地誌などの文献資料によれば、彦根城下町の藁屋町（現彦根市城町二丁目）、円常寺町（同前）、石ヶ崎町（現彦根市城町二丁目など）、下魚屋町（現彦根市城町一丁目など）、佐和町（現彦根市立花町など）も、佐和山城下の町家を移転させてできた町人町であることが確認できる。井伊直継の代の彦根城下町の造成は、長曾根村などの住人を立ち退かせたあと、佐和山城下町から武家屋敷や町家を移転させる作業を中心に進められたものである。

井伊直孝の代以降、彦根城下の町人町は、彦根城の外堀より内側に位置する町人町が内町、外堀より外側の城外に位置する町人町が外町と呼ばれた。ところが、前述の通り、井伊直継の代には彦根城の外堀が完成していなかったため、その当時は、内町・外町という区別はなかった。

¹²⁵ 彦根市教育委員会事務局文化財部文化財課「佐和山城跡解説シートⅡ」など。

一、往古は今之中土手といふ事もなく一統一面之平地也直孝様二度目之御城普請之節より中土手・中堀出来して、内町外町之差別立ちたり。

これも「御領分並びに御城下町旧家有増由緒聞書」の一節である。

「往古」、すなわち、井伊直継の代には「中土手」が完成しておらず、のちに中堀が完成する場所には平地が広がっていたが、井伊直孝の代、二度目の築城が行われた時に、「中土手・中堀」が完成し、それとともに、内町と外町の区別ができたと説明されている。

内町と外町を区別するラインは、実際には、中堀ではなく、外堀であるが、彦根城の中堀が完成した時、すなわち、外堀も完成した時に、内町と外町の区別が生じたのである。

江戸時代の彦根城下の町人町は、4つのグループに分かれ、それぞれのグループに属する町人町を親町が統括していた。

此件往古国初之時ハ内町四手也本町・四十九町・魚屋町・佐和町、如此、

一、往古より、当初之定として本町・四十九町・河原町・彦根町、此四町を彦根の四手と名付て親町といたし、此四町より諸方へ言渡といふ、

これも、「御領分並びに御城下町旧家有増由緒聞書」の一節である。箇条書きの文章を見ると、昔から、当初の定めとして、彦根城下の町人町を、本町・四十九町（現彦根市城町一丁目など）・河原町（現彦根市銀座町など）・彦根町（現彦根市佐和町など）の四町を親町とする四手に分け、親町からそれぞれのグループ内の町人町に触などを伝達させたと記されている。

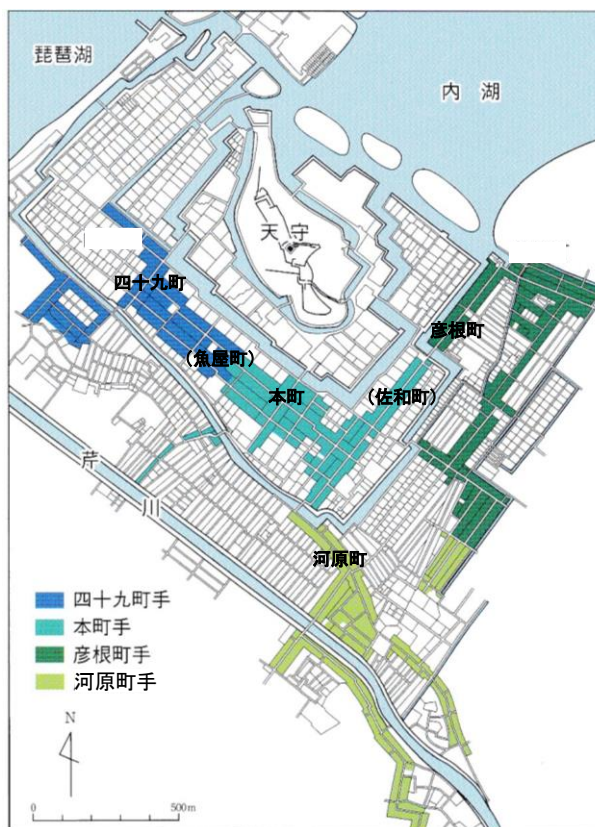


図8 彦根城下の親町

注) 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第10巻
(景観編)、彦根市、2011年、113頁に掲載
された図に必要な地名を付記した。

ここで注目したいのが、この箇条書きの注記である。この注記に従えば、彦根城の築城や彦根城下町の造成が始まった時（「国初之時」）、すなわち、井伊直継の代の彦根城下の四手は、のちに内町とされる町人町だけで構成されており、本町・四十九町・魚屋町・佐和町を親町としていたということになる。この説明を踏まえると、井伊直継の代に誕生した町人町は、のちに彦根城の中堀と外堀に挟まれた第2郭の内町エリアに集中しており、彦根城の外堀より外側の城外に位置する町人町の造成は進んでいなかったと推測される。

3 井伊直孝について

続いて、井伊直孝の代に論述の対象を移す。井伊直孝の代における彦根城下町の改造についての説明を始める前に、『新修彦根市史』第2巻の記述によりながら、井伊直孝の経歴を明らかにしておく。

井伊直孝は、天正18年（1590）の生まれである。同じ年に生まれた井伊直継が正室の子であったのに対し、井伊直孝は、正室の家来の娘の子であり、井伊直継の異母弟にあたる。生まれてからしばらくの間は、父親である井伊直政のもとから離されて養育された。文禄4年（1595）にようやく上野国の箕輪城で父親の直政に直面することができたが、その後は、箕輪城の近くの名主の家に預けられて養育された。井伊直政が近江国の佐和山城主に任じられた直後に佐和山城に呼び寄せられたが、すぐに井伊家の上野国の領知を管理する家臣のもとに移された。

慶長7年（1602）に井伊直政が亡くなり、嫡子の井伊直継がその跡を継ぐと、井伊直孝は、井伊家の重臣木俣守勝の仲介によって、その翌年の慶長8年（1603）に徳川秀忠の家臣となった。慶長13年（1608）に書院番頭となり、5000石の領知をあてがわれた。さらに、慶長15年（1610）には、大番頭となって5000石の加増を受けて合計1万石の知行高となり、上野国の白井城主となった。井伊直孝は、誕生してからずっと父親から遠ざけられ、徳川秀忠に従う井伊家の分家当主としての途を歩み始めた。

ところが、大坂の陣の頃に、その人生に大きな転機が訪れた。井伊直政の跡を継いだ井伊直継が、重臣の対立を収めることができず、井伊家当主としての能力を疑問視されたことから、慶長19年（1614）に大坂冬の陣が始まると、徳川家康から、井伊直孝が井伊直継に代わって彦根の軍勢を率いて大坂に出兵するよう命じられた。そして、大坂冬の陣が終わった直後の慶長20年（1615）2月、公儀から、井伊家の領知のうち、近江

国の15万石の領知を井伊直孝、上野国安中付近の3万石の領知を井伊直継にそれぞれあてがう命令が下り、井伊直孝が井伊直継に代わって彦根城主となった。

ここで注意しておかなければいけないことは、井伊直孝にあてがわれた15万石の領知が、実際には、それまで井伊直継にあてがわれていた18万石の領知の一部であったにもかかわらず、この時の命令では、井伊直政にあてがわれた近江国の15万石の領知を井伊直孝にあてがうこととされ、井伊直継に近江国の15万石の領知をあてがっていたという歴史が抹殺されたことである。井伊直孝は、家督継承のうえで、井伊直政の次の当主、2代当主と数えられることになった。

井伊直孝は、大坂夏の陣で軍功をあげ、慶長20年（1615）に5万石の加増を受けた。そして、徳川秀忠・家光親子から厚い信頼を寄せられ、国許を離れて江戸に常駐し、中央の政治に深く関わった。元和3年（1617）、寛永10年（1633）に、それぞれ5万石の加増を受けた。その結果、井伊直孝は、近江国に28万石、武蔵国と下野国に合わせて2万石、合計30万石の領知をあてがわれることになった。井伊家は、幕末に井伊直弼の政治責任などを問われて10万石の減知を命じられるまで、この30万石の知行高を維持し続けた。

4 井伊直孝の代の武家屋敷地の改造

続いて、井伊直孝の代における彦根城下町の改造について論じる。まずは、武家屋敷地の説明から始める。

井伊直孝の代になり、大坂夏の陣が終わると、彦根城の築城が井伊家単独で再開され、櫓や御門などが完成した。松原内湖に流れ込んでいた芹川を琵琶湖に流れ込む現在のルートに付け替える工事が終わり、彦根城の中堀と外堀が完成した。彦根山の東麓に表御殿が建設され、その近くに表御門口が新設された。彦根城下町の湖の玄関口である松原湊が完成したのも、井伊直孝の代である¹²⁶。

井伊直孝の代に、重臣屋敷の配置換えも行われた。木俣清左衛門家の屋敷が、彦根城の山崎曲輪から、内堀と中堀に挟まれた彦根城第2郭の東部、佐和口御門付近に移された。また、井伊直継に従って上野国安中に移った鈴木主馬の屋敷があった場所には重臣屋敷が

¹²⁶ 「近江彦根古代地名記」の記述によれば、松原湊が「大湊」になったのは井伊直孝の代であるという。

設けられず、後にそこに公儀からの預かり米を貯蔵する米蔵が設けられた。井伊直孝の代に重臣屋敷が彦根城の内堀より外側に移されたのである。

井伊直孝の知行高が15万石から30万石に倍増したのにもなって、知行高に見合った役割を担うため、新たに多くの家臣が召し抱えられた。それらの家臣の屋敷地を確保するため、彦根城下町の改造が行われた。江戸時代の地誌をもとに、井伊直孝の代に進められた武家屋敷地の増設について説明する。

最初に、荒地を武家屋敷地に整備した事例を紹介する。彦根城の中堀と外堀に挟まれた第3郭の西部に位置する東中嶋・西中嶋（現彦根市馬場一丁目）は、井伊直孝の代に造成された武家屋敷地である。

一、中嶋も一説に 直孝公御縄共云ふ。此所ふけ地にて御地割難被成に依之御足輕に被仰付土砂を埋たる由、御普請奉行植田長右衛門御用懸り也。段々地割相済拝領致したり。

これは、「近江彦根古代地名記」の一節である。この記述によれば、井伊直孝の代に、普請奉行の植田長右衛門が工事責任者となり、足輕を動員して、「ふけ地」、すなわち、湿地に土砂を入れて土地の造成を行い、武家屋敷地の割り当てを進めていったようである。

一、寛永十三年直滋公御入部隔年御在城也。御家中屋敷割被仰付所々拝領、油屋町南側加藤氏より石原迄四軒、江国寺隣武藤氏より沢村氏迄六軒、其外江戸町北の門前より大鳥居氏迄南側三軒、西ヶ原、石ヶ崎町、藁屋町、円常寺町、不残縄張出来。

これは、「当御城下近辺絵図附札写」の一節であり、寛永13年（1636）に、井伊直孝の子直滋が、江戸に常駐し続けている直孝にかわって彦根に戻り、武家屋敷地の割り当てを行ったことが記されている。この時に割り当てられた武家屋敷地のうち、西ヶ原（現彦根市馬場二丁目）は、東中嶋・西中嶋の西方に位置する土地であるが、ここも、井伊直孝の代に荒地を武家屋敷地に整備した事例である。

次に紹介するのは、町人町を武家屋敷地に変えた事例である。彦根城の中堀と外堀に挟まれた第3郭の西部にあり、東中嶋・西中嶋・西ヶ原の南に位置する藁屋町と円常寺町は、佐和山城下で暮らしていた町人を移住させた町人町だった。ところが、井伊直孝の代に、これらの町で暮らしていた町人を他の場所に移住させ、そこに武家屋敷を建設した。

直勝公御代、今之藁屋町・円常寺町之辺へ古城より町家を大分引取給ひて町家之者住居いたせし処に、又其後直孝公御代に御城下御広け有し、其節又々此辺之町人ヲ方々へ被遣、其跡武士屋敷となりたり、此時にも大分中藪江も参り候由、今之中藪四町之

起りといふハ是なり、

これは、「御領分並びに御城下町旧家有増由緒聞書」の一節である。井伊直継の代に、佐和山城下から琵琶湖岸の藁屋町や円常寺町のあたりに町人を移住させた。井伊直孝の代に城下町の拡大がはかられた時、このあたりに住んでいた町人を中藪などに移住させ、その跡地に武家屋敷を建設したという。藁屋町と円常寺町は、井伊直孝の代に町人町から武家屋敷地になった場所の一つである。

町人町の一面に武家屋敷を建設した事例もある。西ヶ原についての説明を行う際に引用した「当御城下近辺絵図附札写」の記述によれば、寛永13年（1636）に、彦根城の中堀と外堀に挟まれた第3郭に設けられた内町の町人町のうち、中堀に近い油屋町（現彦根市中央町など）、外堀沿いの元川町（現彦根市本町一丁目・二丁目）、藁屋町の北に隣接する石ヶ崎町（現彦根市城町二丁目など）のそれぞれの一面に武家屋敷が建設された。江戸時代の彦根城下町においては、武士と町人の居住地が区別されているのが普通であり、これらの町のように武士と町人が同じ町に同居しているのは異例である。ただし、これより後に作成された資料であるが、天保7年（1836）に作製された御城下惣絵図を見ると、油屋町、元川町、石ヶ崎町のいずれにおいても、武家屋敷は町の一面に固まっており、武士と町人が同じ町に斑状に混住していたわけではない。武士の居住地と町人の居住地を区別するという原則が、例外的な形ではあるが、保たれていた。

これまで紹介してきた井伊直孝の代における武家屋敷地整備の事例は、すべて彦根城の中堀と外堀に挟まれた彦根城第3郭、すなわち、城内の事例である。これに対して、「当御城下近辺絵図附札写」の引用文に見える寛永13年（1636）に造成された武家屋敷地のうち、江戸町（現彦根市京町三丁目）は、彦根城の外堀より外側の城外（「外ヶ輪」）に武家屋敷地が設けられた事例である。江戸町は、その町名からうかがえるように、江戸から召し抱えた侍を住ませた町であり、彦根城外の東部に位置している。また、井伊直孝の代には、江戸町の東側、彦根城外の東部において、上組・中組・北組などの足輕組屋敷が新設された。

彦根城外に侍屋敷や足輕組屋敷を建設したのは、一つには井伊家中の増加にともなう措置であるが、彦根城の守りを固めるという目的もあった。

一、直孝公御代は乱国の治り懸る時節ゆへ、過半乱国の気也。人心落付かず、何時大變難計時節なれば、万事に御気を被附、其上此辺に石田家に厚恩の者所々に有之。

諸浪人共山中・郷中に隠れ居由。何時一揆催すと云ふ取沙汰有りし故に、常に外ヶ

輪をきづかせられ、夫よりして外ヶ輪廻り被定といふ。

これは、「近江彦根古代地名記」の一節である。この記述によれば、井伊直孝の代は、日本国内の内戦状態が収まりつつあるものの、完全な平和が訪れた時期であるとは言えず、警戒を怠ることはできなかった。また、彦根城下町の近くには、関ヶ原の戦いで倒された石田三成に対する恩を感じ続けている者が散在し、浪人が山村や農村に隠れており、彼らが一揆をおこす恐れもあったので、彦根城が完成し、彦根城下町の形が整った時に、「外ヶ輪」、すなわち、彦根城外の巡回警備を行うことになったという。彦根市立図書館が所蔵する「彦根地屋敷割絵図」を見ると、彦根城の外堀より外側のエリアでは、足軽組屋敷が設けられた場所に辻番所が数多く設置されている。それらの辻番所が彦根城の城外における警護の拠点だった。

5 井伊直孝の代の町人居住地の改造

井伊直孝の代には、彦根城外の「外ヶ輪」で町人居住地の造成が進んだ。その結果、彦根城下の町人町を統括する親町が、彦根城第3郭に位置する魚屋町と佐和町をはずし、彦根城の外堀より外側の城外に位置する河原町と彦根町を含む形に再編成されたことは、すでに述べた通りである。

外町エリアの町人町の形成については不明な点が多いが、武家屋敷の増設にともなって、彦根城内から彦根城外に移住させられた町人たちがいたことを確認することができる資料がいくつもある。再度の引用になるが、「御領分並びに御城下町旧家有増由緒聞書」の次の記事は、その一つである。

直勝公御代、今之藁屋町・円常寺町之辺へ古城より町家を大分引取給ひて町家之者住居いたせし処に、又其後直孝公御代に御城下御広け有し、其節又々此辺之町人ヲ方々へ被遣、其跡武士屋敷となりたり、此時にも大分中藁江も参り候由、今之中藁四町之起りといふハ是なり、

この記事によれば、井伊直継の代に琵琶湖岸に誕生した藁屋町と円常寺町は、佐和山城下から移住してきた町人が暮らしていた町人町だったが、井伊直孝の代に、これらの町の住人がいろいろな場所に移住させられた。その移住先の一つである中藁四町は、中藁上片原町・中藁下片原町・中藁土橋町・中藁下横町のことであるが、この中藁四町は、藁屋町や円常寺町からすると、彦根城の外堀の向かい側に位置していた。

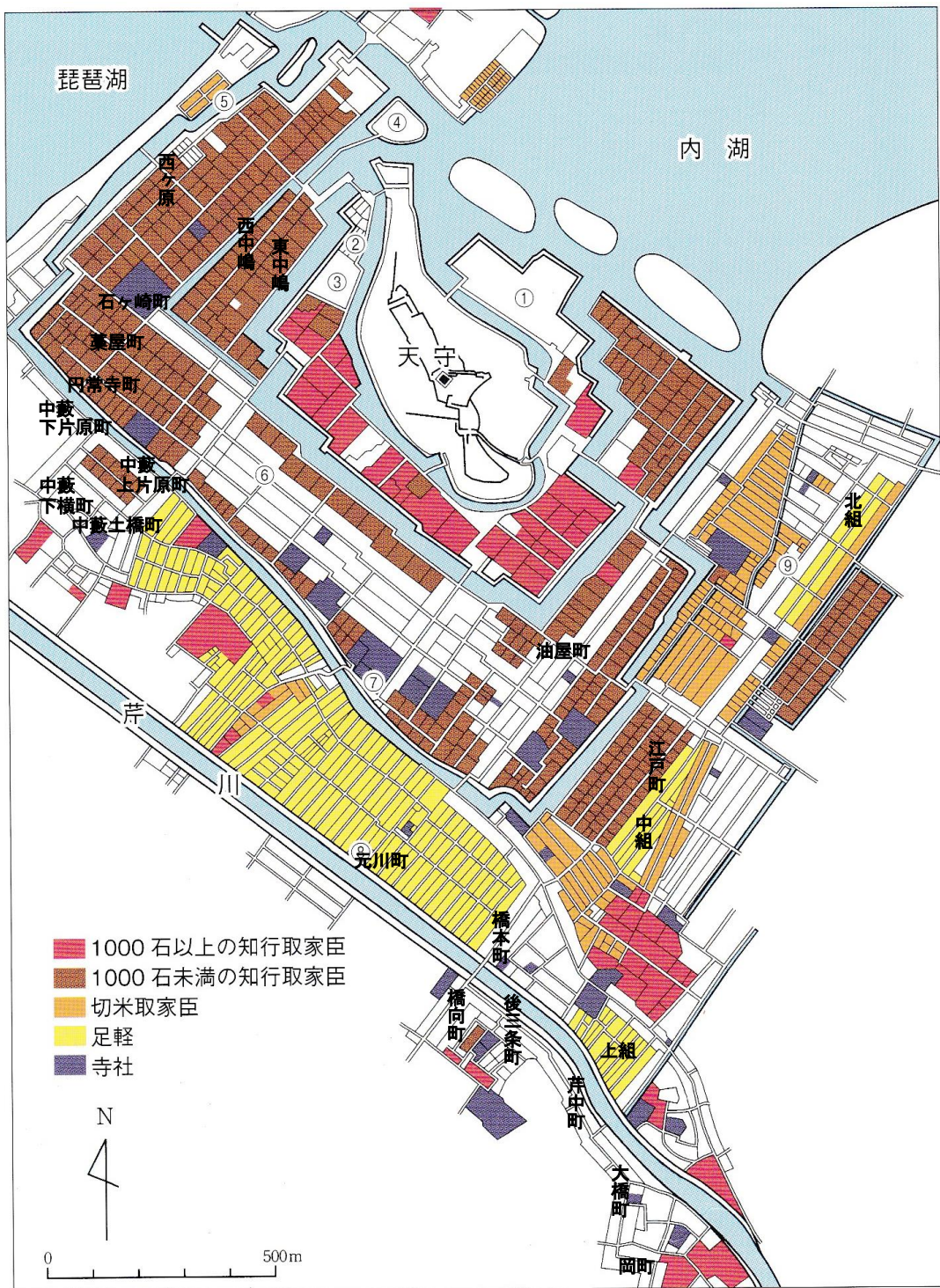


図9 彦根城下町図

注) 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第10巻(景観編)、彦根市、2011年、112頁
掲載図に加筆。

次の記事は、井伊直孝の代に藁屋町から橋本町に移住した町人に関する記録である。

一、加藤与兵衛、橋本町津軽屋是也、

此人は古城石田家之町家と見へたり、直政公御代慶長八年、当初へ御入部ならせられて古城之町家下辺に写し給ひて、其町をわら屋町と名付給ふ、然るに又其後、直孝公御代ニ至御加増御拝領三十万石とならせ給ひて御城下ひろかりし時、右之わら屋町之町家を橋口（本カ）町へ被遣、其外此辺を大分うるり口（しカ）由、其藁屋町の跡へ一々侍を被遣、武士屋敷ニ被仰付候也

これは、「御領分並びに御城下町旧家有増由緒聞書」の一節である。橋本町（現彦根市川原二丁目）で津軽屋を営んでいた加藤与兵衛は、石田三成が佐和山城主だった時期に佐和山城下で暮らしていた。井伊家が居城を佐和山から彦根山に移した時に彦根城下の藁屋町に移った。その後、井伊直孝の代、藁屋町を町人町から武家屋敷地に改めた際に、彦根城の外堀より外側の城外に位置し、芹川に唯一架橋されていた芹橋の近くの橋本町に移住させられたという。

寛永年間（1624～45）には、芹川の南側で町人町の造成が行われた。

一、井伊家成り、新町出来御縄直滋公御下知、寛永年中と云う。亦は万治年中とも云う。寛永二十一年正保元新町出来、委最留帳に有る也。

これは、「当御城下近辺絵図附札写」の一節である。この記事によれば、寛永年間に、井伊直滋の命令で、新町の造成が行われた。その新町とは、橋向町、後三条町（現彦根市新町）、善利中町（現彦根市芹中町）、大橋町、岡町（現彦根市元岡町）、沼波町のことである。これらの町人町が造成された場所は、芹川の南側、橋本町の向かい側であり、中山道の高宮宿と彦根城下町をつなぐアクセス道路である彦根道（高宮道）が幾重にも折れ曲がる七曲がりと呼ばれた場所である。この七曲がり沿いの町人町が寛永21年（正保元年、1645）に誕生し、彦根城下町の町人町の中で最も新しく誕生した町であることから、新町と呼ばれた。

6 彦根城下町の都市構造

井伊直孝の代に彦根城と彦根城下町の改造が行われ、統治拠点にふさわしい形に整えられた。

彦根城下町では、彦根城天守を核として、住民が身分に応じて配置されていた。

彦根城の内堀に囲まれた第1郭（本丸）には、表御殿があり、その内部は、城主の居住空間である奥向きの建物群と、政庁の機能を果たす表向きの建物群に分かれていた。

彦根城の内堀と中堀・松原内湖に挟まれた第2郭（内曲輪）には、城主の別邸や庶子屋敷、重臣屋敷が配置された。重臣屋敷で暮らす家老は、表御殿に定期的に出仕して、政治に関する話し合いを行った。また、江戸時代後期になると、当番家老の居屋敷にも定期的に集まって、政治に関する話し合いを行い、行政を担当する町奉行などに命令を下すこともあった¹²⁷。家老屋敷も、表御殿と同様に、家老とその家族の居住空間である奥向きの建物群と、政治に関する話し合いや来客対応などを行う表向きの建物群に分かれていた¹²⁸。

第2郭には、さらに、城主や重臣、さらには、彼らの息子たちが統治者としての心構えや能力を高める場でもある玄宮園と呼ばれた池泉回遊式庭園や、井伊家中のうち、領知をあてがわれ、乗馬を許された侍の息子たちが統治者としての心構えや能力を身につける藩校も設けられた。第2郭の出入口にあたる中堀沿いの御門においては、人や物の出入りが厳しく監視され、彦根城下の町人や他領の者が許可なく立ち入ることができなかった¹²⁹。彦根城の中堀より内側には、統治に責任をもつ城主や重臣の屋敷や、城主や侍が統治者としての立場を維持するのに必要な施設が集められた閉鎖空間であった。多くの住民が集まる市場や教会を中核とするヨーロッパの都市とは、その都市構造が大きく異なる¹³⁰。

彦根城の中堀と外堀に挟まれた第3郭（外曲輪）には、堀沿いに侍屋敷が配置され、侍屋敷によって守られるように、内町と呼ばれた町人町も設けられた。彦根城下町は、他の城下町とは異なり、主要街道を城下に引き入れなかったが、中山道の鳥居本宿と高宮宿と彦根城下町をつなぐそれぞれのアクセス道路¹³¹が、彦根城の第3郭の東部を南北にはしる内町大通りに接続し、内町大通りの中心部に位置する伝馬町（現彦根市中央町など）に問屋場が設置され、彦根城下町の物流拠点としての役割を果たした。内町の町人町は、伝馬町のほか、魚屋町、鍛冶屋町、大工町など、特定の職業を示す町名がつけられているとこ

¹²⁷ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、156頁。

¹²⁸ 筆頭家老木俣清左衛門家の陪臣の中に「鎖前番」がいることから（『新修彦根市史』第2巻、146頁）、同家の居屋敷が、鎖前を境に、表向きと奥向きに分かれていたと推測される。

¹²⁹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、202頁。

¹³⁰ 西川幸治『都市の思想』上、日本放送出版協会、1994年、182頁。

¹³¹ 鳥居本宿と彦根城下町をつなぐアクセス道路は、佐和山の切通しを通ることから切通道、高宮宿と彦根城蒲池をつなぐアクセス道路は高宮道と呼ばれたが、切通道も高宮道も彦根道と呼ばれることがあった。

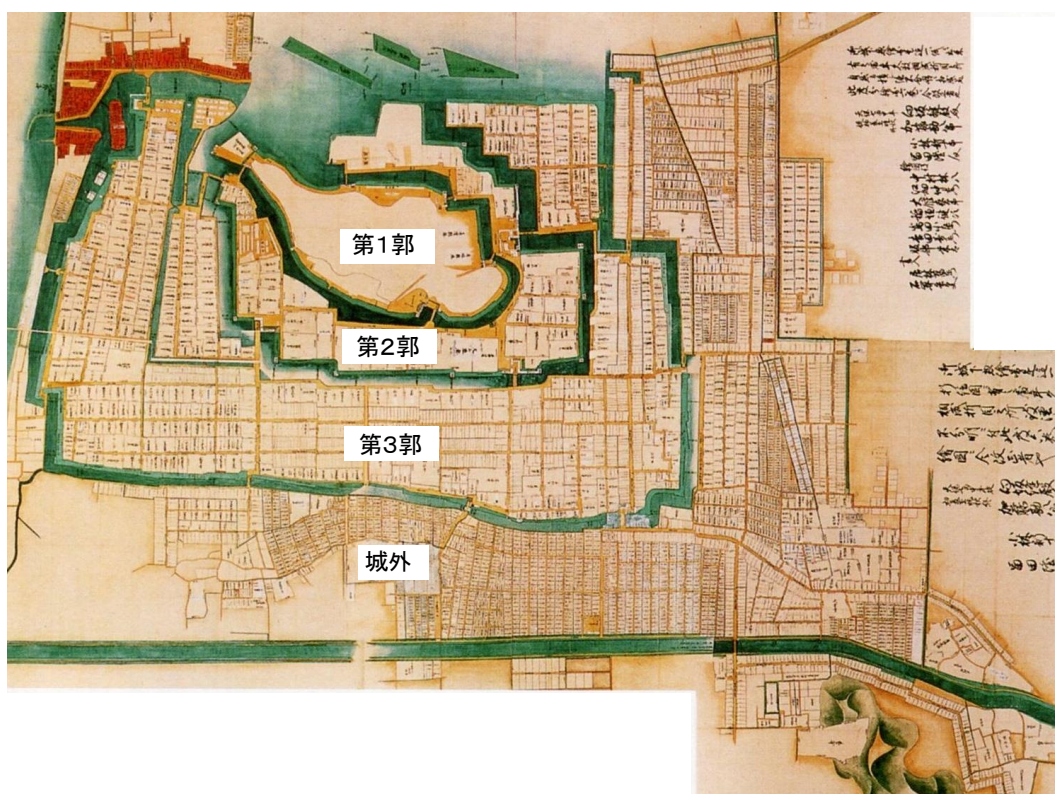


図10 彦根城の各エリア

注) 天保7年(1836)作製の彦根御城下惣絵図(彦根城博物館所蔵)に必要な情報を付記。

ろが多く、内町の町人は、年貢を免除されるかわりに、その職業にかかわる労役を藩から命じられることがあった。

彦根城の外堀より外側の城外(外ヶ輪)には、井伊家の直轄領から納められた年貢を俸禄米として受け取り、乗馬を許されなかった歩行や足軽の屋敷が、城下町を守るように配置され、さらに、外町と呼ばれた町人町が設けられた。外町には、内町のような特定の職業を示す町名は見られず、外町の町人は、年貢を負担した。

日本国内の他の多くの城下町では、寺院が建ち並ぶ寺町が存在した。彦根城下町にも、彦根城の第3郭の南部に「寺町」という名前の町(現彦根市本町一丁目)がある。しかし、そこには寺院が存在せず、侍屋敷が建ち並んでいた。寺院は、第3郭の外堀沿いや、彦根城外の東部に点在していた¹³²。それらの寺院のうち、第3郭に位置する寺院が、朝鮮通信使の宿泊施設として利用された¹³³。寺院についても、公務負担の点において、城内と城外

¹³² 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第10巻、112頁掲載の図62。

¹³³ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、540頁掲載の表78。

の違いがあった。

彦根城は、徳川宗家の重臣である井伊家に預けられた城であり、西国の押さえを期待された軍事拠点だった。彦根城主の井伊家が、将軍宣下のお礼などを述べる京都上使を命じられる家であり¹³⁴、また、徳川宗家から京都守護の命令を受けた家柄であるという意識を強く持っていたことから、彦根城は、京都との関係が深い城だった。彦根城主が初めてお国入りした際には、城主が天守に登り、まずは京都を向いてお辞儀をし、その次に江戸の方角に向きを変えてお辞儀をして、天皇や天下人にこの城を預かった謝意を表し、治国安民を誓った。また、非常時には、天皇を京都から彦根城に避難させることも考えられていた¹³⁵。彦根城下町は、井伊家とその家臣が支配地を治めるための統治拠点でもあり、井伊家とその家臣のもとに納められる年貢米が集まり、それが消費される米経済の中心地でもあった。さらに、藩校が設置された教育の拠点でもあった。彦根城下町は、武士による統治を維持するために必要なさまざまな機能が集約された都市だった。

ただし、彦根城下町は、他の多くの城下町とは異なり、主要街道から外れており、街道を通じて物資を遠隔地に運ぶ継送りは皆無に近く、彦根城下町の流通拠点である伝馬町で扱われる物資は公儀や城主に関わるものが中心だった¹³⁶。

井伊家は、慶長20年（1615）5月、大坂夏の陣の軍功により、北近江の5石を加増された。その中に、羽柴秀吉が開いた長浜城下町が含まれていた。長浜は、慶長11年（1606）以降、内藤家の城下町となっていた。大坂夏の陣の直後に内藤家が摂津国高槻に移され、長浜が井伊家の支配地となった¹³⁷。長浜城が廃城となり、長浜に武士が住まなくなったが、長浜城下町を支えてきた町衆が残り、長浜は、その後も引き続き北近江における物資の生産地・集散地としての役割を果たした。統治拠点である彦根城下町と商業都市である長浜をセットにしてはじめて、他の城下町が一元的に担っていた諸機能がそろっているのである。それゆえ、彦根城下町を統轄する町奉行は、長浜も管轄下に置いた。

そして、彦根と長浜は、湖上交通でも、同様に管理されていた。彦根城下町の湖の玄関口である松原、長浜、この二つの湊の中間に位置する米原が、「彦根三湊」と呼ばれ、船奉

¹³⁴ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、89頁。

¹³⁵ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、61～62頁。

¹³⁶ 伝馬町は、将軍の上洛、公儀の巡検使や朝鮮通信使の通行など、公儀にかかわる物資輸送のほか、井伊家の公用荷物の輸送を担当した（『新修彦根市史』第2巻、513～514頁）。

¹³⁷ 長浜市史編さん委員会編『長浜市史』第3巻（町人の時代）、長浜市役所、1999年、16～18頁。

行によって統轄され、「三湊ハ水魚の如く一和」するよう命じられていた¹³⁸。

7 小括

彦根城下町をイメージする時に思い浮かべるのは、天保7年（1836）に作製された御城下惣絵図である。三重の堀が巡らされた彦根城を中心に、武家屋敷や町家などが密集している。この彦根城下町の形が整ったのは、井伊直孝の代である。その前の井伊直継の代の彦根城は、大坂包囲網を構築する城の一つとして急ピッチで築かれたこともあり、一重構えの規模の小さな城だった。城下町も、所々に荒地があり、建物が密集してはいなかった¹³⁹。井伊直孝の代に、知行高が倍増したことなどから、新たに召し抱えた家臣を住まわせる場所を確保し、その場所に住んでいた町人を別の場所に移住させるという城下町の改造が行われた。その結果、彦根城下町は、約2万人の武士人口と約1万6、7000人の町人・寺院人口を抱える規模の大きな地方都市となった¹⁴⁰。

彦根城下町は、17世紀後半に槻御殿と玄宮園が彦根城第2郭の北部に建設され、18世紀末には彦根城第2郭の西部に藩校が開設された。また、井伊家や重臣の下屋敷が彦根城下町に隣接する村々に設けられるなど、江戸時代を通じて、さまざまな変化が見られたが、おおよその形が定まったのは、17世紀前半の井伊直孝の代であると考えて良からう。

そして、彦根城下町について考える時、姉妹都市とも言える長浜の存在を忘れてはいけない。彦根城主の井伊家が徳川宗家を支える重要な役割を担っていたこともあり、彦根城下町は、軍事・政治機能に特化された統治拠点とされ、他の城下町が担っていた近隣地域の物資の集散地や広域交通の拠点である宿場町の機能が乏しかった。彦根城下町とともに町奉行の管轄下に置かれた長浜は、北近江における物資の生産地・集散地であり、北国街道の宿場町でもあり、町衆の活動が盛んだった。彦根城下町には彦根三湊の一つである松原湊があり、長浜の湊も彦根三湊の一つに数えられ、密接に結びついていた。本稿では、長浜について十分に論じられなかったが、統治拠点である彦根城下町と商業都市である長浜がセットになってはじめて、他の城下町が担っていた機能がそろうという点も看過することはできない。

¹³⁸ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、579頁。

¹³⁹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第10巻、138頁。

¹⁴⁰ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、341頁。

第2節 井伊家風の形成と発展

1 江戸時代における武士の変化

江戸時代の武士は、戦国時代までの武士とは大きく異なる。江戸時代の武士は、もはや在地領主ではなかった。彼らは、本領から切り離されて城に集住し、主君の家の当主と家臣の家の当主が主従関係を結び、家臣たちが家中としてまとまって、主君とともに軍事と政治を組織的に担い、統治を行ったのである。

また、江戸時代の武士が日本国内の軍事と政治の両方を担う統治者として認められるためには、中世の武士たちが培ってきた武力だけでなく、公家が担ってきた古典的教養を身につける必要があり、さらに、東アジアで大きな影響力を持ち、中世日本においては主に禅僧が学んでいた儒学も統治理念として学ばなければいけなかった。

江戸時代の多くの武士が文武両道を兼ね備えた存在になるためには、少なからぬ年月を要した。彦根城主の井伊家は、17世紀前半には、自他ともに認める武門の家であったが、17世紀後半に徳川宗家が武断政治を文治政治に改めた時によりやうやく、武力一辺倒から文武両道に家風を切り替えた。そして、幕末の井伊家当主、井伊直弼は、文武両道兼ね備え、組織的に行動した江戸時代の武士の典型とも言える行動をした。

本節では、江戸時代における武士の変容を、井伊家に焦点をあてて明らかにする。

2 井伊家の役割

井伊家風の移り変わりを論じる前に、江戸時代において井伊家がどのような役割を担った大名家だったのかを述べておきたい。

井伊家は、徳川宗家を支える家であり、三つの大きな役割を担っていた。

一つ目は、徳川軍団の先陣をつとめる家としての役割である。慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いにおいて、徳川方は、福島正則の軍勢が先陣をつとめることになっていた。ところが、井伊直政が、娘婿で、徳川家康の四男であり、この時、徳川方の総大将をつとめていた松平忠吉の軍勢とともに、抜け駆けをして、先陣の功績をあげた¹⁴¹。また、井伊

¹⁴¹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻（通史編 近世）、彦根市、2008年、13～14頁。

直政の子、井伊直孝は、慶長20年（1615）の大坂夏の陣で目覚ましい活躍をして、徳川家康・秀忠父子から「日本之一番ぶへん」と賞された¹⁴²。井伊直政・直孝の活躍により、井伊直孝の代に井伊家が徳川方の先陣をつとめる家であるという意識が芽生え、17世紀後半にはその意識が井伊家中に定着した¹⁴³。

二つ目は、徳川宗家の跡継ぎを支える家としての役割である。井伊家は、徳川宗家にとっては、親のような立場の家だった。徳川宗家に跡継ぎが生まれると、宮参りを済ませた後に、井伊家の江戸上屋敷に立ち寄り、井伊家当主に挨拶することになっていた¹⁴⁴。徳川宗家の跡継ぎが元服する時には、井伊家当主が加冠役をつとめた¹⁴⁵。武士の間では、鎌倉時代頃から、男子が元服する時に、その男子が親代わりに頼る有力者を仮親とし、その有力者から烏帽子を載せてもらう風習があり、烏帽子親と烏帽子子の関係は長く続いた。井伊家は、徳川宗家にとって、もっとも頼りになる家であり、井伊家は、徳川宗家の烏帽子親の家として、徳川宗家に対する思いが他の大名家よりも強かった。

三つ目は、徳川宗家の政治を補佐する大老の家としての役割である。大老は、徳川宗家を補佐する役職で、重大な政治問題を解決しなければいけない時に臨時に置かれた。公儀の政治方針を合議する老中よりも重んじられた。江戸時代において大老を最も多く出したのが井伊家で、井伊家歴代の半数近くが大老に就任した。そして、井伊家当主が大老に就任する場合には、他家の当主とは異なり、老中などに任命されることはなく、最初から大老に任じられた¹⁴⁶。

3 武門の家 ―江戸時代前期の井伊家―

江戸時代前期の井伊家は、武門の家としての意識を強く持っていた。前述の通り、井伊直孝の代に、徳川方の先陣をつとめる武門の家としての意識が芽生え、学問を軽視する風潮がみられた。

¹⁴² 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、56頁。

¹⁴³ 『新修彦根市史』第2巻、69～72頁。

¹⁴⁴ 『新修彦根市史』第2巻、86～87頁。

¹⁴⁵ 『新修彦根市史』第2巻、87～88頁。

¹⁴⁶ 『新修彦根市史』第2巻、84頁。

一、家中老若下々迄讃学など仕儀、直孝家中ニ而者不入候間、堅法度ニ可被申付候、寺方へも俗男女共ニ讃学之儀御伝候義、御無用ニ可被成与可被申届候、讃学仕候へハ、能道へハ不入、悪道ニ入、本性を取失ひ申ものニ而候間、氣違多出来可申与存候、旅之出家ニ而も俗ニ而も、左様之儀取あつかひ候者有之ニおゐてハ、早速追払、城下在々ニ至迄置被申間敷候、惣別陰陽師などの様成不思儀成志之もの一夜之宿も不仕候様ニ可被申付候、壁武芸ニ而も名誉なる儀杯申廻し候者ハ、役ニ立儀ニ而無之候間、皆氣違本性納失申わさニて候間、左様之者も於有之ハ、可被申払事、

一、家中之子共、此方へ参り候風躰見申処ニ、武士之風俗ハ唱失ひ、士之作法も無之、己か氣促ニ生立、皆若衆方之成行之躰ニ候、見懸ニしやうねも無之様ニ見へ申候、ケ様之儀ハ家之疵程ニ而候、畜類さへ人間之しやうねを入候へハ、其道理ニ落ると見へ候、常々之親之志惡敷故ニ子共侍之作法も無之様ニ見懸ケ見へ候間、左様ニ被相心得、武芸をも不嗜不覺悟なるものハ、重而子共召出候時も直孝申遣候時も可被致無用事¹⁴⁷、

これは、井伊直孝が井伊家中の気持ちの緩みを諫めた法度の一部であり、元和4年（1618）閏3月15日に出されたものであると見られている。

一条目では、条文の冒頭で、学問をするような者は井伊家には必要ないと断言し、学問をすると、よい道には進まず、悪い道に入り、武士としての本性を失い、考え違いをするようになるので、旅の僧侶など、学問を教えるような者がいたら、すぐに追い払い、城下や領内の村々にかれらを滞在させてはいけなと命じている。

二条目には、井伊家の家臣の子どもたちが江戸にやってきた時の様子を見て不安になった直孝の思いが記されている。子どもたちの様子を見ると、武士のしきたりや作法をわきまえておらず、自由気まま、若い気分のままで、武士としての性根がすわっていないように見えた。それは、日ごろの親の心がけが悪く、子どもたちに武士としての作法を学ばせていないからである。そのことをわきまえて、子どもたちに武芸をしっかりと学ばせるように。武芸を嗜もうとしない子どもがいたら、その子どもに用はないと、厳しく命じたのである。

慶長20年（1615）の大坂夏の陣で激しい戦いを経験した井伊直孝は、大坂の豊臣家が滅び、内戦状態が終結した元和偃武の時期にあっても、気持ちを緩めず、武門の家の

¹⁴⁷ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第6巻（史料編 近世1）、彦根市、2002年、737～738頁。

当主としてのつとめを果たすため、家臣の子どもたちの気持ちの緩みをただし、武士としての覚悟を挫く恐れのある学問を禁じたのである。江戸時代前期の井伊家は、とても文武両道の家と呼べるような状態ではなかった。

4 文武両道の家 ―江戸時代中期・後期の井伊家―

慶安4年（1651）の慶安の変を契機に、徳川宗家は、政治方針を武断政治から文治政治へ転換した。それは武家諸法度の条文の変化に明確に表れている。

元和元年（1615）に徳川秀忠の名で出された最初の武家諸法度は、冒頭に「文武弓馬の道、専ら相嗜むべき事」という条文を掲げている。文武両道を心がけるべきことは言うまでもないが、弓術と馬術の訓練に重点が置かれている。古代・中世の武士は「弓馬の士」、武芸は「弓馬の芸」といわれ、武士は騎乗の士であることを理想とした¹⁴⁸。元和令では、武士が守るべききまりを定めるにあたって武芸を重視し、剣術でもなく、槍術でもなく、弓術と馬術の訓練に励むことを求めたのである。

これに対して、徳川綱吉が天和3年（1683）に発布した武家諸法度は、「文武忠孝を励まし礼儀を正すべき事」で始まる。文武両道を心がけるべきことは変わらないが、武芸が影を潜め、忠・孝という儒教の徳目と、礼儀という日本古来の作法を重視することが命じられている。重点の置きどころが、武から文に変わっている。

このような徳川宗家の方針転換にならって、井伊家も家臣の心構えを改めた。

一、惣而家も末々成、家人も子孫ニ至申故か、近年ハ侍之真薄、普代之主人・譜代之家人と存弁候道理不沙汰ニ成、大身・小身共ニ唯面々身を打不申候所を専要ニのミ相心得、真を尽し主人の為を存族無之様ニ被存候、侍之平生、又ハ戦場ニおゐて命ヲ軽する義ハ、縦ハ鷹之鳥を取、猫之鼠を取申ニひとしく、侍と申名ニ付候役ニ而候、鷹之鳥ヲ取不申、猫之鼠を不取をいかんとして真の鷹・猫と可申哉、侍ハ一命を捨も奉公、又不捨も奉公ニ而、主人の為ニ徳の死を軽して、損之死ヲ重するか専要ニて候、平生侍之武をみかき男を立てる者、名ニ対したる役儀勿論たる事ゆへ、珍しからぬ事ニ候、人ニより不断ハともかくも、まさかの時ハ、一番ニ馬の先之用ニ立、一命を軽せんと弁ゆる族も可有之候へ共、それハ鷹・猫のたとへニ同ク、侍之名ニ付指詰為る役儀と覚候、其内太平之御代ニ病死も在之ハ、年来被養候厚恩、何

¹⁴⁸ 高橋昌明『武士の日本史』、岩波書店、2018年、23頁。

ニ而報可申哉、然時ハ不斷治りたる暁の上の奉公を励可申事ニ候、人々眼前之奉公ハ何様ニも致、よく精も出、影々の奉公ハはり合も無之心ニも染ぬものニ而候へ共、然所を陰ひなたなく影々の奉公ハ一入ニ励申所、廉直真を尽シたる心、真之奉公と申ものニて候、此段を人々能々心底ニ服シ、第一ニ得心可申候、兼日公儀諸家へ被仰渡候御条目等ニも有事ニ候へハ、向後ハ家中之面々侍之侍たるへき道を弁、第一忠孝を励、五常を守、武を励、文ヲ学、真を尽し候様ニ、人々慎心掛候様ニ老若共ニ急度可被申渡候、不覺語もの於有之ハ、其品々の輕重ニよつて、家之為、諸人のため何時も仕置ニ可申付候¹⁴⁹、

これは、井伊直孝の孫にあたる井伊直興が、元禄8年（1695）に、家臣の様子に問題を感じ、彼らに侍としての心構えを示したものである。侍は、戦場で命を捨てる覚悟で勤めを果たすのも奉公だが、太平の世の中では暁の上で勤めを果たすのも奉公であると言い、真を尽くす心が大切であることを心得よと述べた。そして、すでに公儀が諸大名に命じた御条目に書かれているように、これからは、井伊家中の侍は、侍としての道をわきまえ、まずは忠・孝に励み、五常を守り、武芸に励み、文芸を学び、真を尽くすように命じた。侍としての道をわきまえよという命令以降の文章は、武家諸法度の天和令とは逆の書き方になっている。天和令では、文芸、武芸、忠孝、礼儀の順に書かれている。これに対して、井伊直興の命令では、文芸が一番後ろになり、その前に武芸が書かれ、その前に、五常や忠・孝という儒教の徳目が書かれ、一番前に侍としての道が書かれているが、その内容は、天和令とほぼ同じである。

井伊直興は、すでに延宝6年（1678）に玄宮園と呼ばれる池泉回遊式の庭園を彦根城の第2郭に造営し、文化への関心を示していたが、天和3年（1683）の武家諸法度の改訂をうけて、元禄8年（1695）に井伊家の基本方針を文治政治に改め、井伊家を武門の家から文武両道の家に変えることを宣言し、徳川綱吉に寄り添うことを家臣に示した。それから2年後、井伊直興は、徳川綱吉の政治を補佐する大老に就任した。

5 井伊直弼の政治思想

井伊家歴代の中で最も有名なのが、幕末に大老に就任した井伊直弼である。井伊直弼は、その死後、しばらくしてから、日米修好通商条約の違勅調印や安政の大獄を独断ですすめ

¹⁴⁹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第6巻、805～806頁。

た独裁者として批判された。その一方で、明治時代以降、彦根の人たちの間では、日本の近代を導いた開国の偉人として評価された¹⁵⁰。どちらの見解にしても、井伊直弼を主体的に行動した政治家と見ているが、近年、当時の史料に即して井伊直弼の行動を検証し直し、独裁者でもない、開国の偉人でもない、新たな井伊直弼像を提示したのが母利美和氏である¹⁵¹。母利氏の研究成果によりながら、井伊直弼が、どのような考えにもとづいて、どのように行動したのかを明らかにしたい。

その前に、井伊直弼の経歴を紹介しておく。

井伊直弼は、文政12年（1815）に、彦根城第2郭の槻御殿で生まれた。父親の井伊直中は、この時、井伊家別邸の槻御殿で隠居生活を送っており、彦根城主の地位を三男の井伊直亮に譲っていたことから、井伊直中の一四男にあたる井伊直弼には、彦根城主になる可能性が皆無に近かった¹⁵²。天保2年（1831）に、父親の死去にともなって、弟の直恭とともに彦根城第3郭に位置する尾末町屋敷に移った。その後、弟が日向国の延岡城主内藤家の養子に決まり、自分一人だけになった尾末町屋敷を埋木舎と名付け、この屋敷で、剣術、弓術、槍術、居合、柔術、馬術、砲術、戦術などの武芸に加え、儒学、国学、仏教、和歌、俳句、茶道、華道、楽焼、謡曲などの文芸にも取り組み、文武両道の修養に励んで、それぞれの道を極めた¹⁵³。



写真5 尾末町屋敷（埋木舎）

井伊直弼が極めた諸芸のうち、茶道については、近年、その研究が進んだ¹⁵⁴。井伊直弼の茶道の精神として有名なのが「一期一会」である。一期一会とは、たとえ同じ顔ぶれで

¹⁵⁰ Kobayashi Takashi 「A Study on Improvement of the Local Image: Honor Recovery of Ii Nosuke」 (『IWRIS2020』、2020年)。

¹⁵¹ 母利美和『幕末維新の個性6 井伊直弼』、吉川弘文館、2006年。

¹⁵² 吉田常吉『井伊直弼』、吉川弘文館、1963年、1～2頁。

¹⁵³ 大久保治男『埋木舎と井伊直弼』、サンライズ出版、2008年、22～23頁。

¹⁵⁴ 熊倉功夫編『彦根城博物館叢書2 史料 井伊直弼の茶の湯 上』、サンライズ出版、2002年、熊倉功夫編『彦根城博物館叢書3 史料 井伊直弼の茶の湯 下』、サンライズ出版、2007年など。

何回も茶会を開いたとしても、今日の茶会は決して繰り返すことのない会だと思えば、それはわが一生に一度の会であり、真剣な気持ちで、少しもおろそかにすることなく、茶をいただく心構えが必要だという心得を示す言葉である¹⁵⁵。「一期」も、「一会」も、もとは仏教用語である。井伊直弼は、埋木舎で暮らしていた時に、井伊家菩提寺の清涼寺の住職のもとで禅の教えを学び、印可を受けていた。井伊直弼は、禅の教えをもとに茶道の精神を極め、「一期一会」の考えを確立したと言われている。

井伊直弼の茶道の精神には、「一期一会」に続いて、もう一つ重要な概念がある。それは、茶会後の亭主のあるべきたたずまいを示す「独座観念」である。客が帰った後に、茶室に一人座し、今日の一会が終わって、もう二度と同じ会を行うことはできないということを思い、一人静かに今日の茶会を顧みるという内容である¹⁵⁶。良き行為に及ぶだけでなく、その行為をふりかえり、さらなる高みを目指すことの大切さを井伊直弼は理解していたのである。近年、井伊直弼は、すぐれた文化人でもあったと評価されるようになった。



写真6 井伊直弼朝臣銅像

注) 彦根市の金亀児童公園に所在。

井伊直弼の人生が大きく変わったのが、弘化3年（1846）だった。彦根城主井伊直亮の養子になっていた兄の直元が亡くなり、直弼が直亮の養子になったのである。嘉永3年（1850）に養父の直亮が亡くなって彦根城主となり、安政5年（1858）には、大老に任じられた。

井伊直弼が大老に就任した時、2つの大きな政治課題が存在していた。その一つが徳川宗家の継嗣問題である。徳川家定に実子がなかったことから、養子を迎える必要が生じた。当時、養子の候補と考えられていたのが御三家の一つである紀州徳川家の当主慶福であり、もう一人が御三卿の1つである一橋家の当主慶喜であった。能力的には成人に達していた一橋慶喜の評価が高かったが、徳川家定には、一橋慶喜に跡を継がせる意思はな

¹⁵⁵ 奥田晶子「井伊直弼の茶の湯——一期一会の世界——」、彦根城博物館編『一期一会の世界 大名茶人井伊直弼のすべて』、彦根城博物館、2015年、62頁。

¹⁵⁶ 奥田晶子「井伊直弼の茶の湯——一期一会の世界——」、62頁。

く、従弟にあたる徳川慶福を養子にしたいと考えていた¹⁵⁷。安政5年（1858）、大老井伊直弼と老中たちが徳川家定から跡継ぎを徳川慶福に決めたことを伝えられ、その命令にしたがって、徳川慶福を家定の跡継ぎにした。

大老井伊直弼が直面したもう一つの政治課題は、開港問題である。嘉永7年（1854）の日米和親条約にもとづいて来日したアメリカ総領事ハリスが、日本に通商条約の締結を要求した。安政5年（1858）6月18日、ハリスは、日本側の交渉役である井上清直と岩瀬忠震に、イギリスとフランスが武力で日本に開港を迫る動きを見せていることを告げ、アメリカと通商条約を結べば、日本とイギリス・フランスとの仲立ちをすることを提案した。翌日、江戸城において、ハリスの提案に対する協議が行われた。老中の松平正睦と松平忠固の2名が通商条約即時調印を主張したのに対し、その他の幕閣が交渉の引き延ばしを主張したことから、大老井伊直弼は、井上・岩瀬両名に交渉の引き延ばしを命じた。井上清直から交渉が難航した場合には通商条約に調印しても良いかと尋ねられたので、井伊直弼は、やむを得ない時には調印しても良いが、できるだけ交渉を引き延ばすよう命じて、井上・岩瀬両名を送り出した。

この江戸城における協議内容は、日米修好通商条約の締結に関する従来の研究で必ずと言っていいほど触れられてきたことである。しかし、近年、大老井伊直弼の公用人の記録である「公用方秘録」の諸本を丹念に比較分析した母利美和氏が、江戸の桜田屋敷に戻ってきた井伊直弼が家臣たちとこの問題について重要な合議を行ったことを明らかにした。その合議についての母利氏の説明は次の通りである。

井伊直弼が江戸の桜田屋敷に戻り、その日の出来事を側役の宇津木景福に話したところ、宇津木は、孝明天皇から通商条約の調印にあたっては諸大名の意見を聞くように求められていたことに気づき、諸大名の意見を聞かずに井上・岩瀬に交渉を命じたことを非難した。井伊直弼がその責任をとって大老を辞職すると言い出したので、江戸にいた重臣たちによる話し合いが行われ、すぐに井上・岩瀬両名のもとに使者を派遣して交渉を中止させるべきであると進言したが、井伊直弼は、もはや老中の話し合いによって対策が決まり、それを徳川家定が許可したのであるから、自分一人の判断で中止させることはできないと回答

¹⁵⁷ 徳川家定の跡継ぎについて、松平慶永らが一橋慶喜の擁立に動いていた時、徳川家定は、「彼は申し立て候者どもこれあり相当とも、一橋にては決して相成らざる儀、御先々代様御統も御近の紀家と兼ねて御心に御取極置かれ候由」と、一橋慶喜に跡を絶対に継がせたくないという意思を示した（母利美和『幕末維新の個性6 井伊直弼』、178～179頁）。

し、調印を阻止する使者を派遣しなかった¹⁵⁸。

徳川宗家の継嗣問題や開港問題における井伊直弼の行動は、決して独裁者と言えるようなものではない。井伊直弼は、徳川家定を支える大老として、家定や老中の合議を尊重している。母利氏が明らかにした江戸の桜田屋敷での出来事についても、井伊直弼は、家臣と意見を交わし、重臣に諮問した。結果的には、重臣たちの意見が受け入れられなかったが、それは、公儀の意思、すなわち、老中の合議、徳川家定の決定を尊重したからである。

井伊直弼が全体の調整役に徹しようとする行動パターンは、彼が兄の井伊直亮の養子になった時にすでに固まっていた。弘化3年（1846）、井伊直亮の養子になることが決まった井伊直弼は、茶友の三浦高秋にあてた書状の中で決意表明をした。井伊家の跡継ぎになったからには、家臣を安心させ、領民の暮らしを守るため、日々鍛錬に努めたい。公儀や先祖、家臣などに対して忠・孝・仁・義を損なわず、全体を調和させるようにしたいので助けてほしいと三浦高秋に依頼した¹⁵⁹。井伊直弼は、祖先に対して孝、公儀に対して忠をそれぞれ尽くし、家臣からは忠を尽くしてもらい、領民に対して仁政を行って、大名としての義をまっとうすることによって、全体の調和をはかることを決意したのである。

井伊直弼は、儒学の徳目によって社会関係を規定している。井伊直弼の心には、江戸時代の日本の政治理念だった儒学の教えがはっきりと刻まれていたのである。そして、自分

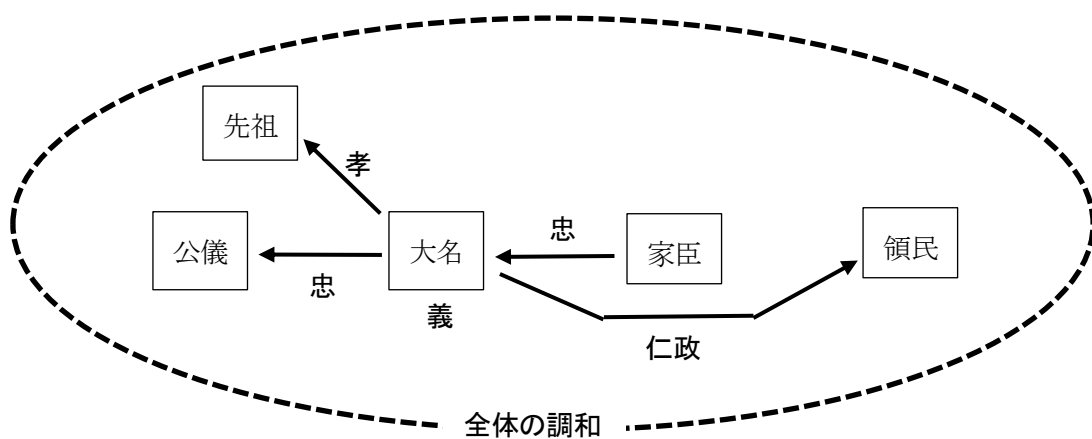


図11 井伊直弼の世界観

¹⁵⁸ 母利美和『幕末維新の個性6 井伊直弼』、197～200頁。

¹⁵⁹ 母利美和『幕末維新の個性6 井伊直弼』、85～86頁。

の意思を周りに強制しようとするのではなく、全体の調整役に徹したいと考えた。個人プレイではなく、組織の一員に徹しようと考え、その後、その考えを貫き通した。それが、徳川宗家を支える井伊家当主としてのつとめであると井伊直弼は考えていたのである。

6 小括

井伊家は、江戸時代を通じて、徳川宗家を軍事的・社会的・政治的に支える家だった。井伊直孝の代には、武門の家としての意識が強かったが、17世紀後半に徳川宗家の政治方針が武断政治から文治政治に転換したのにもなって、井伊直興の代に、文武両道の家風に転じた。幕末に井伊家当主となった井伊直弼は、文武両道を極め、江戸時代の日本の政治理念だった儒学の教えに則り、組織の一員として全体の調整役に徹した。井伊直弼は、江戸時代の武士の典型例だった。

第3節 彦根の下屋敷 一文武両道の統治者であるために一

1 文武両道の修練と下屋敷

東アジアでは、政治・行政を担う官僚は文官と武官に分かれているのが普通だった。古代の日本においても、律令の規定では、文官と武官が明確に区別されていた。ところが、江戸時代の武士は、番方と役方、すなわち、軍事と政治の両方を担った¹⁶⁰。武官が文官を兼務するという、他の地域や他の時代には見られない、江戸時代の日本に独特な政治のしくみが形成・維持された¹⁶¹。

江戸時代の武士は、軍事を担うため、さまざまな武芸を身につけなければいけなかった。武芸のうち、とくに重んじられたのは馬術と弓術である。武士は、中世以来、弓を携えた騎馬武者を理想としており¹⁶²、江戸時代の武士にも、その認識が継承された。井伊家中においては、乗馬を許されるかどうか侍と歩行・足軽との大きな違いであり、乗馬を許された侍に領知があてがわれた。井伊家の侍たちは、さまざまな武芸の稽古に励んだが、その中でもとくに、馬術、そして、馬術とセットで認識されていた弓術の稽古に励み、その技能を保たなければならなかった。

文芸は中世の武士にとっては必要不可欠なものではなかったが、日本国内の統治権を掌握した江戸時代の武士にとっては、学問をはじめとする諸芸の能力を高めておくことが必要だった。江戸時代の政治思想の根本にすえられた儒学の知識は必須であり、幼少期から、素読などによって、儒学の基本書をそらんじることができるようにしていた。

また、さまざまな儀式や儀礼の後に行われる能や茶会、歌会などの催しに対応できるよう、日本の古典的教養を身につけておく必要もあった。例えば、彦根城主が江戸城の本丸御殿に出仕した際、徳川宗家から茶席に招かれたり、能の鑑賞に同席するよう求められることがあった。彦根城主が上使として京都の御所に出向いた時、礼儀作法をわきまえていなければ使者としてのつとめを果たすことができないし、公家とのやり取りのなかで、古

¹⁶⁰ 藤井譲治『日本の近世』第3巻（支配のしくみ）、中央公論社、1991年、136頁。

¹⁶¹ たとえば、文官と武官が兼務されることのない朝鮮王朝から江戸時代の日本に派遣された朝鮮通信使には、「各州の太守はすべて武職である」など、「日本の官制は、貴国（朝鮮王朝）とは大いに異なる」、「容易に理解できない」ものだった（姜彦彦訳注『海游録－朝鮮通信使の日本紀行』、平凡社、1974年、293～297頁）。

¹⁶² 高橋昌明『武士の日本史』、岩波書店、2018年、23頁。

典的教養を身につけていることが、交渉をうまく進める効果を発揮したはずである。

江戸時代の武士が文武両道の修養を必要としたことは、武士が軍事と政治の両方を担う統治者としての身分を保ち、社会の安定を維持し続けるために必要なことだった。下屋敷は、江戸時代の上級武士が、統治者としての立場を保つために、文武両道の修養に励む場の一つだった。

下屋敷は、上級武士の居屋敷とは別に城下町近郊に設けられた。災害時の避難場所や物資の集積場所として使われたほか、広大な庭園が設けられていることから、一般的に、その屋敷の当主が息抜きをする遊興の場、私的空間と見なされることが多かった。

下屋敷は、これまで、江戸の大名屋敷に関する研究で取り上げられてきた¹⁶³。地方の下屋敷については、研究が少なく、その実態が明らかにされているとは言えない。幸いにも、彦根の下屋敷についてはたくさんの関係資料があり、実態の解明が可能である。彦根の下屋敷は、その屋敷の当主が息抜きをする遊興の場であっただけでなく、江戸時代の上級武士が文武両道の修養を行い、統治者としてのアイデンティティを形成・維持するのに必要な施設だった。

本節では、彦根の下屋敷を城主の下屋敷と詰衆の下屋敷に分けて、それぞれの下屋敷の位置や役割について明らかにし、さらに、江戸時代の上級武士の歴史的特質にも言及する。

2 城主の下屋敷

① 18世紀までの下屋敷（玄宮園）

彦根城城主の下屋敷については、これまで、17世紀後半に彦根城の第2郭（内堀と中堀・松原内湖に挟まれたエリア）に造営された槻御殿を下屋敷と理解し¹⁶⁴、19世紀前半に琵琶湖畔の松原に造営されたお浜御殿も下屋敷であると認識されてきた¹⁶⁵。本節では、

¹⁶³ 金行信輔「寛文期江戸における大名下屋敷拝領過程」『日本建築学会計画系論文集』64巻516号、1999年）、水本和美「紀伊新宮藩水野家下屋敷―新宿区水野原遺跡」『月間考古学ジャーナル』514号、2004年）など。

¹⁶⁴ 例えば、彦根市教育委員会文化財部文化財課編『彦根城関連資料集成 彦根城』（彦根市教育委員会文化財部文化財課、2014年）では、槻御殿の建物部分を楽々園、庭園部分を玄宮園と呼び分けておりとし、楽々園を「退隠（隠居）した藩主やその一族が日常生活を送った下屋敷である」（70頁）と説明している。なお、本文中で指摘するように、槻御殿は、現在、楽々園と呼ばれている御殿をさす用語であり、現在、玄宮園と呼ばれている庭園を含まないものとして認識すべきである。

¹⁶⁵ 『彦根城関連資料集成 彦根城』、85頁。

まず18世紀までの城主の下屋敷について、井伊家の庶子屋敷¹⁶⁶の記録などを素材として検討してみたい。

一、御二方様、御上下召させられ、九ツ半時、御祝儀に御上り遊ばされ候処、御講釈相済み申し候はば、御下屋敷へ御出遊ばされ候様、御側役衆へ仰せ出され置かる。御講釈済み、そのままの御服にて御下屋敷へ御出遊ばされ候。御羽織・袴取り寄せ置き申し候処、指し上げ申し候様仰せ出され、御召し替え遊ばされ候。七つ時頃、殿様御同にて御黒御門より直に御殿へ入らせられ候。惣じて御供は御裏御門へ廻り申し候。青木、御黒御門より御供仕り申し候。御駕申し遣わし候様仰せ出され、御駕にて暮れ時前表御門より御帰り遊ばされ候。〔 〕表御門橋の上にて御駕に召され候。御供は橋本・水谷・長谷馬・前野、御先払は古川¹⁶⁷。

この記事は、彦根城主井伊家の庶子屋敷のうち、彦根城第2郭の京橋口の近くにあった広小路屋敷の記録であり、天明3年（1783）正月28日の出来事が記されている。広小路屋敷で暮らしていた三人の男児のうち、彦根城主井伊直幸の七男にあたる庭五郎（直中）と九男の又介（直在）が、儒学の講義が行われていた表御殿に出かけた後、直幸の指示で下屋敷に移動した。その後、直幸とともに下屋敷を出て黒門口から表御殿に戻り、日暮れ前に表門橋で駕籠に乗り、広小路屋敷に戻ったと記されている。井伊直幸とその息子たちが下屋敷から表御殿に移動する際に黒門口を通っていることから、下屋敷は、彦根城第1郭の北部に位置する黒門口の近くにあったことがわかる。



図12 広小路屋敷などの位置

注）彦根御城下惣絵図（彦根城博物館所蔵）に施設名を付した。

¹⁶⁶ 庶子とは、正室でない女性から生まれたこどものことであり、その子供が暮らす屋敷を庶子屋敷と呼ぶ。彦根では、彦根城の第2郭に庶子屋敷が設けられたが、彦根城の中堀と外堀に挟まれた第3郭のうち、中堀沿いの佐和口の近くにも庶子屋敷が設けられた。

¹⁶⁷ 彦根藩井伊家文書「広小路御家鋪御留帳」天明3年（1783）正月28日条（彦根藩資料調査研究委員会編『彦根城博物館叢書6 武家の生活と教養』、彦根城博物館、2005年、260頁）。

一、御二方様、八つ時より御下屋敷へ御出遊ばされ候。御膳も相廻り候。七つ時より加藤彦兵衛召させられ、御弓拝見仰せ付けられ候。且は又、鉄蔵をも同道仰せ付けられ候て罷り上り、御相手に仰せ付けられ候。暮時過ぎ御帰り。御抱守は猿木・長谷馬・橋本・野田、御先払は伊藤。

一、槻御殿へ 御使 青木貞兵衛

殿様上使御参勤御礼ならびにこの度御用部屋入り仰せを蒙らせられ候御歎び、且は又、進めらるる物の御礼かたがた御使遣わされ候¹⁶⁸。

これも広小路屋敷の記録からの抜粋であり、天明3年（1783）7月2日の出来事が記されている。「御二方様」、すなわち、庭五郎と又介が八つ時（午後3時頃）に城主の下屋敷に行き、七つ時（午後4時頃）に井伊家家臣の加藤彦兵衛とその息子の鉄蔵を呼び寄せて弓の稽古を行ったが、同じ日に、広小路屋敷で三人の男児を世話していた井伊家家臣の青木貞兵衛が槻御殿に出向いて、城主の井伊直幸が江戸に到着し、大老などが詰める御用部屋入りを命じられた祝いを述べたことが記されている¹⁶⁹。下屋敷に関する記事と槻御殿に関する記事が並置されていることから、当時、下屋敷は、槻御殿とは別の施設として認識されていたことがわかる。弓の稽古ができるほどの広さを有する下屋敷は、槻御殿ではなく、その隣の玄宮園だったと考えるのが妥当であろう。

玄宮園は、槻御殿が造営されたのと同じ頃、17世紀後半に造営された池泉回遊式庭園である。彦根城の内堀と松原内湖に挟まれた彦根城第2郭の北部に位置し、池を中心にさまざまな景観がつけられた。園内には茶室が点在し、庭園の南部には馬場があった。彦根城第2郭は、領民や他領の者の立ち入りが厳しく制限された場所で



写真7 玄宮園

¹⁶⁸ 彦根藩井伊家文書「広小路御家鋪御留帳」天明3年（1783）7月2日条（彦根藩資料調査研究委員会編『彦根城博物館叢書6 武家の生活と教養』、333頁）。

¹⁶⁹ 井伊直幸は、天明4年（1784）11月28日に大老に任命された。

あり¹⁷⁰、玄宮園の利用者は、城主とその家族、そして、第2郭で暮らす1000石以上の知行をあてがわれた詰衆やその家族に限られていた。ただし、中下級武士は、上級武士が玄宮園を利用する際のサポート役を果たすために、この庭園に入ることがあった。

それでは、この下屋敷は、上級武士によって、どのように使われていたのでしょうか。下屋敷で行われた活動の内容を確認してみたい。

一、御二方様、昼時より御下屋敷にて御乗馬遊ばされ候。

罷出でられ候 北村文左衛門・栗林弥一左衛門・伊藤利八

右相済み、御遠的遊ばされ候。御夕御膳廻させ申し候。暮時御帰り遊ばされ候。

御供 森野喜右衛門

御弓御相手仰せ付けられ候 柄嶋喜平次・富永彦十郎・久徳右平太・小原八郎
左衛門¹⁷¹

これは、広小路屋敷で暮らす井伊庭五郎・又介に関する天明3年（1783）4月4日の記事である。彼らがこの日に下屋敷で馬術と弓術の稽古を行ったことがわかる。その場に呼び出された三人の井伊家家臣のうち、栗林弥一左衛門が御馬乗形役見習¹⁷²、伊藤利八が御馬役¹⁷³だったことが、それぞれの侍中由緒帳から確認できる。二人の男児は、乗馬の専門家の指導のもと、馬術の稽古を行ったのである。そして、二人の男児は、広小路屋敷に仕えていた下級武士を相手に遠的の稽古も行った。この記事から、下屋敷は、乗馬や弓など、武術の稽古を行う場所だったことが確認できる。



写真8 玄宮園の馬場（春風埒）

¹⁷⁰ 彦根城中堀沿いの出入口については、門番がよく知っている彦根城下の町人であれば通行できたが、知らない者は、領内の百姓・町人であっても通行許可書がなければ出入りできなかった。また、彦根城の第2郭に屋敷を構えている井伊家家臣の縁者や親類が他所から訪ねてきた場合には、中堀より外側の町家で対面するなどして、中堀より内側に他領の者をみだりに出入りさせないよう命じられている。

¹⁷¹ 彦根藩井伊家文書「広小路御家鋪御留帳」天明3年（1783）4月4日条（彦根藩資料調査研究委員会編『彦根城博物館叢書6 武家の生活と教養』、292頁）。

¹⁷² 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第12巻、彦根城博物館、2011年、18頁。

¹⁷³ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第8巻、彦根城博物館、2001年、260頁。

下屋敷では、馬術、弓術のほか、砲術の稽古も行われた。

一、未の半刻過ぎ、御下屋敷にて御鉄砲御稽古遊ばされ、申の半刻過ぎ御帰り也。沢村丹治御供仰せ付けられ候也¹⁷⁴。

これは、広小路屋敷で暮らしていた庭五郎・又介の父親にあたる井伊直幸が、庶子として、彦根城第3郭の尾末町屋敷で過ごしていた時の記録である。延享3年（1746）2月6日に、民部（直幸）が下屋敷で鉄砲の稽古を行ったことが確認できる。

下屋敷は、武芸だけでなく、文化的素養を身につける場所でもあった。

一、庭五郎様御下屋敷にて御乗馬遊ばされ候。又介様御延引。

佐藤新五右衛門・臼居彦右衛門・栗林伝内

一、御二方様、御下屋敷へ御同刻に御出遊ばされ候て、御乗馬後、御茶屋に入らせられ候。御膳も相廻り、暮時御帰り遊ばされ候。又介様、御詩作遊ばされ候に付、召し連れられ候。草山隆庵・稲川周庵・前野全介¹⁷⁵

これは、広小路屋敷で暮らす庭五郎・又介に関する天明3年（1783）5月27日の記事である。この日、二人の男児が下屋敷を訪れ、庭五郎だけが乗馬の稽古を行い、又介は漢詩を作ることになり、漢詩の指導者として、草山隆庵ら三人が呼び寄せられた。草山隆庵と稲川周庵は御典医である。

下屋敷は、庶子だけでなく、城主も利用した。

一、御二方様、御下屋敷へ御出の思召しにて、御出懸けに承りに申し遣わし候処、殿様今日入らせられ候由、御断り申し来たり。直ちに御馬屋前にて御責馬これ有り、御覧遊ばされ候。九つ時前御帰り遊ばされ候¹⁷⁶。

これも、庭五郎・又介に関する記事であり、天明3年（1783）2月4日、庭五郎と又介が下屋敷に出かけようとしたところ、その日は、二人の男児の父親で、彦根城主の井伊直幸が下屋敷を使うことになっていたため、下屋敷の使用を断られた。そのため、二人の男児は、広小路屋敷の近くにある馬屋の前で、馬駆けを見学した。

この記事からは、城主の井伊直幸が下屋敷をどのような目的で利用したのかわからない

¹⁷⁴ 彦根藩井伊家文書「民部様御賄御用日記」延享3年（1746）2月6日条（彦根古文書同好会編『民部様御賄御用日記―井伊直幸・青春時代の日々の暮らし―〔延享元年正月から六月まで〕』、彦根古文書同好会、2006年、45頁）。

¹⁷⁵ 彦根藩井伊家文書「広小路御家鋪御留帳」天明3年（1783）5月27日条彦根藩資料調査研究委員会編『彦根城博物館叢書6 武家の生活と教養』、319頁）。

¹⁷⁶ 彦根藩井伊家文書「広小路御家鋪御留帳」天明3年（1783）2月4日条彦根藩資料調査研究委員会編『彦根城博物館叢書6 武家の生活と教養』、262頁）。

が、別の史料から、直幸が下屋敷で乗馬をしたことが確認できる。

一、昼時過ぎより御庭へ御出、御乗馬遊ばされ、御近習・御馬役へも仰せ付けられ相済み候。立ち懸け遊ばされ、七つ時御帰館¹⁷⁷。

これは、彦根城主の動向を記録した「側役日記」の記事であり、宝暦5年（1755）に彦根城主となった井伊直幸が、宝暦6年（1756）に初めて城主としてお国入りした時の出来事である。同年9月8日、直幸は、昼過ぎに「御庭」、すなわち、玄宮園を訪れ、乗馬を行った。「側役日記」によれば、この年、直幸は玄宮園でたびたび乗馬を行っている。

② 19世紀に造営された下屋敷（お浜御殿）

文化7年（1810）、彦根城の北に位置する琵琶湖岸の松原に井伊家の下屋敷が造営された。現在、この松原下屋敷は、お浜御殿と呼ばれている。松原内湖の湖水を引き込んだ池のまわりに茶室が点在し、西側には馬場があった。松原下屋敷がどのように使われたのか、井伊家の家臣の記録である「侍中由緒帳」を素材として、検討してみたい。

一、同年（文化10年）二月六日、同姓孫太郎儀、大殿様松原下屋舗江御出被遊為召、御鉄砲御相手被仰付、其上於御前御懇之御意之上、御手自拾刃玉御抱筒一挺拝領仕候¹⁷⁸、



写真9 松原下屋敷（お浜御殿）

この記事は、家老をつとめた西郷藤左衛門家の記録である。文化10年（1813）2月6日、前の年に隠居した「大殿様」、すなわち、井伊直中が松原下屋敷で鉄砲の稽古を行い、西郷家当主の息子である孫太郎に稽古の相手をさせたことが記されている。鉄砲の稽古は、それなりの直線距離をもつ敷地が必要であることから、松原下屋敷の馬場で行われたと考えられる。

¹⁷⁷ 彦根藩井伊家文書「側役日記」宝暦6年（1756）9月8日条。

¹⁷⁸ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第2巻、彦根市教育委員会、1995年、20頁。

一、同年同月（文政7年6月）六日、松原於御下屋敷、摂州永井肥後守様御家中若林雲八郎弓術 両殿様御覧被遊候付拝見被仰付、相済候後両殿様御前江被為召、御酒・御吸物頂戴、其上御盃頂戴仕候¹⁷⁹

これも西郷藤左衛門家の記録である。文政7年（1824）6月6日、松原下屋敷において、高槻城主永井家の家臣、若林雲八郎が、その当時の城主である井伊直亮と前の城主だった井伊直中に弓術を披露したことが記されている。若林雲八郎は、日置流道雪派の弓術を極め、文政6年（1823）10月5日に京都の三十三間堂で100射中64射を的に的中させた。このような出来事があったことから、松原下屋敷で弓術を披露することになったものと思われる。若林雲八郎は他領の者だったが、松原下屋敷は城外なので、玄宮園がある彦根城第2郭のような他領の者の立ち入り禁止の問題は生じない。

一、同年同月（弘化2年7月）廿九日、於松原御下屋敷本式騎射 殿様御覧之節、為御褒美忝子蔵之進江羽二重壺反、二男牛九郎江棧留御袴地壺反、於 御前御側役加藤彦兵衛を以頂戴仕候¹⁸⁰。

この記事も、西郷藤左衛門家の記録である。弘化2年（1845）7月29日、松原下屋敷を訪れた彦根城主井伊直亮の前で、本式騎射が行われ、この行事に参加した西郷蔵之進と西郷牛九郎に、側役の加藤彦兵衛を介して褒美が与えられた。松原下屋敷には馬場があったので、馬術の稽古も行われたことが、この記事から確認できる。

「侍中由緒帳」の記事から、松原下屋敷においても、玄宮園の場合と同じように、砲術・弓術・馬術の稽古が行われたことが確認できた。

松原下屋敷でも、文化的素養を高める行事が行われたようである。松原下屋敷が造営されてから、毎年、秋になると、そこで中秋観月会が催された。彦根城主の井伊直亮が、家老をはじめとする家臣を酒宴に招き、漢詩や和歌を詠ませた。初回の文化8年（1811）8月25日の中秋観月会では、漢詩を提出したものが10人に満たなかったため、井伊家家臣の詩作能力を高めるため、それ以後、藩校で毎月1回、漢詩の勉強会が開催されることになったという¹⁸¹。

¹⁷⁹ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第2巻、30頁。

¹⁸⁰ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第2巻、40頁。

¹⁸¹ 「彦根市史稿」（文筆篇Ⅲ）。

③ 彦根城主の下屋敷の構成と機能

彦根城主の下屋敷は、表御殿とは異なり、たくさんの建物が密集しているような所ではなかった。池のまわりに茶室が点在する池泉回遊式庭園と馬場によって構成される場所だった。城主の下屋敷は、城主やその家族が庭を散策し、茶室で飲食する遊興の場として使われるほかに、城主やその息子たちが文武両道の修練を積む場所でもあった。さらに、家老やその息子たちが下屋敷に招かれて、城主の前で文武両道の技能を披露させられることもあり、彼らにとっては、息の抜けない場所だった。当然、家老やその息子たちは、日ごろから、自分たちの下屋敷、あるいは、藩校において、文武両道の修練を重ね、城主の前で日ごろの鍛錬で身につけた技を滞りなく披露できるようにしていたはずである。

3 詰衆の下屋敷

① 下屋敷をあてがわれた身分

続いて、「侍中由緒帳」の記事によりながら、井伊家家臣のうち、1000石以上の領知をあてがわれた詰衆の下屋敷について論じることしたい。

一、文政五壬午年二月十五日、是迄下屋敷被下置有之处、千石以下ニ而者不被下置候

处、是迄其俣ニ被指置候得共此度指上候様被仰付、尤五畝畑被下置候段被仰出候¹⁸²

これは、内藤五郎左衛門家の文政5年（1822）2月15日の記事である。この記事によれば、井伊家の家臣については、知行高が1000石を超える家臣だけに下屋敷が認められていたが、このきまりが厳密に守られていなかったため、文政5年（1822）に、1000石以下の家臣から下屋敷を取り上げるようになったという。

井伊家の家臣のうち、知行高が1000石以上の者たちは詰衆と呼ばれ¹⁸³、彦根城の第2郭に屋敷を構えていた。戦時には、侍大将として備を率いたり、旗奉行・鎗奉行・足軽組頭をつとめ、平時には家老・中老・用人をつとめた¹⁸⁴。彼らは、城主と同じように、下屋敷を持つことができる人たちだった。

¹⁸² 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第3巻、彦根市教育委員会、1996年、71～72頁。

¹⁸³ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻（通史編 近世）、彦根市、2008年）、113頁。

¹⁸⁴ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻、150～157頁。

② 詰衆の下屋敷の位置

「侍中由緒帳」の記事から、その存在が確認できる詰衆の下屋敷は、表6の通りである。

表6 詰衆の下屋敷

| | |
|----------|-----------------------------------|
| 庵原助右衛門家 | 野田山村（「野田山村下屋敷」「野田山別荘」「野田山別墅」） |
| 印具徳右衛門家 | 中薮村（「中薮下屋敷」） |
| 宇津木三右衛門家 | 平田村（「平田村下屋敷」「平田村別荘」） |
| 小野田小一郎家 | 善利村（「善利下屋敷」） |
| 木俣清左衛門家 | 松原村（「松原別墅」） |
| 西郷藤左衛門家 | 安清村（「安清下屋敷」） |
| 中野助太夫家 | 安清村（「安清下屋敷」） |
| 長野十郎左衛門家 | 安清村（「安清下屋敷」）、平田村（「平田村下屋敷」「平田村別墅」） |
| 貫名筑後家 | 安清村（「安清村下屋敷」）、古沢村（「古沢村領拝領屋敷」） |
| 三浦与右衛門家 | 中薮村（「中薮別墅」） |
| 横地修理家 | 安清村（「安清下屋敷」） |
| 脇五右衛門家 | 安清村（「安清下屋敷」） |

詰衆の下屋敷は、彦根城下町に隣接する松原村、中薮村、安清村、善利村、古沢村にあり、さらに、城下から少し離れた平田村や野田山村にも詰衆の下屋敷があった。城下から最も遠い野田山村でも、彦根城天守からの直線距離は約4キロメートルである。江戸時代の彦根では、井伊家の家臣が城から2、3里（約8～12キロメートル）以遠に無断外出することが禁止されており¹⁸⁵、詰衆の下屋敷の位置はその制限範囲に収まっていた。

③ 詰衆の下屋敷の役割

次に、詰衆の下屋敷がどのように使われていたのかを「侍中由緒帳」の記事から確認してみたい。

¹⁸⁵ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第6巻（史料編 近世1）、彦根市、2002年、776頁。

詰衆の下屋敷も、城主の下屋敷と同じように、文武両道の修練を行う場であった。

一、同年（享和元年）三月七日、安清下屋敷之内、鉄砲新矢場仕度奉願候処、御承知被遊、新矢場申付、四季共勝手ニ稽古仕候様被仰出候¹⁸⁶。

これは、家老をつとめた長野十郎左衛門家の享和元年（1801）3月7日の記事である。この記事によると、長野十郎左衛門家の安清下屋敷に鉄砲矢場が設けられ、いつでも自由に稽古することが認められたようである。鉄砲矢場は、他の詰衆の下屋敷にも設けられていたようで、そこで鉄砲の稽古が行われた。

一、同年（寛政7年）四月十八日、野田山別墅江被為入、為御慰武田流草鹿興行入御覧、段々御懇之御意之上、御盃頂戴仕、其上御手自御端物頂戴并御肴等頂戴仕候¹⁸⁷

これは、家老をつとめた庵原助右衛門家の寛政7年（1795）4月18日の記事である。庵原助右衛門家の野田山村の下屋敷において、彦根城主井伊直中を迎え、武田流草鹿が行われた。草鹿とは、鹿の形をした的を弓で射る競技で、射手の姿勢、弦音、矢の飛び方、的の当たり方などを奉行が総合的に判断して優劣を競う催しである。詰衆の下屋敷では、弓術の稽古も行われたことがわかる。

一、同年（宝暦2年）七月十日、松原別墅江御成、剣術御覧被下置候¹⁸⁸

これは、筆頭家老をつとめた木俣清左衛門家の宝暦2年（1752）7月10日の記事である。この日、彦根城主の井伊直定が訪れた木俣清左衛門家の松原下屋敷で、剣術の稽古が披露された。

以上の記事から、詰衆の下屋敷は、砲術、弓術、剣術などの武芸を稽古し、城主にその稽古が披露されることもある場所だった。

詰衆の下屋敷は、文化的素養を養う場でもあった。

一、安永六丁酉年三月五日、松原別墅江俄被為入、稽古能御覧、御鼓被遊、母・妻子共并妹脇伊織母御目見被仰付、忤子吉之進儀御手自拝領物仕、其外銘々拝領物仕候

189

これは、木俣清左衛門家の安永6年（1777）3月5日の記事である。この日、彦根

¹⁸⁶ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第1巻、彦根市教育委員会、1994年、251～252頁。

¹⁸⁷ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第1巻、203～204頁。

¹⁸⁸ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第1巻、23頁。

¹⁸⁹ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第1巻、32頁。

城主の井伊直幸が木俣清左衛門家の松原下屋敷を突然訪れて、能の稽古を鑑賞し、自分も鼓を打った。木俣家は、能が盛んな家であった。彦根城第2郭にあった木俣清左衛門家の居屋敷でも、同家の松原下屋敷でも、しばしば能の上演が催されたことが「侍中由緒帳」から確認できる¹⁹⁰。

一、天明六丙午年六月十五日、 若殿様松原別墅江御借請ニ而被為 入、御番囃子被遊御覧、依之大御折并御肴一折家内何茂拝領之仕、別段半弥被為召、御手自御腰下ケ御印籠拝領之仕、何茂并妹脇伊織母 御目見、御懇之蒙御意候¹⁹¹

これは、木俣清左衛門家の天明6年（1786）6月15日の記事である。彦根城主井伊直幸の息子である直豊が、木俣清左衛門家の松原下屋敷を借りて、番囃子の鑑賞会を催した。番囃子とは、能を簡略化したもので、紋服・袴をつけた演者が正座し、囃子をともなって謡を全曲演奏する芸能である。

一、同年（寛延4年）二月廿八日、松原別墅江 御成、家来共狂言被仰付、鮮鯛一折 拝領仕候¹⁹²

これは、木俣清左衛門家の寛延4年（1751）2月28日の記事である。彦根城主の井伊直定が木俣清左衛門家の松原下屋敷を訪れ、木俣家の家来たちに狂言を演じさせた。狂言は、能と同様に、猿楽から発展した伝統芸能であるが、能が盛んだった木俣清左衛門家では、狂言も盛んだったようである。

一、享和三癸亥年三月四日、御側役を以、来ル七日御野廻り御出先より中藪別墅江御立寄可被遊、其節親翫然儀御茶指上候様被仰出、猶又御茶受之御料理何角翫然存付之通取計、手前ニ而相仕立テ不相伺指上候様被仰出、則七日、被為掛 御腰御入之節、翫然儀蒙御意候、先格之通夫々指上物仕、夫より於茶所西尾隆治・宮崎音人・中嶋意仙御相伴ニ而、翫然儀御茶并御茶受之御料理首尾能指上、毎々御懇之蒙御意、其上御盃頂戴仕、御側役を以父子江御肴一折・羽二重式疋宛、母・妻江紅白羽二重式疋宛、舎弟常之介・正木藤三郎江郡内嶋老反宛拝領仕、父子共被為召、御吸物・御酒被下置、段々御懇之御意之上、兩人共御盃頂戴仕、翫然儀御手自御紋附縮緬袷御羽織拝領仕候、常之介儀初而御目見仕蒙御意候、御立之節茂父子共蒙御意候、且

¹⁹⁰ 木俣清左衛門家の居屋敷で能が上演された記事としては、同家の侍中由緒帳の寛延2年（1749）3月5日条など、松原下屋敷で能が上演された記事としては、同家の侍中由緒帳の宝暦2年（1752）11月9日条などがある。

¹⁹¹ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第1巻、37頁。

¹⁹² 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第1巻、23頁。

又召仕共迄茂御吸物・御酒・御肴等頂戴仕候¹⁹³

これは、家老をつとめた三浦与右衛門家の享和3年（1803）3月の記録である。3月4日、井伊家の側役から、3月7日に彦根城主井伊直中が領内巡見の途中で三浦与右衛門家の中藪下屋敷に立ち寄るので、三浦栲然（8代当主元福）が直中にお茶と料理を提供するようにとの命令があった。3月7日、三浦栲然は、下屋敷内の茶所で直中とご相伴衆にお茶と料理を首尾よく提供し、直中からお褒めの言葉を賜った。三浦与右衛門家の下屋敷には茶室があり、三浦栲然がお茶や料理を提供する本格的な茶会に習熟していたようである。下屋敷は茶道の技能を城主に披露する場所でもあった。

4 下屋敷における立場をこえた交流

城主や詰衆の下屋敷は、城主と詰衆の家族や家来が立場の壁を越えて交流する場所でもあった。城主と詰衆は、日頃から顔を合わせて仕事をする間柄であったが、詰衆の家族や家来は、城主に会う機会がほとんどなく、彼らにとって城主は雲の上の存在だった。ところが、詰衆の家族が城主の下屋敷に招かれたり、城主が詰衆の下屋敷を訪れて、詰衆の家族や家来と交流することがあった。

一、同年（享和3年）三月七日、家内之者共江御庭拝見被仰付罷越候処、殿様より御懇之御意を以御提重被下置、量寿院様より茂御菓子被成下候、尤其節脇内記母・西郷藤左衛門妻同道罷越候様御懇ニ被仰出候ニ付、則同道罷越候¹⁹⁴

これは、木俣清左衛門家の「侍中由緒帳」の享和3年（1803）3月7日の記事である。この日、木俣清左衛門家の家族が、御庭、すなわち、玄宮園の見学に招かれ、彦根城主の井伊直中から重箱を賜り、直中の母親の量寿院から菓子を賜った。この時、木俣清左衛門家と同じ詰衆である脇五右衛門家や西郷藤左衛門家の家族も玄宮園に招かれた。普段は立ち入ることができない玄宮園に詰衆の家族を招き、接待することで、城主と詰衆との結びつきを保とうとしたのである。

一、同年（嘉永6年）八月廿六日、野田山別荘江御成被下置、御子様方ニ茂被為入、毎々御前江被為召、段々御懇之蒙御意、御盃頂戴仕、返盃被仰付、其上御手自結構之御品々并御自詠等頂戴仕、御用人を以羽二重・御肴拝領仕、祖母并妻ニ茂御

¹⁹³ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第2巻、110頁。

¹⁹⁴ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第1巻、64頁。

前江被為召、御懇之御意之上、御盃頂戴仕返盃被仰付、御手自品々拝領物仕、御用人を以江州御綿拝領仕、猶又 御子様方より茂御肴頂戴仕、祖母并妻江茂御包之品頂戴仕、将又相詰罷在候家来頭分之者江御樽肴頂戴被仰付候¹⁹⁵

これは、庵原助右衛門家の「侍中由緒帳」の嘉永6年（1853）8月26日の記事である。城主が詰衆の下屋敷を訪れて、詰衆の家族や家来と交流したことが確認できる。彦根城主となってから3年目を迎えた井伊直弼が、この日、息子たちを連れて、詰衆の庵原助右衛門家の野田山下屋敷を訪れた。庵原家当主が直弼の前に呼ばれて、直弼から言葉をかけられ、盃をもらい、結構な品々や直弼の和歌が記された短冊を手渡され、御用人を介して羽二重や酒の肴を賜った。続いて、庵原家当主の妻たちが直弼の前に招かれ、言葉をかけられ、盃を交わし合い、贈り物を手渡され、御用人を介して江州綿を賜った。庵原家当主や庵原家の女性たちは、直弼の息子たちからも贈り物をもらった。さらに、庵原助右衛門家の野田山下屋敷に詰めていた庵原家の家来たちにも直弼から酒樽と酒の肴が振る舞われた。彦根城主である井伊直弼が自分の家族を連れて詰衆の下屋敷を訪れ、詰衆の当主だけでなく、家族や家来とも立場の壁を越えて交流したことは、城主と詰衆との結びつきの強化につながったことは間違いない。

下屋敷は、城主の御殿や家臣の居屋敷のような公的性格の強い施設ではなかったため、立場を超えた交流がしやすかったものと思われる。

5 小括

江戸時代の彦根では、城主の御殿が彦根城の内堀に囲まれた第1郭、城主の別邸や庶子屋敷、詰衆の居屋敷が彦根城の内堀と中堀に挟まれた第2郭に設けられた。詰衆は、城主の御殿や当番家老の居屋敷に定期的に集まって、政務に関する話し合いを行い、政治方針を決定し、重要な案件については城主の判断を仰いだ。統治の責任を負う城主や詰衆は、一般の侍以上に努力して、統治者としての資質を磨かなければならなかったはずである。

詰衆の統治者としての役割には、当役（政治に関する役割）と武役（軍事に関する役割）の二つがあった。例えば、三浦与右衛門家の「侍中由緒帳」によれば、文化8年（1811）、三浦元福（栩然）が病気で再び隠居したことによって、同家の家督を相続した三浦元

¹⁹⁵彦根城博物館編 『侍中由緒帳』第1巻、230頁。

泰に、次のような命令が下された¹⁹⁶。

文化8年（1811）

閏2月16日 三浦家の家督を相続し、2500石をあてがわれた。

12月12日 二十騎一備の小手分頭を命じられた。

文化9年（1812）

12月15日 中老役を命じられた。

文化13年（1816）

閏8月21日 鉄砲足軽五十人組を預けられた。

三浦元泰は、文化8年（1811）閏2月16日に家督を相続し、2500石の領知をあてがわれた後、当役としては中老役を、武役としては侍二十騎と鉄砲足軽五十人を率いる役目をそれぞれ命じられた。当役を担うためには、政務に関する知識に加え、さまざまな公式行事の際に行われる能や茶などの嗜みが必要であった。政務に関しては、自己学習や井伊家が雇った儒者による講義を受講するなどして、その知識や心構えを身につけ、能や茶などの技術を下屋敷などで磨いた。武役についても、いつ何時に出動を命じられても対応できるよう、日常的に下屋敷などで修練を重ねた。

こうした修練は、詰衆だけでなく、城主やその息子たちにも必要であり、城主の下屋敷が文武両道の修練の場であったことは、詰衆の下屋敷と同じであった。城下近郊の村に設けられた下屋敷は、城主や詰衆が統治者としてのアイデンティティを形成・維持するうえで欠くことのできない施設であり、上級武士の暮らしを支える施設であった。そして、下屋敷において、城主と詰衆の家の構成員との間で身分をこえた交流が行われたことは、ともに統治に責任を負う城主と詰衆、すなわち近世的政治権力の紐帯を固めるのに重要なことだった。

¹⁹⁶ 彦根城博物館編『侍中由緒帳』第2巻、114～115頁。

第3章 近現代への展開

第1節 明治維新と彦根城下町

1 江戸から明治へ

18世紀末頃から日本沿岸に外国船が頻繁に来航するようになり、同時期に自然災害などが続いて日本国内の社会情勢が不安定になると、公儀の外交や内政に対する批判が高まっていた。慶応3年（1867）に徳川慶喜が大政奉還すると、その後、明治政府によって、武士が日本の統治権を独占し、天下人と大名や旗本が国内を分割統治する統治体制が改められ、天皇を頂点とする中央集権的な国家体制のもと、士族（武士）に限らず、能力のある個人（ただし、成人男性）が公務を担うようになった。

彦根城下町においても、日本全体の動向と歩調を合わせて近世の統治体制が終焉を迎え、近代の国家体制が整えられていった。本節では、幕末から明治維新にかけて、彦根城下町でどのような政治的变化がおき、彦根城下町がどのように変わったのか明らかにする。

安政7年（1860）3月3日に大老井伊直弼が江戸城の桜田門外で暗殺されたことは、その後の井伊家の政治的立場を大きく変えた。文久2年（1862）閏8月、井伊家は、京都守護の任務を解かれた。さらに、同年11月には、井伊直弼の政治責任などを問われて、10万石の上知を命じられた。この難局を乗り切るため、文久3年（1863）正月、彦根城主の井伊直憲は、家臣に対して新たな施政方針を示した。先代の井伊直弼の政治が公武合体に支障をきたし、天皇を悩ませたことを問題視し、若年とはいいいながらその事態を看過して来た自己を深く反省して、今後は、家臣や領民をいつくしみ、文武の研鑽に励み、忠義を尽くし、井伊直政・直孝の事績にならって汚名を除くことを誓った。そして、天皇の意向を尊重して、尊王攘夷の方針に従うことを誓った¹⁹⁷。これ以後、井伊家は、摂津の海岸線の警備について外国船の来航に備えたほか、天誅組の乱、禁門の変、天狗党の乱に軍勢を派遣して、尊王攘夷の姿勢を示した。しかし、慶応2年（1866）の第二次幕長戦争で大敗を喫した。長州勢よりも軍備が劣っていたことに衝撃を受けた井伊家中では、翌年に西洋銃隊の編制が行われ、侍はもちろん、足軽や武家奉公人に至るまで、年齢に関係なく、晒山練兵所で銃隊の訓練が行われた¹⁹⁸。

¹⁹⁷ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻（通史編 近代）、彦根市、2009年、89～90頁。

¹⁹⁸ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、109頁。

慶応3年（1867）10月、徳川慶喜が大政奉還を行い、同年12月の小御所会議で徳川慶喜の辞官納地が決定され、新政府の陣容が定まった。この動きに反発した徳川方の軍勢が京都の二条城に集まるなか、井伊家中では、家老の木俣守盟や岡本宣迪が二条城入りを主張したのに対し、町医者の子に生まれ、文久3年（1863）に井伊家の家臣として召し抱えられた谷鉄臣や、足軽出身の大東義徹が二条城への軍勢の派遣に反対した。徳川慶喜が京都での軍事衝突を避けるために大坂城に移ると、家老の貫名亮寿がひそかに2小隊を率いて大坂に向かい、玉造御蔵の守備についた。しかし、井伊家としては、新政府側に立ち、京都の石薬師御門や東寺の近くの四塚関門、近江の大津などを警備した。慶応4年（1868）正月に戊辰戦争が始まり、徳川慶喜が大坂城を離れると、貫名亮寿に率いられた部隊が大坂から撤収し、井伊家の部隊は、新政府軍に加わって、東北地方の会津若松まで転戦した¹⁹⁹。

会津若松での戦いが終わった直後の明治元年（1868）10月、新政府は、日本国内の職制を標準化し、殿様のもとに執政・参政を置き、従来の身分にかかわらず有能な人材をそれらの職に登用させることにした。また、新政府の公議所を構成する公議人を各地から選出させた。井伊家中においては、それまで家老をつとめていた新野親良が公議人となった。その後、明治2年（1869）1月に足軽出身の大東義徹が公議人に任命され、翌月には作事奉行西村又次郎の三男である西村捨三が公議人となった²⁰⁰。

明治2年（1869）2月5日、井伊直憲が版籍奉還の上表を政府に提出し、同年6月に版籍奉還の願いが許可された²⁰¹。そして、6月17日に井伊直憲が政府から藩知事に任命され²⁰²、この時、「彦根藩」と呼ばれる軍事・政治組織が成立した。



写真10 西村捨三銅像

注）西村捨三は、大阪築港事務所初代所長となり、大阪築港に尽力したことから、この銅像が大阪の天保山公園に建立された。

¹⁹⁹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、111～118頁。

²⁰⁰ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、119頁。

²⁰¹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、120～121頁。

²⁰² 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第8巻（史料編 近代1）、彦根市、2003年、190頁。

江戸時代において、天下人と主従関係を結び、公儀の命令を受けるのは、井伊家当主だった。井伊家当主と主従関係を結んだ家臣の家の当主たちは、井伊家当主とともに井伊家中を形成して、軍事と政治を組織的に遂行したが、家臣の家の当主たちにとって、天下人は雲の上の存在であり、彼らに命令を下すのは、あくまでも井伊家当主だった。これに対して、明治時代初頭に成立した彦根藩では、藩知事も、大参事・権大参事・少参事・権少参事の職についた者たちも²⁰³、ともに天皇から任命された官僚であり、彦根藩という軍事・政治組織の一員だった。この点が、江戸時代との大きな違いだった。彦根藩知事となった井伊直憲は、時代が大きく変わったことを認識し、明治2年（1869）8月1日に、彦根藩の幹部たちに、新しい時代が創り出されようとしていることを心得て職務に励むよう指示し、旧習にこだわるような者には厳罰を下す意向を示した²⁰⁴。そして、9月14日には、彦根藩内に対して、井伊直憲を「殿様」ではなく「御知事様」と呼ぶよう通達された²⁰⁵。

明治2年（1869）10月、井伊直憲は、彦根城第1郭の表御殿から第2郭の槻御殿に住まいを移した²⁰⁶。表御殿から井伊家当主の住まいという私的な要素を除き、藩の公務を行う公的施設に特化したのである。明治3年（1870）2月には、政事庁と呼ばれていた表御殿が藩庁と呼ばれるようになった²⁰⁷。

明治2年（1869）11月、彦根藩の藩知事である井伊直憲に戸籍を東京に移すことが命じられ、藩知事の井伊直憲が彦根に赴任するという形式をとることになった²⁰⁸。これは、井伊直憲が天皇の命令によって地方に派遣された官僚の一人であることを明確化する措置に他ならなかった。

明治3年（1870）1月、高知藩知事山内豊範が政府に藩政改革の許可を求め、その改革を全国に広めることを望んだ。政府は、高知藩だけの改革を認めた。しかし、この高知藩の藩政改革は、米沢藩から明治政府に派遣されていた宮島誠一郎の日記に、「明治辛未（4年）の春、土州より士民平均の論を発し、終に福井・彦根・米沢の諸藩が協議して、士の常職を解き、文武の業を広く士民に布き渡せり」と書かれているように、彦根藩をは

²⁰³ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、122頁。

²⁰⁴ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第8巻、191頁。

²⁰⁵ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第8巻、192頁。

²⁰⁶ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、123頁。

²⁰⁷ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、123頁。

²⁰⁸ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、120～123頁。

じめとする他藩にも受け入れられていった²⁰⁹。

明治4年（1871）5月、彦根藩が、高知藩にならって、「人民一般平均の理を主とし、今後士族文武の常職を解き、人々自由に帰する」ことの許可を政府に求めた。彦根藩では、明治3年（1870）12月に、外国に対抗するためには、士族と平民が同じように国家の義務を果たすべきであること、すなわち、それまで士族が独占してきた文武の職務を平民にも開放し、教育を通じて知識・技能を磨き、自主・自由の権利を与えてそれぞれの思いを遂げさせるべきであるという考えを表明していたのである²¹⁰。

明治4年（1871）6月、彦根藩が藩政改革を行った。そのねらいは、身分制を撤廃することだった。彦根藩は、高知藩にならって、「人員一般平均の理」にもとづいて「士族文武の常職」を解き、「士族・卒・平民」の中から有能な男性を「官員・兵隊」に採用することにした。そして、士族だけでなく、有能な成人男性が役人や軍人のつとめを立派に果たすことができるようにするため、「士族・卒・平民」の誰もが「文武修業」を自由に行えるようにした。また、「士族文武の常職」を解いたことで、生業を失う「士族・卒」が出ないようにするため、職業選択の自由を認め、「士族・卒」が農業や商工業を行うことができるようになった。この改革にともなって、「文武の常職」を解かれた「士族」の不動産が「家産」と見なされるようになった。不動産を所有する「士族・卒」に「禄券」が発行され、「士族・卒」が所有する不動産に「家産税」がかけられ、その税金が「官禄・兵給資」の財源に組み込まれることとなった²¹¹。

高知藩や彦根藩などが、先進的な取り組みを進めていくことを恐れた政府は、明治4年（1871）7月に全国的な措置として廃藩置県を断行し、井伊直憲は藩知事の職を解かれた。藩という形で温存されてきた江戸時代の統治体制が、この時、完全に否定され、これ以後、天皇を頂点とする中央集権的な国家体制がさらに整えられていった。

2 明治維新を迎えた彦根城

明治4年（1871）の廃藩置県は、全国各地の多くの城が統治拠点としての機能を失う大きな転機となった。彦根城も、明治時代初期にさまざまな役割を終えた。

²⁰⁹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、127頁。

²¹⁰ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、126～128頁。

²¹¹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、89～90頁。

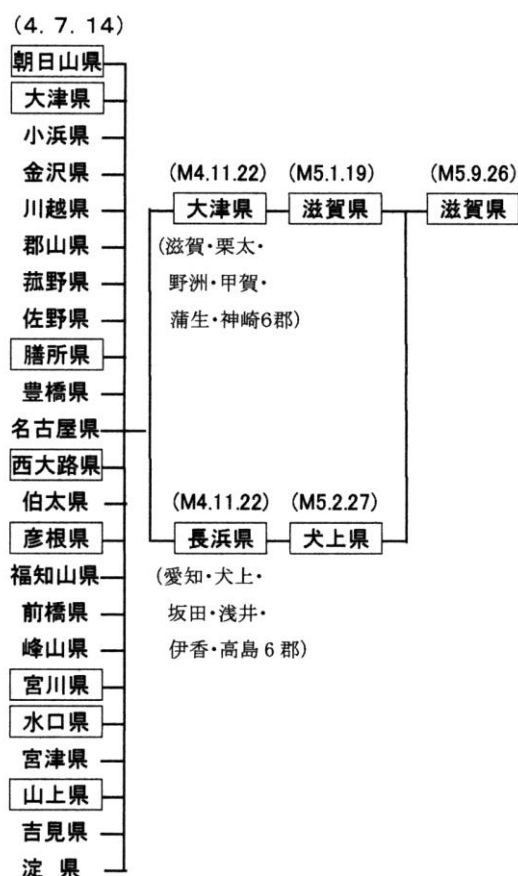


図 1 3 近江国における県の変遷

注)『新修彦根市史』(第3巻)、139頁に掲載の図

13。四角で囲んだ県は県庁が近江国にあるもの。

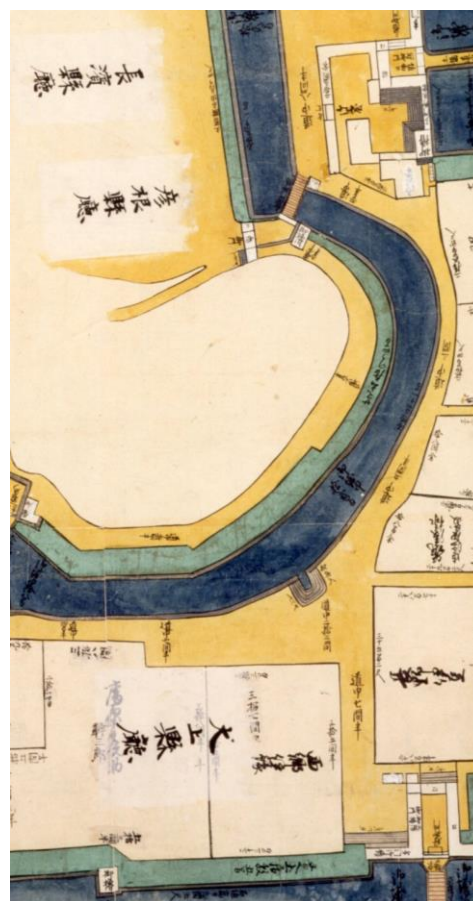


図 1 4 彦根御城下惣絵図 (部分)

注) 彦根城博物館所蔵。

明治4年(1871)7月14日に彦根藩が廃止され、彦根藩がそのまま彦根県になった。その後、図13に示したように、明治4年(1871)11月に近江国内の諸県がすべて廃止され、近江国が長浜県と大津県に二分されて、ようやく県の統轄領域が散在する状況が解消された。長浜県は、翌年2月に犬上県に改称され、明治5年(1872)9月に犬上県が滋賀県に合併した。

ところで、江戸時代後期の天保7年(1836)に作成された彦根御城下惣絵図は、彦根城下町の様子を描いた絵図であり、絵図を作成した後に土地の利用の仕方が変わった場所については、付箋を貼り、そこに新たな情報を書き込んでいる。図14の通り、彦根城第1郭の表御殿の敷地には「彦根県庁」「長浜県庁」の文字が追記されている。これは、明治4年(1871)7月に彦根県が誕生した時、江戸時代には表御殿として使われ、明治

2年（1869）に政事庁、翌年から藩庁と呼ばれるようになった建物群が彦根県庁として使われ、彦根県が明治4年（1871）11月に長浜県に再編成された時、長浜県庁になったことを示している。長浜県庁は、翌年の2月に坂田郡の長浜に移転した。ところが、同月、長浜県が犬上県に改称されたため、5月に県庁が彦根に移転することになったが、彦根城の第1郭が陸軍の駐屯地として使われていたため、犬上県庁が彦根城第2郭の西郷家・庵原家の屋敷に設けられたことが、彦根御城下惣絵図の彦根城第2郭の西郷家屋敷・庵原家屋敷の敷地に追記された「犬上県庁」の文字からうかがえる。

明治5年（1872）9月に犬上県が滋賀県に合併すると、旧犬上県庁が滋賀県彦根支庁に変わり、明治9年（1876）に滋賀県彦根支庁が閉鎖され、その建物が彦根警察署と彦根区裁判所の庁舎となった²¹²。明治時代に入ってからまもなく、彦根城は、政治拠点としての役割を失ったのである。

彦根城は、軍事拠点としての役割も、同じ頃に失った。明治4年（1871）12月、大阪鎮台小浜分営が彦根城に移転することになり²¹³、彦根城は、廃藩後も軍事拠点としての役割を維持した。そのため、明治6年（1873）1月に廃城令が出されても、彦根城は、廃城の対象にはならなかった。しかし、同年5月に彦根城駐屯部隊が京都の伏見へ移り²¹⁴、さらに、明治8年（1875）に歩兵第九聯隊の駐屯地が天津に定められると²¹⁵、彦根城を軍事拠点として使う見込みがなくなった。明治11年（1878）9月、彦根城を管理していた陸軍省は、彦根城の解体を始めた。

彦根城の第2郭に設置されていた藩校弘道館も、明治4年（1871）の彦根藩の廃止にともなって、廃校となった。

このように、彦根城は、明治時代の初めに、政治・軍事・教育の拠点としての役割をそれぞれ失ってしまった。

3 彦根城下町の衰退

明治時代の初めに、彦根城がさまざまな役割を失っていったのと同時に、彦根城を核と

²¹² 大阪高等裁判所・財団法人建築研究協会編『彦根市指定文化財 旧西郷屋敷長屋門修理工事報告書』、大坂高等裁判所、1997年。

²¹³ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、162頁。

²¹⁴ 中村直勝監修『彦根市史』下冊、彦根市、1964年、141頁。

²¹⁵ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、145頁。

して形成された彦根城下町も衰退していった。

明治4年（1871）の廃藩置県は、日本国内の政治体制を大きく変える政策であるとともに、日本国内の城下町の機能やかたちが大きく変わる画期となった。

彦根でも、明治4年（1871）の廃藩置県によって多くの士族が職を失い、さらに、明治9年（1876）の秩禄処分によって士族に家禄を支給する制度が廃止されると、士族の困窮が深刻化し、新たな収入の途を求めて彦根を離れる者が少なくなかった。江戸時代の彦根城下町には、約2万人の武士人口と、約1万6、7000人の町人・寺院人口があった²¹⁶。ところが、明治時代初期に多くの士族が彦根から転出した結果、明治10年代初めには、彦根市街地の士族人口が9、569人に激減した²¹⁷。

図15は、明治時代半ばに作成された彦根市街地の地形図である。この地図を見ると、彦根城の第2郭にあたる彦根町金亀の各所に桑畑のマークが記されている。また、彦根城第3郭の東部や西部にも桑畑のマークが記されている。これらの地域は、江戸時代には武家屋敷が建ち並んでいたところである。明治時代の初めに多くの士族が彦根から転出し、空き家となった武家屋敷が解体されて、桑畑に変わったことが、この地形図から読み取れ



図15 明治20年代の彦根市街地

注) 国土地理院発行地形図（旧図）。

²¹⁶ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻（通史編 近世）、彦根市、2008年、341頁。

²¹⁷ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、161頁。

る。明治14年（1881）3月15日付けの『淡海日報』において、彦根市街地では家屋の売却が増え、その買い手が近隣の農民であること、物価高により、士族たちが金禄公債を売却しても生活することができず、家や蔵を売り払って生活を維持しようとしていることが報じられている。明治時代前期の彦根市街地では、武家屋敷の売却、解体が進み、中心部の空洞化が急激に進行した。

また、明治時代の初めには、彦根市街地の平民人口も減少した。江戸時代の彦根城下町の町人・寺院人口は約1万6、7000人だったが、明治10年代初めには、彦根市街地の平民人口が12、360人に減少した²¹⁸。

4 小 括

幕末から明治維新にかけて、日本が大きく変わった。天下人と大名・旗本が日本各地を分割統治する統治体制のもと、武士が城や陣屋を中心に集住し、主君の家の当主と家臣の家の当主が主従関係を結び、法にもとづいて、軍事と政治を組織的に担うという江戸時代の統治のしくみが破綻し、天皇を頂点とする中央集権的な国家体制のもと、それまでの身分に関わりなく、有能な男性の個人が、天皇や政府から政治家あるいは役人に選ばれて、法にもとづき、政治・行政や軍事などを組織的に担うようになった。

このような国家の体制やしくみの変化にともなって、江戸時代には統治拠点だった城や陣屋がさまざまな役割を失い、多くの城や陣屋が解体されていった。また、城や陣屋を核として形成された城下町も、士族の転出などによって中心部が空洞化し、衰退の危機に見舞われた。彦根城や彦根城下町も、他の城や城下町と同様に、存続の危機に直面したのである。

²¹⁸ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、161頁。

第2節 近現代の彦根城

1 彦根城の解体中止

本節では、現在、彦根市のランドマークとして彦根市民に親しまれている彦根城が、明治11年（1878）にどのような経緯で解体中止が決まり、その後、どのように保存・活用されて現在に至っているのかを概観する。

明治11年（1878）9月、彦根城を管理していた陸軍省は、軍事施設として使用する見込みのない彦根城の解体を始めたが、その翌月に彦根地方を訪れた明治天皇が、随行員の大隈重信を介して、地元住民が彦根城の保存を望んでいることを知り、彦根城の解体を中止させ、その保存を命じた。

彦根城の解体中止を明治天皇に進言した人物については諸説あるが²¹⁹、大隈重信がその一人であることに間違いはない。『明治天皇紀』によれば、明治天皇に随行していた大蔵卿の大隈重信が、滋賀県令籠手田安定の依頼により、県営彦根製糸場と滋賀県立彦根伝習学校を視察したついでに彦根城に立ち寄ったところ、「陸軍省が城内建築物を棄碎するを目撃して之を惜しみ、還りて具奏」したので、明治天皇が宮内卿の杉孫七郎を通じて右大臣の岩倉具視に彦根城の保存を命じたという²²⁰。

彦根城の保存に深く関わった大隈重信は、のちにその時の思い出を新聞記者に語った。大正3年（1914）5月の『朝日新聞』に掲載された記事によれば、大隈重信は、維新前後に中山道から彦根城を遠望するたび、「一度は彼の天主閣に登臨して、井伊大老の壮図を偲び、且は江州湖上の風光を楽しみたいと念じて」いた。明治11年（1878）、明治天皇の行幸に随行していた大隈重信は、明治天皇が彦根城に近い犬上郡高宮村に宿泊した時、念願の彦根城に行くことにした。彦根市街地に入ると、何かの祭礼が行われているかのように、老若男女が城に向かって歩いていく。なかには、涙をうかべている老人もいる。多くの人たちが彦根城に集まる理由を尋ねてみると、彦根城の天守が明日から解体される予定であることがわかった。「曾ては一朝事ある其の時は君公の御前に罷り出て、天晴れ忠

²¹⁹ 明治天皇が坂田郡長沢村の福田寺に立ち寄った時、明治天皇の従妹にあたる同寺住職の妻から、彦根士族が彦根城の保存を望んでいることを伝えられたという説もある（中村直勝監修『彦根市史』下冊、142頁）。

²²⁰ 宮内庁編『明治天皇紀』第4、吉川弘文館、1970年、明治11年（1878）10月12日条・14日条。

勤を抽でやうと思つて、我等の祖先が三百年仰ぎ見た彼の天主閣も、最早再び仰ぎ見ることは出来ぬのであります」と痛々しく語る「旧藩士の至情に動かされ」て、大隈重信は、明治天皇に彦根城の解体中止を進言した²²¹。

彦根の士族たちにとって、彦根城は、「三百年間彦根藩士の魂をブチ込んで守護してきた」、「武士の魂の入れ物」だった²²²。彦根城の解体は、武士の魂が消し去られてしまうことに他ならず、武士のまちの歴史に幕を引くセレモニーだった。彦根城に集まった多くの士族たちの願いは、武士のまちの伝統を守るために、彦根城の解体を中止させることだった。その願いが大隈重信を介して明治天皇に届き、彦根城の解体を中止させることに成功したのである。明治天皇による彦根城の解体中止命令は、彦根の城下町としての伝統を途切れさせずに未来へ伝えた画期的な出来事だった。永久保存が決まった彦根城は、旧彦根城下が井伊家の城下町であったことを示すランドマークとしての役割を担い続けた²²³。



写真 1 1 解体を免れた彦根城の建物

注) 手前が佐和口多聞櫓（重要文化財）、その左上が天秤櫓（同前）、その右上が天守（国宝）。

2 陸軍省管轄下の彦根城

明治 1 1 年（1 8 7 8）に明治天皇の命令によって永久保存されることになった彦根城は、引き続き陸軍省の管轄下に置かれ、滋賀県に保存策の検討が命じられた。明治 1 2 年（1 8 7 9）1 2 月、滋賀県は、政府に対して、修繕費用の給付と彦根城の借用を申請した。滋賀県が彦根城を借用したいと考えたのは、城内を彦根士民の就産奨励に役立てて、

²²¹ 『朝日新聞京都附録』大正 3 年（1 9 1 4）5 月 1 6 日付、「隈伯と彦根城」（2）。

²²² 『朝日新聞京都附録』大正 3 年（1 9 1 4）5 月 1 7 日付、「隈伯と彦根城」（3）。

²²³ 例えば、明治 1 1 年（1 8 7 8）に彦根市街地に隣接する犬上郡平田村で開業した彦根製糸場において生産された生糸のラベルには、彦根のランドマークである彦根城のイラストが印刷された（彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第 3 巻、2 3 6 頁）。

その利益によって彦根城を永久保存する費用を捻出するためだった。政府は、滋賀県に彦根城の修繕費用として1624円31銭を給付し、城内に勸業施設を設けることを許可した²²⁴。彦根城博物館が所蔵する井伊家伝来古文書（近代文書）の「第壺号 彦根御料所 彦根城一件留」に、この時に設置された勸業施設が書き留められている。同資料によれば、陸軍省の管轄下に置かれていた時期の彦根城には、栽培試験場が設けられたほか、地元住民が彦根城の一部を借用して桑を栽培したり、茶店を営んでいた²²⁵。さらに、城内には製糸場も開設されていた²²⁶。

彦根城に設けられていた茶店については、当時の新聞記事にその様子が紹介されている。

江州彦根の金亀城は、曾て陸軍省の管轄たりし頃、同地市民より之を拝借して公園地となして偕楽園と名付け、同山天主閣近傍の眺望絶佳なる場所へは休息所を設けて自由に登山者の休憩所に充て、其脇には観月楼、月の家などいふ掛茶屋のありて、四季共に雅俗の客群衆する²²⁷

この記事によれば、陸軍省の管轄下にあった彦根城を地域住民が公園として借用し、そこを「偕楽園」と名付け、天守の近くの眺めの良い場所に、休息所を設けるとともに、「観月楼」や「月の家」という茶店を開いていたという。明治時代に撮影された彦根城天守の古写真を見ると、天守の南側に数棟の小屋がある²²⁸。これらの小屋が新聞記事に記された休憩所あるいは茶屋であるかどうか定かではないが、天守の近くに何棟もの小屋が建てられ、それらの小屋が、城山を登ってきた人たちが四季折々の湖国の絶景を楽しむ施設として活用されていたと思われる。

彦根城を公園として活用しようとする考えは、明治10年代から存在していた。明治23年（1890）1月11日付けの『日出新聞』に掲載された「彦根城」というタイトルの記事によれば、彦根城が陸軍省の管轄下に置かれた時から、地元の有志が彦根城を陸軍省から払い下げてもらい、公園として活用し、城を美しく保つ計画を立てていた。明治11年（1878）に明治天皇が彦根城の永久保存を命じてからしばらくして、彦根城を保

²²⁴ 蔭山兼治「資料紹介 井伊家伝来古文書（近代文書）『第壺号 彦根御料所 彦根城一件留』」、彦根城博物館編『彦根城博物館研究紀要』第30号、彦根城博物館、2020年、38頁。

²²⁵ 蔭山兼治「資料紹介 井伊家伝来古文書（近代文書）『第壺号 彦根御料所 彦根城一件留』」、41頁。

²²⁶ 蔭山兼治「資料紹介 井伊家伝来古文書（近代文書）『第壺号 彦根御料所 彦根城一件留』」、41頁・46頁など。

²²⁷ 『日出新聞』明治24年（1891）3月17日付記事。

²²⁸ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第10巻（景観編）、彦根市、2011年、68頁。

存するための費用が滋賀県に下賜され、彦根城保存の目途が立ったこともあって、地元有志が彦根城の払い下げを強く希望するようになったという。この新聞記事は、明治天皇が彦根城の天守に登ったとか、彦根城の保存費用として滋賀県に1500円が下賜されたとか、事実を正確に伝えていない箇所が散見されるが、地元の有力者たちが彦根城を景色を楽しむ景勝地として活用したいという考えを持っていたことを教えてくれる。

明治23年(1890)1月、滋賀県が犬上郡に、彦根城の扱いをどうするか、意見を求めた。犬上郡は、地元の有力者である武節貫治・小西鉄三・渡辺鐘次郎に検討を依頼した。武節らは、彦根城は、眺望が良く、樹木が繁茂する、他に類のない優れた景勝地なので、整備を加え、さらに美観を高めることを提案した。そして、彦根城を旧城主の井伊家の世襲財産にすることをあわせて提案した²²⁹。世襲財産とは、明治19年(1886)4月28日に公布された華族世襲財産法に定められた華族のみに認められた特殊な財産である。華族の家の継承者が代々伝えていくべき財産であり、所有者が自由に処分したり、債権者が強制執行の対象にすることが許されず、資産を長期間にわたって安定的に維持するのに適していた。井伊家当主の井伊直憲は、明治17年(1884)7月7日に華族令が制定された際、伯爵に列せられていた。

地元から彦根城所有を期待された井伊家当主の井伊直憲は、明治23年(1890)12月、滋賀県の中井弘知事に、彦根城の井伊家への払い下げを政府に働きかけてほしいと依頼した。井伊直憲は、その依頼を綴った書簡の中で、彦根城天守は、明治天皇の特別の命令によって保存が決まった経緯から、陸軍省からの払い下げが難しいのであれば、彦根城をいったん宮内省に移管して、天皇の財産を管理する宮内省から井伊家に払い下げてもらいたいと述べた。井伊家としては、入札によって一般人民に彦根城が払い下げられ、彦根城が破却されるような事態に至ることだけは避けたかったようである。彦根城を陸軍省から宮内省に所管替えすることは、一般人民への払い下げを阻止する最善の策だと考えられた²³⁰。明治23年(1890)1月11日付けの『日出新聞』でも、彦根城について、「一旦人民の手へ渡す時は却って永世保存の事覚束なかるべしとの懸念ありて」、近日中に宮内省が陸軍省より譲り受ける内々の動きがあると報じられている。彦根城を陸軍省から宮内省へ移管することが、彦根城を確実に保存するための方策であるとの関係者の間で考

²²⁹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第8巻(史料編 近代1)、彦根市、2003年、906～907頁。

²³⁰ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第8巻、907～908頁。

えられていたことが新聞記事からも確認できる。

3 宮内省管轄下の彦根城

明治24年（1891）2月、彦根城が陸軍省から宮内省に移管された。同年2月19日付けの『日出新聞』で、「今度皇宮附属地となりたる江州彦根の城廓は、一昨日、陸軍省より宮内省へ引継済となりたり」と報じられている。

明治24年（1891）7月27日、井伊直憲が滋賀県の大越亨知事に彦根城の借用を申請した。

彦根城拝借願

宮内省御所轄滋賀県下近江国彦根之城郭ハ、拙者祖宗之経営以来数百年間住居候ヒシ所ニテ、尤縁故モ有之候間、可成旧観ヲ損セサル様保管致度候ニ付、右城郭并附属地共一円、拙者へ拝借被仰付候様致度、何卒特別之御詮議ヲ以御許可相成候様、其筋へ御執達被成下度、此段相願候也

明治廿四年七月廿七日

伯爵 井伊 直憲

滋賀県知事 大越 亨（亨） 殿²³¹

この書類によれば、井伊家は、彦根城借用の理由を、井伊家歴代が数百年にわたって彦根城で暮らし、彦根城に最もゆかりの深い家だからと説明している。そして、彦根城の借用が許された暁には、「なるべく旧観を損ぜざる様保管」することを約束している。同年10月14日に宮内省から滋賀県に対して、明治24年（1891）10月から30年間、彦根城を井伊家に無償貸与することが通知され²³²、翌年の2月1日、井伊直憲から滋賀県の大越亨知事に、明治24年（1891）10月から明治54年（1921）9月までの30年間にわたって彦根城を借用する証書が提出された²³³。

彦根城が陸軍省から宮内省に移管される際、ちょっとしたトラブルが発生した。明治24年（1891）3月17日付けの『日出新聞』によれば、彦根城が宮内省に移管されると、「本月二十八日限り民有の建物を引き払わしめ、同日限り城山に登ることを禁ぜられた

²³¹ 蔭山兼治「資料紹介 井伊家伝来古文書（近代文書）『第壱号 彦根御料所 彦根城一件留』」、42頁。

²³² 『日出新聞』明治24年（1891）10月17日付記事。

²³³ 『日出新聞』明治25年（1892）2月3日付記事。

るにより、同地市民は何れも余波を惜しみ、最早城山の見納めなりとて、二、三日前より家を挙げ、三々五々隊をなして城山へと昇るもの陸続引きもきらず、掛茶屋は申すまでもなく、近傍の露店までがなかなかの賑わい」となる事態が発生したという。

しかし、実際には、城山への入山は禁止されなかった。明治27年（1894）5月29日付けの『日出新聞』に、「御料地なる彦根城は是まで井伊家へ御貸下になり、犬上郡役所に於いてこれを管理し、公衆の参観を許し」と報じられている。明治24年（1891）10月に井伊家が借用した彦根城は、犬上郡が管理を担当し、公衆の参観が許されていたのである。井伊家が借用した彦根城では、明治25年（1892）2月15日から3月25日まで、天秤櫓と西の丸三重櫓において犬上郡物産共進会が開催された²³⁴。

彦根城が宮内省の管轄下に置かれ、井伊家が借用した後も地元住民による活用が続いたのは、井伊家が彦根城を借用するに至った背景の一つに、彦根城を公園とし、景観を楽しむ場所として活用したいという地元住民の思いがあったからである。宮内省が管轄することになった彦根城を井伊家が借用することが決まった時、「彦根の人民は喜ぶこと一方ならず、同城山の天主閣と三層櫓の間なる空地に於いて眺望尤も佳なる処を撰び、数百の桜樹を植え付け寄附」したいという相談が行われ²³⁵、彦根城の美観を高めようとする動きが起きた。

しかし、彦根城の景観を大きく変えることは難しかった。それは、井伊家が彦根城の借用にあたって、次のような約束をしたからである。

一、御料地内ニ於テ自今後地形ノ変換、或ハ建物模様替等ヲ要スル節ハ、絵図相添願出御許可ノ上ニ無之テハ、着手仕間敷候事

一、城櫓・土蔵・橋梁・石垣・柵矢来、其他ノ諸建物及道路・堤塘共拝借中修繕、又ハ草刈り掃除等ノ義ハ、悉皆拝借人ニ於テ負担シ、破損ニ至ラサル様保護可仕候事

一、御料地内ニアル立木竹等ハ、猥ニ伐採シ、又ハ使用致間敷候事²³⁶

これは、明治25年（1892）に井伊家が滋賀県に提出した「彦根御料地拝借証書」に定められた規定である。御料地内の地形を変えたり、建物の模様替えを行う際には、事前に絵図を添えて計画を示し、許可を受けること、城内の各種施設が破損しないよう保護

²³⁴ 蔭山兼治「資料紹介 井伊家伝来古文書（近代文書）『第壱号 彦根御料所 彦根城一件留』」、51頁。

²³⁵ 『日出新聞』明治24年（1891）10月17日付記事。

²³⁶ 蔭山兼治「資料紹介 井伊家伝来古文書（近代文書）『第壱号 彦根御料所 彦根城一件留』」、46～47頁。

につとめること、御料地内の立木や竹を伐採しないことをそれぞれ約束している。明治24年（1891）7月27日に井伊家から滋賀県に提出された彦根城借用願に明記された「なるべく旧観を損ぜざる様保管」する方針に沿って、彦根城の管理が行われることになった。

4 井伊家に下賜された彦根城

明治27年（1894）5月、彦根城が井伊家に下賜された。彦根城が陸軍省から宮内省へ移管された時には、井伊家への払い下げが予定されていたが、結果的には、払い下げではなく、無償の下賜となった。

彦根城が井伊家のもとに戻ると、彦根城の活用がさらに進んだ。明治27年（1894）12月1日付けの『日出新聞』によれば、同年11月23日から4日間、西の丸三重櫓で日清戦争戦利品の展覧会が催された。同じ期間に、天秤櫓では彦根高等尋常小学校や女学校の生徒たちの学芸奨励会出品作品展が開催された。前者の催しには、有料観覧客18,211人のほか、赤十字社々員302人、中・小学生や女学校生徒など12,633人がそれぞれ無料で観覧した。後者の催しには9,752人の観覧者が訪れ、近年にない盛会だった。

翌年の明治28年（1895）4月20日から6月8日にかけて、彦根城で彦根物産・古器物展覧会が開催された。天秤櫓が物産陳列場所とされた。彦根地方の物産を三種類に分類し、第一類を絹糸織物、第二類を綿麻織物、絹縮雑織、第三類を参考品とし、滋賀県内で製造された近江縮緬布・木綿縮・蚊帳などが参考品として出品された。楽器・屏風・書画などの古器物は天守に陳列された。井伊家は、ここに、源頼朝が八幡宮へ奉納したといわれる名笛、曾我蛇足が描いた山水画、狩野永徳が描いた猿猴群遊図の六曲屏風などを出品したという²³⁷。

旧彦根藩士の松浦果は、この展覧会のパンフレットである「彦根物産・古器物展覧会案内記」で、彦根城を次のように紹介した。

天主閣ハ三層にして高く山巔に聳え、其昔京極高次が大津に築きたりしを爰に移せしにて、即旧の本丸なり。登臨すれハ、全市街は言ふに及ハズ、東ハ石田三成が城跡たる佐和山に対し、其麓にハ大洞弁天祠、井伊神社、龍潭寺、佐和山神社、愛宕山寺、

²³⁷ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第8巻、909～910頁。

千代神社等の神社仏閣相連り、東南には鞍掛山・兎山、西南には荒神山、北にハ物生山・礪山等の諸山あり。凡そ等ハ近く目に触るゝものにして、遠く望めハ観音寺・靈山・伊吹・比叡等の高山東南より北西に亙り、殊に西北の方にハ、近くハ内湖、遠くハ琵琶の大湖を望み、湖中には沖、奥、多景、竹生諸島の波上に浮へるあり。白帆の風を孕み、汽船の煙を挽く等、湖山の風色一望の下に湊り、心を爽にし、意を樂ましむるのみならず、建築の雄壮にして、土地の形勝に拠るを見バ、当時武家の盛なりしを追想し、旧城主井伊氏の祖宗直政朝臣直孝朝臣兩代の武勲ハ更なり、先代直弼朝臣の此所より出て其一身を犠牲として開国主義を断行し今日世界に輝く文明の基を開きし偉勲に思ひ至り、今昔の感慨交々心頭に浮ひ来るへし²³⁸。

松浦果は、この文章で、彦根城観覧のポイントを二つ指摘している。一つは、一つ目の下線部の文章で言い表されているように、湖国の風景を楽しむことができる場所であること。もう一つは、二つ目の下線部で表現されているように、江戸時代に武士が活躍したことを示す場所であり、井伊直政・直孝の武勲、井伊直弼の開国の偉業をこの城が伝えていると松浦は主張した。

近代の彦根城が、湖国の絶景を楽しめる場所であるとともに、井伊家の歴史を伝える場所でもあるという見方は、その後も地元で引き継がれた。昭和11年（1936）度版の『彦根町勢要覧 附観光案内』という冊子で、彦根城が次のように紹介されている。

彦根城は彦根山（別名金亀山）上に在り。慶長五年、井伊氏藩祖直政、石田三成の居城佐和山城に封ぜられ、其子直孝、遺志を承け、彦根山に築城の工を創む。十一年本丸天守閣成り、元和八年城廓略ぼ完成す。初め此処に築くや、往時の寺門を旧に依りて存す。相伝ふに、白河上皇通御の旧を存すと。即ち本丸の楼門之なり。天守閣は三層にて、京極高次大津城の天主なり。石壁は外見粗なるも、実用を主としたる所謂牛房積なり。天秤櫓は秀吉の創築にして、内藤信成の旧城なりし長浜城の楼門なり。三百年間井伊氏の居城にして、現に彦根公園なり。

天主閣に攀れば、太湖の展望を此処に聚むるの觀あり。特に中秋の明月、晩春の残雪の壯觀に至っては近畿に冠たり。畏くも 大正天皇東宮におはせし頃、玉歩を駐めさせ給ひ、又英国コンノート殿下、次で同国皇太子殿下特に其風光を御觀賞遊ばされたり²³⁹。

²³⁸ 傍線は筆者が引いたものである。

²³⁹ 傍線は筆者が引いたものである。

1つ目の下線部で彦根城が江戸時代を通じて井伊家の居城であったことが示され、2つ目の下線部で彦根城が湖国の絶景を楽しむ場所であることが説明されている。

5 文化財としての保護

大正4年（1915）4月23日、彦根城が井伊家から彦根町に貸し渡された。これは、前年の2月28日に、彦根町会の決議にもとづいて彦根町長が井伊家に貸与を依頼したことによる。この時、彦根町は、彦根城を「衆人行楽の勝地となり、ひいて彦根町繁栄の一助に供せん」がため借用したいと述べ、あわせて建物の外観を改めることなく保存の措置を施すことを条件とした。井伊家は、竹木伐採や鳥獣狩猟を禁止すること、施設が破損した時には町費で修繕すること、警備のための常住守衛を雇うことなどを条件として、彦根町の依頼を受け入れた²⁴⁰。

ところが、この約束は忠実には守られなかった。大正15年（1926）6月29日付けの『朝日新聞』の記事によれば、彦根城の借用契約の更新について、井伊家と彦根町との間でトラブルが発生した。井伊家の言い分が次のように報じられている。

彦根町が原形を失はざることを条件とせるに拘らず、天主閣裏手の観音橋の如きは腐朽のまゝに打捨て、渡橋に危険を来し、鉄条網を張って通行を禁じてをり、そのほか天主閣の傍に勝手に建物を建設した、その他数へると枚挙し切れぬほど違約行為がある²⁴¹

この記事によれば、彦根城を借用している彦根町が、観音橋の破損を放置していることや、天守のそばに勝手に建物を建設するなど、数多くの契約違反を犯しているという。井伊家と彦根町の対立は、最終的に地元の有力者である浅見竹太郎元衆議院議員が仲介に入っておさまり、「井伊祖先の光輝を永く記念して一般の行楽」に彦根城を活用してもらうため²⁴²、彦根町による彦根城の借用が継続されることになった。

昭和時代に入ると、彦根城を文化財に指定しようとする動きがおきた。

日本国内では、明治時代後期から大正時代前期にかけて、文化財の破壊が問題視されるようになり、貴重な文化財を守るため、大正8年（1919）に史蹟名勝天然記念物保存

²⁴⁰ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻（通史編 近代）、彦根市、2009年、589頁。

²⁴¹ 『朝日新聞』大正15年（1926）6月29日付記事。

²⁴² 『朝日新聞』大正15年（1926）6月29日付記事。

法、昭和4年（1929）に国宝保存法がそれぞれ制定された。文化財に指定されると、その資産価値が高まるだけでなく、施設の修繕を行う際に国からの補助金を得られるなどの利点があることから、昭和5年（1930）、彦根町は、「幕末の偉人井伊直弼大老の居城であった彦根城」の史跡指定を考え始め、まずは彦根高等女学校の史学教諭に彦根城の歴史をまとめさせた²⁴³。同年11月28日に文部省の嘱託二名による調査が行われた²⁴⁴。その調査結果は、「城址を史蹟保存区域として天守閣は国宝に指定の価値が十分あると折り紙をつけ」られ、「所有主の井伊伯さへ諒解すれば所定の手続きをとること」ができるという高評価だった。

ところが、彦根城を所有する井伊家が、文化財指定の申請を「当分見合せて頂きたい」と回答した。彦根町の吉田助役は、その理由を、「指定されると町や井伊家で勝手に修繕したり手をつけることができ」なくなったり、「指定されると取り上げられるものと考え違いをしておられるかも知れない」と推測し、彦根城が文化財指定を受けられないことによる宣伝面でのマイナスを心配した²⁴⁵。

文化財指定が彦根城を往時の姿のまま永く保存するために必要な措置であると考えた滋賀県は、昭和8年（1933）2月9日、県の学務部長から彦根町に対して、彦根城の管理に十分注意するよう指示したうえで²⁴⁶、文部省に国宝保存委員による城郭建造物の再度の实地調査を求めた²⁴⁷。

その後、戦争の激化により、彦根城の文化財指定は、第二次世界大戦後に持ち越された。昭和19年（1944）に井伊家から彦根市に寄贈された彦根城は、昭和25年（1950）に制定された文化財保護法にもとづいて、昭和26年（1951）に天守や櫓が重要文化財、玄宮楽々園が国の名勝に指定され、天守は翌年に国宝になった。昭和31年（1956）には、彦根城の中堀より内側のエリアに埋木舎をあわせた範囲が特別史跡に指定された。

平成4年（1992）には、彦根城が世界文化遺産の暫定一覧表に記載された。

²⁴³ 『京都日出新聞』昭和5年（1930）9月20日付記事。

²⁴⁴ 『朝日新聞滋賀版』昭和5年（1930）11月26日付記事。

²⁴⁵ 『朝日新聞滋賀版』昭和6年（1931）1月11日付記事。

²⁴⁶ 『朝日新聞滋賀版』昭和8年（1933）2月10日付記事。

²⁴⁷ 『朝日新聞滋賀版』昭和8年（1933）3月10日付記事。

6 小括

江戸時代に統治拠点としての役割を担った彦根城は、明治時代初めに日本の国家体制が大きく変わったことにともない、政治拠点としての役割も、軍事拠点としての役割も失い、消滅の危機に直面した。しかし、江戸時代に武士が統治の役割を担った歴史を示す彦根城の解体を惜しむ彦根士族たちの思いを明治天皇が受け入れ、彦根城の解体を中止させた。彦根城は、彦根が井伊家の城下町であったことを伝えるランドマークとして、永久保存されることになったのである。

明治天皇は、滋賀県に彦根城の保存を命じ、滋賀県は、彦根城に勸業施設を作らせ、その利益によって彦根城を維持管理しようと考えた。しかし、民間の利用を野放しにすると彦根城の姿が大きく変わる恐れがあったことから、彦根城の旧観を維持するため、かつて彦根城主をつとめた井伊家の協力が求められた。その結果、明治27年（1894）に彦根城が井伊家に下賜されるに至った。昭和19年（1944）に井伊家が彦根城を彦根市に寄付するまで、彦根城はふたたび井伊家の城としての歴史を歩んだ。

彦根城は、明治時代のかかなり早い時期から、多くの人たちが湖国の絶景を楽しむ行楽地としての利用が行われていた。大正4年（1915）に井伊家から彦根城の管理を任された彦根町は、彦根城を観光地として活用して、彦根町を繁栄させようと考えたが、井伊家との間で彦根城の姿を大きく変えないことを約束し、彦根城の保存に努めることになった。江戸時代の歴史を伝える文化財としての保存と観光地としての活用のバランスをどのようにしていくのかということが、昭和19年（1944）以降に彦根城の所有者となった彦根市の大きな課題となった。

第3節 彦根市街地の復興

1 近代の波を乗り越えた城下町

江戸時代には、日本国内に約200の城や陣屋が築かれ、城や陣屋を中心に城下町が形成された。明治時代に入ると、多くの城や陣屋がその役割を終えて取り壊され、城下町が衰退した。しかし、城下町の衰退を食い止めるため、さまざまな復興策が講じられた結果、多くの城下町が消滅の危機を乗り越え、現在に至るまでそれぞれの地域の中心市街地として存続している。

近代における城下町の変貌については、1970年代から80年代にかけて、矢守一彦氏などの歴史地理学の研究者によって、城や武家屋敷地が、陸軍駐屯地、官公庁、学校、公園、神社など、多様な姿に変化したことが明らかにされた²⁴⁸。21世紀にはいると、本康宏史氏による金沢をフィールドとした研究成果がまとめられ²⁴⁹、城下町から軍都へというシェーマで近代における城下町の復興をとらえようとする機運が高まった。しかし、尼崎をフィールドに、近代における武家地の変化を調査した岩城卓二氏が指摘するように、軍都にも県都にもならなかった城下町が少なくない²⁵⁰。近代日本における城下町の変貌のあり方を類型化し、主要な復興策を見極めるには、さらなる事例研究の蓄積が必要である。

本節では、江戸時代を通じて徳川宗家を支える重要な政治的立場にあった井伊家の城下町であり続け、その後、尼崎と同様に軍都にも県都にもならなかった旧彦根城下に焦点をあてて、明治時代に彦根城下町が彦根地方の中心市街地としてどのように復興したのかを概観する。

2 彦根市街地の人口推移

本章の第1節で述べたように、彦根市街地では、明治時代初期に深刻な人口減少が起き

²⁴⁸ 矢守一彦「明治以降における城下町プランの変容」(藤木利治・矢守一彦編『城と城下町 生きていく近世10』、淡交社、1978年)、浮田典良「明治期の旧城下町」(藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』、柳原書店、1989年)。

²⁴⁹ 本康宏史『軍都の慰霊空間—国民統合と戦死者たち—』(吉川弘文館、2002年)。

²⁵⁰ 岩城卓二「武士と武家地の行方」(高木博志編『近代日本の歴史都市—古都和城下町—』、思文閣出版、2015年)。

た。江戸時代には、彦根城下町に、約2万人の武士人口と、約1万6、7000人の町人・寺院人口があったが、明治10年代初めには、士族人口が9,569人、平民人口が12,360人に減少した。

ところが、明治30年代から、彦根市街地の人口が増加に転じた。明治22年（1889）の町村制施行により、旧彦根城下の大部分が彦根町となった。彦根町に本籍のある人口は、表7に示されているように、明治38年（1905）には19,439人だったが、大正4年（1915）には19,719人と増加に転じ、大正14年（1925）は20,381人に増加し

た。本籍が彦根町にあるかどうかに関係なく、彦根町に実際に住んでいる現住人口についても、表5に示されているように、明治38年（1905）は20,654人、大正4年（1915）は23,166人、大正14年（1925）は24,093人と増加し続けている。

ところで、表7に示されている彦根町の各年次の本籍人口と現住人口を比べてみると、いずれも本籍人口より現住人口の方が多い。これは、本籍が他の場所にある人が彦根町でたくさん暮らしていること、すなわち、彦根町への移住が多いことを示している。この点を、大正4年（1915）を例に確認してみよう。表8に示されているように、この年に彦根町に本籍を置き

表7 彦根町における人口の推移

(単位 人)

| | 明治38年 (1905) | 大正4年 (1915) | 大正14年 (1925) |
|------|-----------------|----------------|-----------------|
| 本籍人口 | 19,439 | 19,719 | 20,381 |
| 現住人口 | 20,654 | 23,166 | 24,093 |

注)『滋賀県統計書』をもとに作成。

表8 大正4年の彦根町における出入人口

(単位 人)

| 他出 | | 入寄留 | |
|---------|-------|----------|-------|
| 自郡内他町村へ | 366 | 自郡内他町村より | 1,462 |
| 自県内他市郡へ | 1,714 | 自県内他都市より | 4,293 |
| 他府県内へ | 2,096 | 他府県より | 2,281 |
| 朝鮮へ | 80 | 合計 | 8,036 |
| 台湾へ | 58 | | |
| 樺太へ | 17 | | |
| 外国へ | 184 | | |
| その他 | 74 | | |
| 合計 | 4,589 | | |

注)『滋賀県統計書』(大正4年)の「63. 出入人口」をもとに作成。

ながら他の市町村で暮らしていた人口（他出入口）は4, 589人である。それなりの数の住民が彦根町から流出していた。しかし、他の市町村に本籍を置きながら彦根町で暮らしていた人口（入寄留人口）が8, 036人あり、入寄留人口が他出入口を大きく上回っている。表8の他出先と入寄留元の人数を比べてみると、彦根町のある犬上郡内からの入寄留数と滋賀県内からの入寄留数がそれぞれ他出数を大幅に上回っており、彦根町は、近隣市町村の人口を吸収していることがわかる。また、他府県の入寄留数と他出数についても、入寄留数の方が多く、他府県からの人口流入も看過できない。

彦根町は、大正時代には、他市町村から多くの人口を引き寄せる市街地に変わっていたのである。

明治時代半ばに彦根町の人口が減少から増加に転じたのは、明治時代前期に彦根市街地において新たな時代を担う人材の育成や新たな産業の振興がはかられたことが大きい。続いて、続いて、彦根市街地復興の原動力となった教育と経済の動きについて論じる。

3 教育施設の整備

明治時代の日本では、新たな時代を担う人材を育成するため、学校教育制度が整備された。彦根市街地においても学校教育が重視されたことは言うまでもない。彦根地方では、日本初の本格的な学校教育制度を定めた学制頒布の1か月前、明治5年（1872）7月に「犬上県内小学建営説諭書」が出され、小学校の開校が奨励された²⁵¹。このように、彦根地方は、教育に対する意識が高い場所だった。

彦根市街地においては、明治9年（1876）、小学校卒業者を対象とした二つの中等教育施設が開校した。その一つが金亀教校であり、もう一つが彦根学校である。

金亀教校は、滋賀県内の浄土真宗系寺院の子弟を対象に設立された学校である。

明治8年（1875）、本願寺（西本願寺）は、明治維新の新たな社会状況に対応するため、仏教教育に加えて、普通教育にも乗り出すことにした。翌年10月、本願寺一派の学事体系を定めた「学制」を公布した。この制度では、京都に大学校（現在の龍谷大学）を置き、全国の各府県に小学校を設置することになっていた。

滋賀県では、僧侶有志が、本願寺一派の「学制」公布に先駆けて、明治9年（1876）

²⁵¹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻（通史編 近代）、彦根市、2009年、204～205頁。

7月、教部省の規定にもとづき、僧侶のための学校を設置する許可を得て、彦根藩の廃止にともなって廃校となった藩校弘道館の校舎と付属地を買い取った。滋賀県教育掛の水原慈恩（犬上郡高宮村の円照寺住職）が中心となって学校開設の準備を進め、同年10月に開校した。校名は、彦根城の別称である金亀城にちなんで、金亀教校とした。



写真12 金亀会館

注) この建物は、現在、彦根市中央町にあるが、かつては彦根城第2郭にあり、藩校弘道館の講堂だった。明治時代に金亀教校の校舎となった。

創立当初の金亀教校は、仏教を専門に教える専門予科、中学2、3年程度の普通教育を行う普通下等科、小学2、3年程度の普通教育を行う普通予科の3部門に分かれていた。その後、明治32年（1899）に公布された中学校令（第2次）にしたがって金亀仏教中学となり、さらに、明治35年（1902）に本願寺が直営する第三仏教中学となった。そして、明治42年（1909）、親鸞聖人650回忌を記念して、学校が京都に移転し、平安中学校（現在の龍谷大学附属平安高等学校・中学校）になった²⁵²。

金亀教校が開校した同じ年に、江戸時代には彦根城第3郭に位置する内町の一つだった元川町において、彦根学校が開校した。彦根学校は、東京に移住していた旧藩主の井伊直憲、彦根士族の中心人物だった大東義徹や西村捨三らによって、当初、滋賀県北部の小学校の教員を養成する学校として設立準備が進められた。ところが、当時、民間で師範学校を設立することが認められておらず、すでに明治8年（1875）に大津に滋賀県師範学校が設置されていたことから、当面は小学校を卒業した生徒にさらに高度な教育を行う学校として開校し、士族と平民が共に学ぶ共立学校として運営された。

彦根学校は、開校翌年の明治10年（1877）に、当初のねらいに沿った滋賀県立彦根伝習学校となり、明治12年（1879）に滋賀県立彦根初等師範学校と改称された。彦根初等師範学校は、明治13年（1880）に彦根中学校、同年にさらに彦根公立中学校にかわり、明治19年（1886）に公布された中学校令（第1次）により、翌年、滋

²⁵² 創立一二〇周年記念誌編集委員会編『平安学園一二〇年記念誌』、平安高等学校・中学校、1996年。

賀県唯一の県立尋常中学校となった。

彦根公立中学校の生徒数は百数十人だったが、滋賀県立尋常中学校が開校した明治20年（1887）5月の生徒数は252人となり、さらに、同年8月に54人増え、全校生徒が300人を超えた。生徒数の増加により校舎が狭くなったので、明治21年（1888）に彦根城第2郭にあった家老屋敷跡で新校舎の建設が進められ、翌年に2階建ての西洋風の校舎が完成した。

この校舎の建設費は17,710円余りだったが、その約4割を井伊直憲や彦根士族からの寄付金で賄った。尋常中学校の校舎建設費をすべて地方税で賄おうとすると、滋賀県会で新校舎を県庁所在地である大津に移転すべきではないかという議論が起きる恐れがあるので、井伊家からの寄付金に加え、井伊家から彦根士族に下賜されていた授産金を校舎建設資金として寄付し、尋常中学校の大津移転を阻止しようとしたのである。

彦根の尋常中学校は、滋賀県内から集まった生徒が学ぶ中学校ではあったが、旧彦根藩主や彦根士族がその校舎建設に深く関わり、滋賀県内における彦根市街地の社会的地位を保つ役割が課せられていた。それゆえ、その後、滋賀県会において、彦根の尋常中学校が「士族の学校」と言われ、彦根城の第2郭に位置するこの学校が、系譜的には直接つながらない藩校弘道館の後身と見なされるようになった²⁵³。

なお、滋賀県立尋常中学校が開校した明治20年（1887）には、彦根城外堀沿いの外馬場町で、滋賀県初の女学校である淡海女学校が開校した。

彦根市街地は、明治時代以降、教育のまちだと認識されるようになった。

4 産業振興

明治時代前期の彦根市街地における最も深刻な問題は、士族の困窮だった。幕末の相次ぐ軍事動員によって財政が逼迫したため、明治時代に入ると、井伊家中の家禄が削減され、「今後生殖の方法を相考え、閑地には樹芸を勧め、遊手の者は工作を励み、日常尽力、地力を尽くし、生業相営」むことができるよう、自活の努力が命じられた²⁵⁴。しかし、明治4年（1871）の廃藩置県、明治9年（1876）の秩禄処分などによって、多くの士

²⁵³ 彦根東高等学校校史編纂委員会編『彦根東高百二十年史』、創立百二十年記念事業実行委員会、1996年。

²⁵⁴ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、125頁。

族が彦根で生活することが困難となり、別の場所に転出していったことは、前述の通りである。士族の個人的努力では問題解決は困難であり、組織的な対策が望まれた。

士族授産の方法として着目されたのが製糸業である。明治4年（1871）、彦根藩は、藩士に桑の栽培を奨励し、新たな収入の途を示したが²⁵⁵、それだけでは彼らの生活を立て直すことはできなかった。その後、明治8年（1875）頃から彦根の女性たちが群馬県の官営富岡製糸場に出稼ぎに行くようになり²⁵⁶、製糸業の担い手が彦根地方に増え始めたことなどを背景に、製糸業によって士族授産と彦根地方の産業振興をはかることになった。

明治9年（1876）、旧彦根藩士の武節貫治らが製糸工場の建設を計画し、建設資金の借用を国と県に申請した。政府は、その頃、鹿児島において士族の不満が高まっていたことから、西郷隆盛に共鳴する士族が少なくなかった彦根に資金を貸し出すと士族反乱に流用される恐れがあると考えたのか、武節らの製糸工場建設計画を認めなかった。しかし、滋賀県が、明治10年（1877）10月、彦根城下町近郊に位置する犬上郡平田村の家老下屋敷跡で、製糸工場の建設を開始した。明治11年（1879）4月に県営彦根製糸場が竣工し、同年7月から操業が始まった。この工場で生産された生糸は、三井物産を介してアメリカに輸出された。県営彦根製糸場は、その後、明治19年（1886）に旧彦根藩主井伊直憲の弟である井伊智二郎に払い下げられ、明治35年（1902）まで操業した²⁵⁷。

彦根製糸場に士族の娘が雇用され、士族授産の目的をある程度達成したが、それ以上の大きな意義は、彦根地方の経済発展に大きく寄与したことである。彦根製糸場の開業に触発され、近隣地域で製糸工場の建設が相次いだ。彦根市街地においても、明治16年（1883）に塚本製糸場が金亀町（彦根城第2郭）、明治20年（1887）に山中製糸場が西馬場町（彦根城第3郭）²⁵⁸、明治29年（1896）に中竹具汚名琵琶湖製糸場が彦根町中島（彦根城第3郭）に開業した²⁵⁹。これらの製糸工場が開業した場所は、江戸時代には武家屋敷が建ち並び、明治時代に武家屋敷が解体されて空き地あるいは桑畑に変わっていた場所である。

²⁵⁵ 中村直勝監修『彦根市史』下冊、彦根市、1964年、123～125頁。

²⁵⁶ 彦根市史編集委員会編『新終彦根市史』第3巻、228頁。

²⁵⁷ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、228～237頁。

²⁵⁸ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、238頁。

²⁵⁹ 中村直勝監修『彦根市史』下冊、328頁。

なお、彦根市街地においては、明治28年（1895）に門野留吉がバルブ・コックの製造を始め、その後、バルブ製造が盛んになった²⁶⁰。江戸時代以来の伝統産業である仏壇業についても、明治39年（1906）に彦根仏壇同業組合が結成され、組織的に品質の向上に取り組んだことなどから²⁶¹、仏壇製造が盛んになった。

こうして、彦根市街地に、ものづくりのまちという個性が付与された。

5 小 括

江戸時代初期に誕生した彦根城下町は、江戸時代を通じて、近江における軍事・政治の拠点であり続けた。ところが、明治維新において、彦根は、滋賀県における県都と軍都の地位を大津に譲った。しかし、士族の願いが認められて彦根城の保存が決まり、城下町としての伝統が維持された。そして、旧藩主や士族らの尽力によって、滋賀県における教育と経済の拠点として、その地位が守られた。

旧藩主や士族らによって彦根城第3郭に開校した彦根学校は、その後、滋賀県で唯一の尋常中学となり、彦根城第2郭の家老屋敷跡に移転した。藩校の校舎は、明治時代を通じて、浄土真宗系の僧侶たちが仏教学校として維持していたが、その仏教学校が京都に移転したこともあって、藩校の伝統は、藩校と同じ彦根城の第2郭に移転した尋常中学校とその後身校が引き継いだ。

滋賀県最初の近代的な製糸工場は、彦根城下町近郊の家老下屋敷跡に建設されたが、その製糸工場の開業に触発されて、彦根城の第2郭や第3郭の武家屋敷跡にいくつもの製糸工場が開業した。また、明治時代半ばには、彦根市街地において、のちに彦根の地場産業の一角を担うカラン・バルブ製造が始まった。江戸時代以来の彦根の伝統産業であった仏壇業も、同時期に同業組合が結成されて、その後、仏壇生産を発展させていった。

明治時代前期に進行した彦根市街地のドーナツ化現象は、彦根城内に学校や工場が設置されたことなどによって、その動きに歯止めがかけられた。そして、彦根市街地に、教育のまちという個性と製造業を中心とするものづくりのまちという個性が付与された。

²⁶⁰ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、387頁。

²⁶¹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻、381～382頁。

終章 持続可能なまちづくり

1 彦根城下町の移り変わり

彦根城下町は、17世紀初頭に彦根城の築城にともなって誕生した地方都市であり、江戸時代を通じて、軍事・政治などの拠点としての役割を果たした。当時、天下人から城を預けられた大名や旗本は国替えを命じられることが多かったが、徳川宗家を支える重要な立場にあった井伊家は、江戸時代を通じて、西国の反徳川の動きを抑え、いざという時には京都から天皇を避難させる役割を期待された彦根城の城主であり続けた。また、明治時代に彦根市街地の復興がはかられた際にも、井伊家は、本拠を東京に移していたにも関わらず、彦根町に隣接する犬上郡松原村に千松館と呼ばれる別邸を置き、教育施設の整備や産業振興に多額の資金を提供した。それゆえ、彦根市街地は、井伊家とゆかりの深いまちだと認識された²⁶²。

明治時代に入り、日本の国家体制が大きく変わるなか、統治拠点としての役割を終えた日本国内の城がいっせいに廃城となった。彦根城も明治11年（1878）に解体の危機に直面したが、井伊家を中心に武士が統治を担った江戸時代の歴史を伝える彦根城の保存を熱望した彦根士族たちの願いを明治天皇が聞き届け、彦根城が永久保存されることになった。彦根城の保存は、彦根市街地が井伊家の城下町としての伝統を受け継ぐ歴史都市としての道を歩むことを決定づけた、彦根の歴史の大きな画期だった。

明治時代において、軍事拠点、政治拠点という核を失った彦根市街地は、教育のまち、ものづくりのまちとしての歩みも始めたが、井伊家の城下町としての伝統を受け継ぐ歴史都市というまちの個性が最重要視され、その個性を保つ努力が重ねられてきた。そして、明治27年（1894）に井伊家に下賜された彦根城を、大正4年（1915）に彦根町が借用して、地域振興をはかるために観光地として活用するようになった。昭和38年（1963）にNHK大河ドラマの第1作として「花の生涯」が放映されると、そのドラマの主人公だった井伊直弼の評価が大きく変わり、井伊直弼に対する関心が高まり、その翌年の昭和39年（1964）に、彦根城に120万人もの観光客が訪れる花の生涯ブームが起きた²⁶³。この花の生涯ブームについて、当時、彦根市の助役をつとめていた夏原義蔵が、

²⁶² ²⁶² Kobayashi Takashi 「A Study on Improvement of the Local Image: Honor Recovery of Ii Naosuke」 (『IWRIS2020』、2020年)。

²⁶³ Kobayashi Takashi 「A Study on Improvement of the Local Image: Honor Recovery of Ii Naosuke」。



写真 1 3 花の生涯記念碑

注) 彦根市の金亀児童公園に所在。

新聞記者に、「明治ご維新以来、日の当らなかった彦根に、やっと春が訪れた感じです」と述べたように²⁶⁴、彦根の人たちは、ようやく彦根市街地が観光都市として認知されたと感じた。そのため、郷土の偉人である大老井伊直弼の業績を広く伝え、彦根市の全国的な知名度を高め、観光の発展に多大な貢献をしたとして、「花の生涯」の原作者の舟橋聖一に、彦根市で最初の名誉市民の称号を贈った²⁶⁵。

2 彦根市街地の変容

明治時代から昭和時代にかけて、彦根城の保存がはかられた一方で、旧彦根城下については、ゆっくりとしたペースで近代都市化していった。

明治時代には、士族の転出によって空き地となった武家屋敷地に製糸工場の建物が建設され²⁶⁶、小学校や官公庁、公共施設、銀行や百貨店など、洋風の建物が建設されていった²⁶⁷。彦根市街地の道路についても、明治22年（1889）の彦根駅開業にあわせて、郊外に位置する駅と彦根市街地とをつなぐ駅前通りが彦根城に向かって建設された。昭和時代に入ると、昭和15年（1940）に計画決定された都市計画道路の建設が進み、城下町の狭い道路が、自動車が双方通行できる道幅の広い道路に変わっていった²⁶⁸。昭和40年代前半には、彦根市街地の住居表示の変更が行われ、江戸時代以来の町名が新しい町名に変わっただけでなく、通りの両側に面する住居をひとつの町に編成する江戸時代の両側

²⁶⁴ 『朝日新聞』昭和39年（1964）12月17日付け記事。

²⁶⁵ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第12巻、便覧・年表、彦根市、2013年、50頁。

²⁶⁶ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻（通史編 近代）、彦根市、2009年、240～241頁。

²⁶⁷ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第10巻（景観編）、彦根市、2011年、230～244頁。

²⁶⁸ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第10巻、219～226頁。

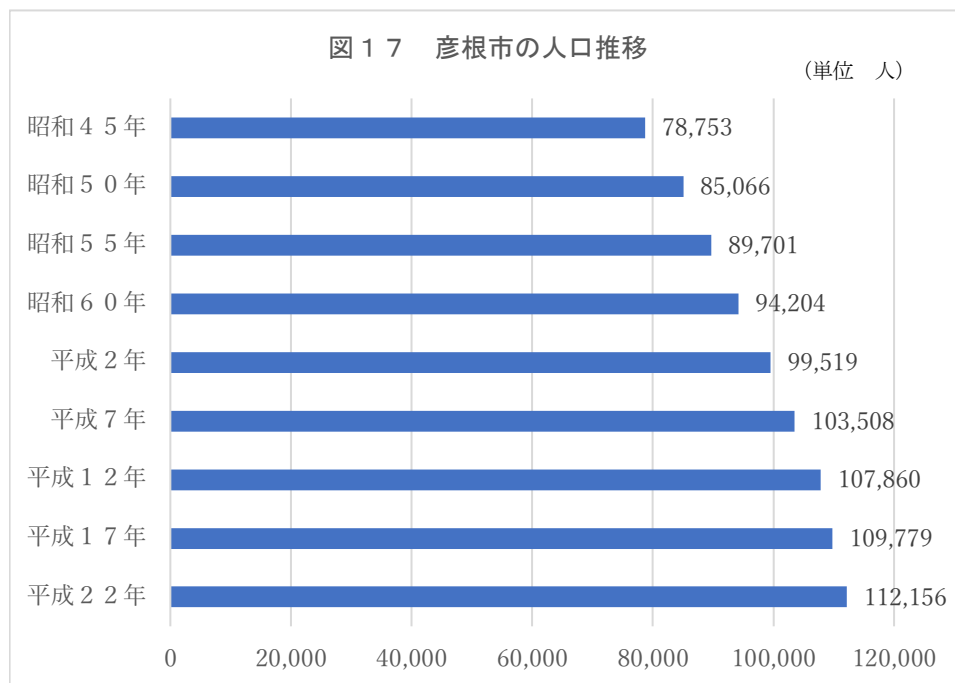


図 1 6 町名変遷図

この図は、『新修彦根市史』第 1 0 巻（景観編）の 1 2 0 頁に掲載された「旧彦根城下町付近の町名変遷図の一部」に掲載したものである。赤色が江戸時代の町名と町境、緑色が現在の大字の名称と字界である。道路を字界とする城町一丁目に再編成された旧町は、桶屋町を除くと、いずれも他の大字に取り込まれたところがある。住居表示の変更によって、旧来の町民の結びつきが分断されてしまったことがわかる。

町がなくなり、街路に囲まれたエリアをひとつの町に編成する街区が誕生した²⁶⁹。

高度経済成長期以降、彦根市全体では、人口が増加し続けた²⁷⁰。図 1 7 は、国勢調査のデータをもとに、彦根市の人口推移をまとめたものである。昭和 4 5 年（1 9 7 0）に 7 8, 7 5 3 人だった彦根市の人口は、その後、増加し続け、平成 2 2 年（2 0 1 0）には 1 1 2, 1 5 6 人となった。彦根市の人口は、昭和 4 5 年（1 9 7 0）以降、4 0 年間で



注) 国勢調査のデータをもとに作成。

²⁶⁹ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第 1 0 巻、1 2 2 ～ 1 2 3 頁。

²⁷⁰ 小林隆「語り部たちのまなざしー彦根市民の伝承活動を素材としてー」(『神戸大学史学年報』第 1 1 号、1 9 9 6 年)、7 3 頁。

33,403人、約4割も増加したのである。

この時期、彦根市街地のまちなみが、旧彦根城下の南端を流れる芹川を越えて南に拡大した。多くの住宅地や商業施設が建ち並ぶようになった芹川と犬上川にはさまれたエリアに、さまざまな公共施設が建設された。昭和56年（1981）に彦根市福祉保健センター（平田町）、平成9年（1997）にひこね市文化プラザ（野瀬町）、平成14年（2002）に彦根市立病院（八坂町）がそれぞれ開設された。

しかし、同じ彦根市内でも、地域によって人口の変化の様子が大きく異なっていることに注意する必要がある。彦根市内の多くの地域では、人口が増加しているものの、人口が減少し、高齢化が進んでいる地域がある。

一つは、彦根市の北東部に位置する山間部である。高度経済成長期以降、急激な過疎化が進み、二つの集落が無人となった。その他の集落についても、集落を離れる住民がみられた。これらの山間部の集落では、住み慣れた家屋を残して平野部の新興住宅地へ引っ越し、昼間だけ山仕事や畑仕事に戻ってくるという人が少なくない。ほとんどの住民が老人会に所属しているという集落もある。

山間部と同様に過疎化・高齢化が進んでいるのが彦根市南西部と旧彦根城下である。とくに、旧彦根城下の過疎化・高齢化は深刻である。

表9は、『彦根市統計書』をもとに、彦根市内の各学区の昭和55年（1980）と平成17年（2005）の世帯数と人口を比較したものである。彦根市全体では、この25年の間に、世帯数については、26,578世帯から39,109世帯へと約1.5倍に増え、人口についても、89,554人から107,952人へと約1.2倍に増えた。

これに対して、旧彦根城下にあたる城東学区と城西学区については、人口の落ち込みが激しい。両学区の昭和55年（1980）の人口の合計が17,492人であるのに対し、平成17年（2005）の両学区の人口の合計は13,697人であり、昭和55年（1980）の合計人口の約8割に落ち込んでいる。

城東学区と城西学区のうち、昭和55年（1980）から平成17年（2005）にかけて、世帯数と人口の両方が減少している城東学区について、『彦根市統計書』をもとに、平成17年の年齢別人口をまとめたのが表10である。3つの年齢階層のうち、65歳以上の割合、すなわち、高齢化率は26.4%であり、城東学区は、高齢化率が21%以上の超高齢社会にあたる。同年の彦根市全体の高齢化率が18.3%であり、彦根市全体では、高齢化率が14%から21%に収まっている高齢社会であることから、城東学区にお

いては、彦根市の他の学区に比べて、高齢化が深刻であるといえる。

表9 彦根市の世帯数と人口(学区別)

| < 昭和55年 > | | | < 平成17年 > | | |
|-----------|--------|--------|-----------|--------|---------|
| | 世帯数 | 人口 | | 世帯数 | 人口 |
| 城東 | 3,517 | 10,906 | 城東 | 3,453 | 8,215 |
| 城西 | 2,226 | 6,586 | 城西 | 2,281 | 5,482 |
| 城南 | 3,442 | 11,158 | 城南 | 3,774 | 9,943 |
| 城北 | 1,601 | 4,070 | 平田 | 2,679 | 6,486 |
| 佐和山 | 2,019 | 6,232 | 城北 | 1,699 | 4,499 |
| 旭森 | 1,520 | 5,534 | 佐和山 | 3,195 | 8,470 |
| 城陽 | 1,595 | 6,137 | 旭森 | 3,357 | 9,800 |
| 金城 | 2,579 | 8,529 | 城陽 | 1,841 | 5,565 |
| 鳥居本 | 906 | 3,379 | 若葉 | 1,428 | 4,916 |
| 河瀬 | 1,886 | 6,816 | 金城 | 4,299 | 11,429 |
| 亀山 | 571 | 2,317 | 鳥居本 | 1,099 | 3,163 |
| 高宮 | 1,615 | 4,979 | 河瀬 | 2,434 | 7,126 |
| 稲枝東 | 1,451 | 5,624 | 亀山 | 947 | 3,060 |
| 稲枝北 | 695 | 3,131 | 高宮 | 2,406 | 6,182 |
| 稲枝西 | 955 | 4,156 | 稲枝東 | 2,357 | 7,178 |
| 総数 | 26,578 | 89,554 | 稲枝北 | 911 | 3,018 |
| | | | 稲枝西 | 949 | 3,420 |
| | | | 総数 | 39,109 | 107,952 |

注) 昭和55年(1980)のデータは『彦根市統計書』(昭和56年版)、平成17年(2005)のデータは同書(平成17年版)より。平田学区は城南学区から、若葉学区は城陽学区からそれぞれ分かれた学区。なお、彦根市北東部の山間部を含む鳥居本学区で人口が減少しているものの、世帯数が増えているのは、鳥居本学区において単身世帯が増えていることに加え、鳥居本学区の平野部で新興住宅地の開発が進んだことによるものと推測される。

表10 平成17年における年齢別人口

| | 城東学区 | 総数 |
|--------|-----------------|------------------|
| 0～14歳 | 1, 025人(12. 5%) | 16, 887人(15. 6%) |
| 15～64歳 | 5, 025人(61. 2%) | 71, 354人(66. 1%) |
| 65歳以上 | 2, 105人(26. 4%) | 19, 708人(18. 3%) |

注)『彦根市統計書』(平成17年版)より。

旧彦根城下では、過疎化の進行により、まちの景観が変わりつつある。格子窓の家並みが両側に続いていた路地に空き地が目立ち、空き地が駐車場に変わったところが少なくなっている。若い世代が郊外の新興住宅地へ移り、高齢者だけが旧彦根城下に残っている世帯が多く、高齢者がなくなると、家屋を取り壊して、空き地にするケースが見られる²⁷¹。

3 旧彦根城下における歴史まちづくり

彦根市においては、高度経済成長期以降、多くの地域で人口が増加し、都市化が進んだが、その一方で、山間部や旧彦根城下などで過疎化・高齢化が進行するというアンバランスな地域の変化が生じた。平成時代に入ると、「平成の大合併」と呼ばれた地方自治体の再編成の動きが起こった。彦根市についても、近隣自治体との合併の動きが見られたものの²⁷²、結局、合併が見送られ、彦根市は、既存の枠組みでまちづくりが進められることになった。

彦根市においては、高度経済成長期以降、多くの地域で人口が増加し、都市化が進んだが、彦根城を中心とする旧彦根城下の町なみや、高宮・鳥居本という中山道の旧宿場町の町なみが、変わりつつあるなかで、比較的良好に残っていた。昭和50年代以降、歴史的景観を活かしたまちづくりへの関心が高まり、旧彦根城下を中心に、伝統的建造物の保存や町なみの保存修景が進められた²⁷³。

旧彦根城下については、昭和50年(1977)に、江戸時代以来のまちなみが残る

²⁷¹ 小林隆「語り部たちのまなざしー彦根市民の伝承活動を素材としてー」、73頁。

²⁷² 小林隆「自治体史の展望ー「平成の大合併」にあたってー」(京都民科歴史部会編『新しい歴史学のために』第250・第251合併号、2003年)、44～45頁。

²⁷³ 小林隆『『新修彦根市史』(第十巻 景観編)の試みー「市民の市史」をめざしてー」(地方史研究協議会編『地方史研究』第62号第4号、2012年)、40頁。

旧下魚屋町・旧職人町・旧上魚屋町の建物調査が実施された。残念ながら、当初の目的だった伝統的建造物群保存地区の指定には至らなかったが、これ以後、彦根市街地の歴史的景観が注目されるようになり、歴史的景観を活かしたまちづくりが進められていった。

平成6年（1994）、「ルネッサンス彦根一城と湖と緑のまちの新たな創生」をテーマとする彦根市都市景観基本計画が定められた。この計画をもとに、平成8年（1996）に快適なまちを創る景観条例が制定され、一定規模の建築行為を届出制にして、行政が市内の景観をコントロールしようとする姿勢を示した。

平成15年（2003）には、江戸時代の彦根城や彦根城下町の面影を伝える旧彦根城下の歴史的景観を守るため、150ヘクタールに及ぶエリアが都市景観形成重点地区に指定された。都市景観形成重点地区では、歴史的景観を守るため、新たに建物を建てる場合には、事前に行政に届け出ることを義務化し、それぞれの地区ごとに定めた基準に沿った審査と指導が行われることになった。

地区基準には、三つのポイントがあった。通常の建築などに対する一般基準と歴史的様式を保つ修景に対する修景基準、歴史的建造物の修復に対する保存基準である。一般基準については、建物の高さ、屋根の形態、色彩についての基準を設け、周辺環境との調和が求められた。歴史的建造物の修復などを行う際には、市の支援を受けられる制度も設けられ、歴史的景観を守りやすい体制が整えられた。

平成16年（2004）に景観法が公布されたことをうけて、彦根市では、平成19年（2007）に彦根市景観計画が策定された。この計画において、旧彦根城下は城下町景観形成地域とされ、建築物の高さ、屋根の形態、色彩の数値基準が設けられた。高さ基準については、城下町の要所から彦根城の天守を眺望できることを重視し、この地域の外縁部や隣接地に視点場を設けて、そこから天守を確実に眺望できるよう、建築指導を行うことになった。

平成20年（2008）、地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法）が公布された。彦根市は、歴史的風致維持向上計画策定に取り組み、平成21年（2009）に、金沢市、高山市、萩市、亀山市とともに、国の第一次認定を受けた。彦根市の計画では、市内の代表的な歴史的風致を、大名文化の継承、城下町の伝統、中山道と宿場町、山と信仰の四つとした。このうち、大名文化の継承と城下町の伝統については、住民の生活様式の変化と建物の経年劣化によって旧彦根城下のまちなみや暮らしが存続の危機にあるという認識にもとづいて立てられたもので、旧彦根城下の歴史的風致の維

持向上に積極的に取り組むことになった²⁷⁴。

旧彦根城下においては、高齢化が急速に進み、空き家が増加しているが、侍屋敷や足軽組屋敷、町家を守るため、旧彦根藩足軽組屋敷を市の文化財に指定して²⁷⁵、その歴史的価値を示し、修復にあたって行政から修復費用の一部を補助して、歴史的建造物の保護にとめている。また、空き家対策については、平成30年（2018）に彦根市空家等対策計画を定めて、空き家対策の指針を定めるとともに、空き家バンクの取り組みを積極的に活用して、そこに住みたいと思う新しい住民の獲得に努めている。とくに、旧彦根城下においては、小江戸ひこね町屋情報バンクの取り組みによって、旧彦根藩足軽組屋敷をローズスイーツ店として活用するという新たな活用事例が生まれている。



写真14 旧彦根藩足軽組屋敷辻番所（善利組）

注）彦根市指定文化財。

4 これからの旧彦根城下

日本は、現在、人口減少という大きな社会問題を抱えている。日本の人口減少に歯止めをかけることは難しく、22世紀には日本の人口が現在の3分の1に迫るレベルに縮小すると推計されている。こうした人口減少にともなって、日本国内のすべての場所を同じように維持・管理することが不可能となり、地方の再生方法として、コンパクトシティ化された中心市街地への人口誘導が考えられている。近世初期に日本各地に誕生した城下町は、軍事・政治・経済・文化などの多機能が集約された、まさにコンパクトシティであり、その歴史的伝統を引き継ぎ、歴史的資産が多く残る中心市街地が、今後、人口を誘導するコンパクトシティになることは間違いない。

ただし、中心市街地に人口を誘導する過程において重要となるのが、そのまちの個性で

²⁷⁴ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第10巻、248～253頁。

²⁷⁵ 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第12巻、94～95頁。

ある。コンパクトシティといえども、実際には、経済に比重が置かれるところもあれば、福祉に比重が置かれるところ、文化に比重が置かれるところなど、それぞれの拠点には、その拠点ならではの個性が生じ、人びとは、人生設計や自分の好みなどに応じて、居住する場所を選択するはずである。それぞれの拠点は、できるだけ多くの住民を獲得するために、その場所の歴史や伝統を重視して、他の拠点にはない個性にさらに磨きをかける。日本各地に、個性豊かなさまざまなまちが誕生するであろうことは想像に難くない。

彦根市においても、平成30年（2018）に立地適正化計画が策定され、コンパクトシティの取り組みが始まった。彦根市内に存在する四つの駅、彦根駅、南彦根駅、河瀬駅、稲枝駅を核に都市機能誘導区域を設定し、そのまわりに居住誘導区域を設けた。そのうち、彦根駅を核とする旧彦根城下については、彦根城の世界遺産登録に取り組むなかで、情緒や風情のある歴史的風致を維持向上させ、彦根ならではの風格あるまちづくりを行うこととした。これからの課題は、彦根城の世界遺産登録の作業を通じて、彦根城を彦根のまちづくりにどのように活かすかである。彦根城については、これまで、西国の諸大名の動きを抑える井伊家の居城としてアピールされてきたが、このアピールは、歴史愛好家の興味や関心を引くことはあっても、歴史に興味のない市民の心をとらえることは難しい。また、彦根城の軍事施設としての価値を彦根のまちづくりに活かすことも難しい。現在の彦根が軍都ではないからである。そこで、本稿では、彦根城と彦根城を中心に形成された彦根城下町の歴史を通観し、地元住民が彦根城や彦根城下町の何を残そうとしてきたのかを明らかにし、地元住民が大切に守り伝えてきたものをこれからの彦根の歴史まちづくりに活かそうと考えた。

彦根城下町は、慶長9年（1604）、彦根城の築城にともなって誕生した地方都市である。江戸時代を通じて、軍事、政治の中心地であった。19世紀後半に、日本の国家体制が大きく変わる中で、彦根城下町は軍事、政治の中心地ではなくなり、彦根城が消滅の危機に直面したが、住民たちが、江戸時代に井伊家を中心に武士たちがこの地を治めた歴史を伝える彦根城の存続を熱望し、明治天皇が永久保存を決めた。そして、この出来事が、彦根市街地に歴史都市としての個性を与えた。

彦根市街地には、明治時代に、教育のまちという個性とものづくりのまちという個性が付与された。しかし、昭和時代から平成時代にかけて、彦根市街地に存在した繊維工場が閉鎖されてなくなり、バルブ・仏壇などの地場産業の工場の郊外移転が進んだため、ものづくりのまちという個性が失われつつある。また、教育施設についても、市内に複数の大

学が存在してはいるが、旧彦根城下に位置しているのは滋賀大学経済学部だけである。また、旧彦根城下に存在していた近江高校が松原干拓地に移転し、彦根西高等学校が高校再編により他校に合併された。残念ながら、現在、旧彦根城下が全国有数の教育のまちであると主張できるほどの状況にはない。

旧彦根城下に最終的に残るのは、江戸時代の武士が文武両道にわたる修練によって統治者としての立場を守りながら、約3世紀にわたって安定した社会を保ち続けてきたという統治の歴史を有する歴史都市という個性であり、今後、井伊家中が学びによって平和を維持してきた統治の歴史を伝える彦根城や、江戸時代の城下町の姿を伝える伝統的なまちなみ、茶道や能、狂言、弓や薙刀といった武道など、城下町の伝統文化を活用するなどして、文化・観光拠点としての性格を強めていくことが彦根のまちを持続させる有効な方法となるに違いない。明治時代に、旧彦根城下に隣接する地に東海道線の彦根駅ができ、まちの中心に位置する彦根城の緑豊かな樹木や青々とした水をたたえた堀が維持され、昭和時代には、彦根城跡が都市住民や観光客が憩う都市公園となった。本稿の冒頭で紹介した、諸富徹氏がイメージするコンパクトシティの要素が、旧彦根城下には、揃っている。



写真15 彦根城の中堀

彦根城の世界文化遺産登録が実現した暁には、日本の江戸時代の城下町の暮らしや風情を日常的に体感できる文化・観光拠点としての途が確固たるものとなる。世界遺産に登録された彦根城を訪れた観光客の中から、彦根城や、井伊直弼が確立した一期一会のおもてなしなど、江戸時代に成熟し、今に引き継がれた伝統文化に魅力を感じ、リピーターとなる者が必ずや現れる。そして、城下町の伝統を受け継ぐ暮らしを自分もしてみたいと、旧彦根城下で暮らすことを望む交流人口が定住人口に変わっていくはずである。彦根に定住した人たちの中から、江戸時代以来の武家屋敷や町家を住まいとする人たちが現れれば、空き家対策の解決につながるし、所有者不明の土地の増加にも歯止めがかかるはずである。何よりも、江戸時代以来、旧彦根城下に伝わった都市ストックの有効活用になり、城下町としての伝統文化が継承される。

日本国内の世界遺産をめぐる観光についての研究を重ねてきた新井直樹氏は、「暫定リスト」に記載された世界遺産国内候補地においては、登録に向けた活動を進めるのと同時に、環境、景観条例制定や観光客受け入れ体制の整備や、地域住民の参加を得て環境や景観の質を向上させていくまちづくりの取り組みなど、地域資源の保護と活用を両立させた持続可能な観光地づくりを推進していくことが必要だと主張した²⁷⁶。彦根市においては、新井氏が必要だと述べる取り組みの多くがすでに行われている。彦根城の世界遺産登録を契機に、地元住民が主体となり、地元自治体が地元住民の思いを踏まえた施策をさらに展開し、旧彦根城下の歴史まちづくりを進めていくことは、万が一、彦根城の世界遺産登録がかなわなくても、旧彦根城下の衰退に歯止めをかけ、まちを将来に伝える持続可能なまちづくりに他ならない。歴史・観光拠点としての途は、彦根城を有する旧彦根城下の地域的特性を最大限に発揮できる、彦根の将来を拓く途であると確信する。

²⁷⁶ 新井直樹「世界遺産登録と持続可能な観光地づくりに関する一考察」（高崎経済大学地域政策学会編『地域政策研究』第11巻第2号、2008年）、53頁。

【参考文献一覧】

<書籍>

- 池内昭一『天下取りの知恵袋 井伊直政』、叢文社、1995年。
- 大久保治男『埋木舎と井伊直弼』、サンライズ出版、2008年。
- 大阪高等裁判所・財団法人建築研究協会編『彦根市指定文化財 旧西郷屋敷長屋門修理工事報告書』、大阪高等裁判所、1997年。
- 小野晃嗣『近世城下町の研究』（増補版）、法制大学出版会、1993年。
- 神田千里『宗教で読む戦国時代』、講談社、2010年。
- 宮内庁編『明治天皇紀』第4、吉川弘文館、1970年。
- 熊倉功夫編『彦根城博物館叢書2 史料 井伊直弼の茶の湯 上』、サンライズ出版、2002年。
- 熊倉功夫編『彦根城博物館叢書3 史料 井伊直弼の茶の湯 下』、サンライズ出版、2007年。
- 桑田忠親校訂『戦国史料叢書一 太閤史料集』、人物往来社、1965年。
- 創立一二〇周年記念誌編集委員会編『平安学園一二〇年記念誌』、平安高等学校・中学校、996年。
- 高野澄『井伊直政 逆境から這い上がった男』、PHP研究所、1999年。
- 高橋昌明『武士の日本史』、岩波書店、2018年。
- 檀上博『天下と天朝の中国史』、岩波書店、2016年。
- 長浜市史編さん委員会編『長浜市史』第3巻（町人の時代）、長浜市役所、1999年。
- 中村直勝監修『彦根市史』上冊、彦根市役所、1960年。
- 中村直勝監修『彦根市史』下冊、彦根市、1964年。
- 中村元麻呂・中村不能斎『井伊直政・直孝』、彦根史談会、1951年。
- 名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』1、吉川弘文館、2015年。
- 名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』2、吉川弘文館、2016年。
- 名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』3、吉川弘文館、2017年。
- 西川幸治『日本都市史研究』、日本放送出版協会、1972年。
- 西川幸治『都市の思想』上、日本放送出版協会、1994年。
- 野田浩子『井伊直政 家康筆頭家臣への軌跡』、戎光祥出版株式会社、2017年。

羽生道英『井伊直政 家康第一の功臣』、光文社、2004年。

彦根古文書同好会編『民部様御賄御用日記ー井伊直幸・青春時代の日々の暮らしー〔延享元年正月から六月まで〕』、彦根古文書同好会、2006年。

彦根市教育委員会文化財部文化財課編『彦江城関連資料集成 彦根城』、彦根市教育委員会文化財部文化財課、2014年。

彦根市史編集委員会編『彦根 明治の古地図』3、彦根市、2003年。

彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第6巻（史料編 近世1）、彦根市、2002年。

彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第8巻（史料編 近代1）、彦根市、2003年。

彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第2巻（通史編 近世）、彦根市、2008年。

彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第3巻（通史編 近代）、彦根市、2009年。

彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第10巻（景観編）、彦根市、2011年。

彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第12巻（便覧・年表）、彦根市、2013年。

彦根城博物館編『侍中由緒帳』1～15、彦根市教育委員会・彦根城博物館、1994年～2015年。

彦根城博物館編『彦根城の修築とその歴史』、彦根市教育委員会、1995年。

彦根藩資料調査研究委員会編『彦根城博物館叢書6 武家の生活と教養』、彦根城博物館、2005年。

彦根東高等学校校史編纂委員会編『彦根東高百二十年史』、創立百二十年記念事業実行委員会、1996年。

藤井讓治『日本の近世』第3巻（支配のしくみ）、中央公論社、1991年。

藤井讓治『戦国乱世から太平の世へ』、岩波書店、2015年。

藤井讓治『天下人秀吉の時代』、敬文舎、2020年。

藤田達生『天下統一』、中央公論新社、2014年。

藤田達生『信長革命 「安土幕府」の衝撃』、角川学芸出版、2010年。

藤田達生『藩とは何か』、中央公論新社、2019年。

増田寛也『地方消滅』、中央公論新社、2014年。

水本邦彦『徳川社会論の視座』、敬文社、2013年。

溝口雄三『中国の思想』、放送大学教育振興会、1991年。

本康宏史『軍都の慰霊空間ー国民統合と戦死者たちー』、吉川弘文館、2002年。

母利美和『幕末維新の個性6 井伊直弼』、吉川弘文館、2006年。

諸富徹『人口減少時代の都市』、中央公論新社、2018年。

矢守一彦『都市プランの研究 変容系列と空間構成』、大明堂、1970年。

矢守一彦『城下町のかたち』、筑摩書房、1988年。

吉田常吉『井伊直弼』、吉川弘文館、1963年。

吉田伸之『近世巨大都市の社会構造』、東京大学出版会、1991年。

吉原祥子『人口減少時代の土地問題』、中央公論新社、2017年。

渡辺浩『日本政治思想史－17～19世紀』、東京大学出版会、2010年。

<論文>

秋澤繁「太閤検地」、朝尾直弘ほか編『岩波講座日本通史』第11巻（近世1）、岩波書店、1993年。

新井直樹「世界遺産登録と持続可能な観光地づくりに関する一考察」、高崎経済大学地域政策学会編『地域政策研究』第11巻第2号、2008年。

伊藤鄭爾「日本都市史」、建築学大系編集委員会編『建築学大系』2（都市論・住宅問題）、彰国社、1960年。

岩城卓二「武士と武家地の行方」、高木博志編『近代日本の歴史都市－古都と城下町－』、思文閣出版、2015年。

浮田典良「明治期の旧城下町」、藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』、柳原書店、1989年。

奥田晶子「井伊直弼の茶の湯－一期一会の世界－」、彦根城博物館編『一期一会の世界 大名茶人井伊直弼のすべて』、彦根城博物館、2015年。

蔭山兼治「資料紹介 井伊家伝来古文書（近代文書）『第壱号 彦根御料所 彦根城一件留』」、彦根城博物館編『彦根城博物館研究紀要』第30号、彦根城博物館、2020年。

金行信輔「寛文期江戸における大名下屋敷拝領過程」、『日本建築学会計画系論文集』64巻516号、1999年。

小林隆「語り部たちのまなざし－彦根市民の伝承活動を素材として－」、神戸大学史学会編『神戸大学史学年報』第11号、1996年。

小林隆「自治体史の展望－「平成の大合併」にあたって－」、京都民科歴史部会編『新しい歴史学のために』第250・第251合併号、2003年。

- 小林隆『『新修彦根市史』(第十巻 景観編)の試みー「市民の市史」をめざしてー」、地方史研究協議会編『地方史研究』第62号第4号、2012年。
- 小林隆「彦根城下町の改造」、淡海文化財論叢刊行会編『淡海文化財論叢』第7輯、2015年。
- 小林隆「現彦根市域における近代の人口移動について」、彦根史談会編『彦根郷土史研究』第50号、2016年。
- 小林隆「彦根城下町形成史私論」、淡海文化財論叢刊行会編『淡海文化財論叢』第8輯、2016年。
- 小林隆「彦根城下町の復興」、淡海文化財論叢刊行会編『淡海文化財論叢』第10輯、2018年。
- 小林隆「井伊家家臣団の形成」、淡海文化財論叢刊行会編『淡海文化財論叢』第11輯、2019年。
- 小林隆「彦根城の保存と活用ー近代の彦根城ー」、淡海文化財論叢刊行会編『淡海文化財論叢』第12輯、2020年。
- 小林隆『『天正記』から読み解く豊臣秀吉の政治思想ー天下人とは何かー』、織豊期研究会編『織豊期研究』第22号、2020年。
- Kobayashi Takashi 「A Study on Improvement of the Local Image: Honor Recovery of Ii Naosuke」(『IWRIS2020』、2020年)。
- 齋藤純「近世前期、彦根城下町住民の来歴について(上)ー慶安二年「下魚屋町御改帳跡」の紹介ー」、専修大学学会編『専修人文論集』55、1994年。
- 齋藤純「近世前期、彦根城下町住民の来歴について(下)ー慶安二年「下魚屋町御改帳跡」の紹介ー」、専修大学学会編『専修人文論集』57、1995年。
- 田原総一郎「“私と彦根”」、『新修彦根市史第三巻付録 巻報8』、彦根市教育委員会市史編さん室、2009年。
- 玉懸博之『『天正記』から『太閤記』へー近世的歴史観の発生ー』、三鬼清一郎編『戦国大名論集』18(豊臣政権の研究)、吉川弘文館、1984年。
- 中井均「佐和山城の歴史と構造」、城郭談話会編『近江佐和山城・彦根城』、サンライズ出版株式会社、2007年。
- 野中勝利「近代の甲府城址における公園化の背景と経緯」、『ランドスケープ研究』76(5)、2013年。

野中勝利「近代における兵庫県による明石公園の拡張・整備と風致の位置づけ」、『公益社団法人日本都市計画学会 都市計画報告集』No.15、2017年。

野中勝利「近代の和歌山城址における和歌山県の借用による公園化と和歌山市の買収による公園化」、『ランドスケープ研究（オンライン論文集）』Vol. 10、2017年。

藤田達生「天下統一論」、織豊期研究会編『織豊期研究の現在』、岩田書院、2017年。

水本和美「紀伊新宮藩水野家下屋敷－新宿区水野原遺跡」、『月間考古学ジャーナル』514号、2004年。

矢守一彦「明治以降における城下町プランの変容」、藤木利治・矢守一彦編『城と城下町 生きている近世10』、淡交社、1978年。

【図版一覧】

- 写真1 彦根城天守 (12頁)
- 写真2 井伊直政公銅像 (44頁)
- 写真3 井伊家中の赤備え (46頁)
- 写真4 旧下魚屋町のまちなみ (57頁)
- 写真5 尾末町屋敷(埋木舎) (90頁)
- 写真6 井伊直弼朝臣銅像 (91頁)
- 写真7 玄宮園 (98頁)
- 写真8 玄宮園の馬場(春風埦) (99頁)
- 写真9 松原下屋敷(お浜御殿) (101頁)
- 写真10 西村捨三銅像 (113頁)
- 写真11 解体を免れた彦根城の建物 (121頁)
- 写真12 金亀会館 (134頁)
- 写真13 花の生涯記念碑 (141頁)
- 写真14 旧彦根藩足輕組屋敷辻番所(善利組) (147頁)
- 写真15 彦根城の中堀 (149頁)
-
- 図1 江戸時代の預治思想 (41頁)
- 図2 井伊家拠点の変遷 (43頁)
- 図3 井伊家の家臣構成 (48頁)
- 図4 佐和山と彦根山の位置関係 (55頁)
- 図5 古沢村小字図(部分) (60頁)
- 図6 御城内御絵図 (69頁)
- 図7 彦根御城下惣絵図(部分) (70頁)
- 図8 彦根城下の親町 (73頁)
- 図9 彦根城下町図 (79頁)
- 図10 彦根城の各エリア (82頁)
- 図11 井伊直弼の世界観 (93頁)
- 図12 広小路屋敷などの位置 (97頁)

図 1 3 近江国における県の変遷 (1 1 6 頁)

図 1 4 彦根御城下惣絵図 (部分) (1 1 6 頁)

図 1 5 明治 2 0 年代の彦根市街地 (1 1 8 頁)

図 1 6 町名変遷図 (1 4 2 頁)

図 1 7 彦根市の人口推移 (1 4 2 頁)

表 1 天正 1 1 年から天正 1 2 年までの動き (2 2 頁)

表 2 天正 1 3 年から天正 1 4 年までの動き (2 5 頁)

表 3 井伊家家臣の召し抱えられた時期と本拠地 (4 9 頁)

表 4 文政 1 3 年における家老・中老の家 (5 0 頁)

表 5 第 3 期に召し抱えられた家臣のうち分家の家数とその割合 (5 2 頁)

表 6 詰衆の下屋敷 (1 0 4 頁)

表 7 彦根町における人口の推移 (1 3 2 頁)

表 8 大正 4 年の彦根町における出入人口 (1 3 2 頁)

表 9 彦根市の世帯数と人口 (学区別) 1 4 4 頁)

表 1 0 平成 1 7 年における年齢別人口 (1 4 5 頁)